海外 ｛千九百四年の歴史的事件／外人の見たる日本の芝居｝ 新潮

中央公論

第二十年第三號

概目

▲政治宗教文學社會及其論評▼

○教訓文學一面の價値○日露開戰に於ける露國の失策（松井柏軒）○從軍外國記者（渡邊生）○當世美術家氣質（入面生）○お笑ひ草（道聽子）○文士初對面錄（天中天）

○につこり集（絳雲）○歌（尾上柴舟）○二月の文壇（孤村）○淺草公園（二葉）○夜の商賣（飛燕客）○鬼面魘語（醉美生）○從軍餘談○俳句（大谷繞石）○口繪春の喩

▲趣味を博くし内外思想の最健なるを蒐む▼

THE CENTRAL REVIEW

明治卅一年一月廿九日第三種郵便物認可
每月一回一日發行 明治卅八年三月一日

南條博士 高楠博士共著
佛領印度支那 ▲新版 ◎價九十錢 ◎郵税十錢

トルストイ伯著 加藤直士先生著
我宗教 ▲第六版 ◎價七十五錢 ◎郵税十錢

海老名彈正先生著
基督之大訓 ▲第三版 ◎價六十錢 ◎郵税十錢

高橋鐵太郎先生著
海洋審美論 ▲第二版 ◎價五十錢 ◎郵税八錢

楠龍造先生著
他力宗教論 ▲第二版 ◎價三十五錢 ◎郵税六錢

濟口惠障先生著
心靈上之修養 ▲第四版 ◎價四十錢 ◎郵税六錢

南條。井上。村上。三博士著
佛教講演集 ▲第五版 ◎價三十錢 ◎郵税四錢

米國體育家ベーグマン氏著
強肺術 ▲第十一版 ◎價三十錢 ◎郵税四錢

英國博士エドウキン、アーノルド氏著
亞細亞之光 印刷中 ◎價五十錢 ◎郵税六錢

中央公論第二十年第三號目次

春　の　喩



ボッティチェルリ筆

中央公論



第二十年
第三號

衆議院と大審院の衝突

今や立法部と最高司法部と公法上に於て端なく見解を異にするの一事實を生じたり、而して此の結果として同一資質のものにして一は其の貴重なる公地位を喪ひ、一は之を維持するを得たり、是れ注意すべき一現象として吾人の論評すべきものと考ふ

其の事實は下の如し

新潟市撰出の代議士白勢春三氏は、新潟電燈會社の監査役たるがため、其の反對派より衆議院議員撰擧法第十三條第二項に依りて議員資格無きものなりとの訴訟を提起せられ、大審院に於て無資格者と判決せられ、次點者たる丸山嵯峨一郎氏補缺として代議士に當撰したり、新潟電燈會社は公私一般の電燈を供給し、新潟縣廳へも亦電燈を供給せり、而して所謂提起者と大審院とは、之を以て撰擧法の所謂政府のため請負を爲すものと解釋したるなり

大審院判決の實行せられたる後、衆議院に於て代議士荻野左門氏は代議士佐竹作太郎、根津嘉一郎兩氏の資格に就て異議の申立を爲したり、其の理由は、佐竹氏は東京電燈會社の社長、根津氏は同取締役なるか故に、白勢氏と同じく失格者たるべしといふにあり、而して衆議院の特別委員會は審査の上、兩氏の資格缺くる所無しと決定し、而して二月十六日の衆議院本會議は之を可決して、兩氏共に公地位を失はざるを得たり

新潟電燈會社と東京電燈會社とは、其の營業に於て

同一資質のもの也、共に公私一般の需めに應じて電燈を供給し、新潟電燈會社が其の所在地の縣廳にも電燈を供給するが如く、東京電燈會社は其の所在地たる各官省にも裁判所にも議院にも電燈を供給せり、而して其の監査役たるものは代議士の資格無しとし、社長又は取締役たるものは資格有りと爲すは是れ全然矛盾なり、然り大審院と衆議院とは全く衝突せるなり、吾人の茲に論評するは實に二者の是非如何に在りとす

吾人は猶豫なく斷言す、衆議院の決定正當にして、大審院の判決は全然不當なりと

暫らく常識よりいふも、公私一般に電燈を供給するものを以て政府のため請負を爲すとして、其の關係者に代議士の資格無しとするが如きは實に驚ろくべき謬見といはざる可らず、若し然らずといはゞ、各官省に新聞紙雜誌を賣る（月極購讀者として）新聞社雜誌社の社員も亦代議士たる資格無きものと做さゞる可らず、天下豈斯の如き非常識のことあらんや、蓋し立法の精神は決して斯の如くならざる也

民法及び商法よりいへば、電燈會社を以て政府のため請負を爲すものとするの不當なることは、大審院も亦之を認めたるが如し、唯だ大審院は撰擧法の受負なるものを解して、民法商法の請負と全く別個なりとし、新たに解釋を下して而して此の非常識的判決を爲せし也、而して此の誤謬なることは『公法中特有の語として特有の意義を示さず私法中の語を引用したる時は其の私法の語の意義に由て解釋するを原則とす』る學說に反するに於て明瞭也、大審院は何ぞ斯の如き睹易き誤謬に陷れる乎、想ふに是れ彼の教科書事件に於て一び輕卒驚ろくべき判決を下したりしと齊しき過誤なるべし

衆議院の解釋は法律論として實に間然する所なし、其の判決理由書に曰く

本件に於ては衆議院議員選擧法第十三條第二項の政府の爲請負を爲す法人とあるは民法第六百三十二條に規定せる請負と同意義なるや、將た民法規定以外の意義を有するものなりやを審究するを緊要なりとす

一凡そ公法中特に公法の語として特有の意義を示さずして私法中の語を引用したるときは其の意義と私法中に用ゐたるものと同一なりと

異るを當然とす

一請負なる法語は法律上一定の意義を有し即ち民法第六百三十二條中に掲げたる定義の通にして他に公法中別段の定義を有せしめたる例なし

一衆議院議員選擧法を通覽するに民法刑法商法及破産法の法語を用ゐたる場合少からず殊に第二章選擧人被選擧人の資格に關する規定に於て然りとす然るに此の數多の法語は孰れも其の關係私法の定義なるに特り請負なる法語のみ民法商法の定義と異なる意義を有するものと解釋するは失當なり

一商法第二百六十四條に商行爲を列擧したる第三に電氣又は瓦斯の供給に關する行爲とあり其の第五に作業又は勞務の請負とありて電氣の供給と請負なる行爲と明かに區別せらる

右の諸點を綜合するに衆議院議員選擧法第十三條第二項の請負なる法語は民法及商法に規定する所と同一意義を有するものと規定せざるを得ず

本件東京電燈株式會社の營業は電流を供給するものにして民法の所謂仕事の完成を約し其の仕事の結果に寄り報酬を受くるものにあらず況や該株式會社は其の電流を公衆一般に供給するを以て目的とするものにして偶々政府の需要に應ずるに過ぎざれば衆議院議員選擧法第十三條第二項の政府の爲請負を爲す者に非るをや

此の解釋は極めて妥當にして又實に立法部の決定たるに於て、大審院――司法部は總て此の解釋に遵由するを要す、白勢氏に對する大審院の判決の如きは斷じて之を援據すべき司法上の先例と爲す可らず、然り、誤謬なる先例として之を再びす可らざる也

衆議院の此の決定のため、白勢氏は復職することを得ず、從つて丸山氏は資格を失ふとなし、大審院の判決は假令失當と雖も其の効力を失ふとなければ也、議院法第七十九條あるがため、衆議院は遡りて白勢氏に對する大審院の失當なる判決を審査するとを得ざれば也、白勢氏は實に憐れむべし、而して是れ大審院過誤の結果也、大審院たるもの將來深く愼戒を加へざる可けんや

教訓文學の一面の價値

小說又は脚本の作家の識見も、評家の鑑識も共に著るしく進步せり、今更古風なる勸善懲惡主義を以て作物の唯一目的とするの愚なる、三尺の童兒も之を解すべし

然れども單に或る人物の性格を描寫し、或る運命を

直寫するのみにては、假令其の描寫巧みと雖も未だ上乘と稱す可らず

最も上乘なるは明白に善良なる教訓を與ふるものならざる可らず『嫉妬は人を盲目にし、盲目は正邪を併せ滅す』といふが如き消極的教訓ならずして『正しき義者は假令一時迫害せられ苦痛を受くるも、必らず最後の優者たり』といふが如き積極的教訓を與ふるものなるを要す、讀者(又は觀者)に快感と慰安とを與ふるものならざる可らず

ヴイレスチヤギンの戰爭畫は、慘憺たる光景を描き、人をして慄然として戰爭の恐るべきを感ぜしむ、此の教訓は正さしく善良なり、去れど消極的なるを奈何せん、人をして一種の不快を感ぜしむるを奈何せん、寧ろ探幽の虎渓三笑圖や沈南蘋の春色駘蕩の畫の人をして快感と慰安とを得せしむるの好きに如かんや

請ふ演劇に就て看よ、ハムレツトやマクベスは素よりシエクスピアの傑作なり、否、古今有數の傑作なり、而かも全齣を見終つて人をして一種悽愴の感に耐えざらしむるは何ぞ、人をして懊惱愁苦を感ぜしむるは何ぞ、其の幕中の人物善惡邪正を問はず一併に慘死するが故ならずや、忠臣藏は四十七士慘苦を極め、或は妻を去り子を殺すに至るも、而かも觀者をして無限の感興を覺えしむるは他なし、遂に主公の讐を獲て其の全目的を達するが故也、身榮えずして不幸に死するも義士として盛名を千秋に傳ふるが故也

八犬傳は幾多の難境を錯出して其の主人公を困苦窮厄に陥るゝも、彼等の堅忍不抜なる、遂に百難を排し、殊功は全くして相榮ゆ、是れ此の書が一面には讀者に多大の感興を與ふると共に、一面には善良なる教訓を與へて、永く珍重せらるゝ所以ならずや

近時歡迎せられ、現に劇場にも上せられたる田口掬汀作の女夫波も、其の可憐なる女主人公が遂に悦ぶべき幸福を得たるの一點こそ、成功の原因なる可けれ

假令何樣の評論ありとも、最も汎く世上に歡迎せらるゝ小説は黒岩涙香と村井弦齋との作(或は飜譯)なり、此の兩作家成功の原因は、啻だに其の文章の平易

簡明なるが故のみに非ず、又理義の明白にして毫も不自然する所なきが故のみにも非ず、實に義人正者榮えて邪人惡徒の亡ぶる（而して多くの作家が極めて平板なりと侮る）に終るが故ならざらんや

夫れ『芽出度〳〵』の終局は、決して多くの作家評家の言做すが如く無價値のものにあらず、第一は讀者（又は觀者）に快感を與ふ、慰安を與ふ、此の二事實は作物として上乘の資格なり、況んや義人正者遂に榮ゆるの運命を描くは、讀者（又は觀者）をして義を踏み正に就きて萬難を排すべき善良なる精神を鼓舞せしむるものなるをや、戀愛を神聖と稱して漫りに青年少女の情緒を描すと百端、而かも曾て人の純潔崇高なる良心の琴線に觸れ得ざるもの丶如き、文藝上斷じて等閑すべきものに非ず、吾人は近時の作家の往々玆に不注意なるを歎ず、故に此の言を爲す、彼の壯士俳優川上が、ヤクベス、ハムレットの飜案物及び王冠に成功したるが如きは、單に西洋劇の一斑を窺はんとする一群の好奇心に投じたるがためのみ、其の劇を咀嚼して眞に快感と慰安とを得るものあるには非ず、諸より純良なる教訓を享くる者あるにも非ず

更に記せよ、文藝上の作物の最良なる目的は、疲れたる者、愁ふる者、苦む者、惑ふものに慰藉と快樂とを與へて、其の間に純良なる教訓と健全なる鼓舞とを得さしむべきものなるとを、之れ甚だ非文藝的見地なりと雖も亦教訓文學一面の價値ならずとせんや（梧葉）

武士道の將來

島地默雷

武士道は封建時代の遺物であって、進歩發達して將來に存續すべきものではないなど丶云ふ者があるけれど、斯は甚だ思はざるの論であらうと思ふ、元來開國以來自然に馴致せる吾國民の氣魄とも言ふべき、即ち諸外國に對して常に尤も誇つて居るところの大和魂なるものは、要するに今謂ふところの武士道に外ならぬので、是れあるが爲に吾國も

列强の間に交りて、畏敬せられつゝあると言ふ有様であつて見れは、却々以て封建時代の遺物などゝ云つて、骨董的に装置しておくべきものでなく、所謂千代八千代までも盡きせぬ吾國威と共に、永く々々存續する樣に意を用ひねばならぬことであらうと思ふ、元來武士道なる者は、廉恥を重んじ、潔白を尙ぶ者て。或ば武士の約束二言なしとか、又は武士は食はねど高楊枝とか、其外武士は物の哀れを知るとか、人は武士花は櫻とか、種々の諺もある程に尊ばれて、此武士道と云中には、只向ふ行の强ひ猪の武者計りでなく、私心我情を離れて、公明正大潔白の心事を懷き、强きを挫き弱きを扶くる、義俠に富みたる處が、武士道である、故如此の心事は人の最も美德とすべき所であれば、何處迄も此精神は、我國民の精華として、養成發達せしむべき者と思はる、現に目下の日露戰爭に於て、啻に連戰連勝の武威を世界に轟かせしのみでなく、或は負傷兵に對し、或は非戰闘員に對し、或は投降者に對する、所謂戰時道德なるものが、上將校より下一兵卒に到るまで、能く普及して居て間然するところなきに到りては、曾ては黄禍論を唱へた歐米人の口からして、[illegible]賞讚措く能はざらしむる

と云ふ始末に成り來つて居るのは、これ取りもなほさず、吾武士道の善美に發揮せられだのであつて見れば、一般敎育者も確に其功力を認めて、吾國民の精華は武士道に在りとせられて居ることであらうと思ふ、して是れは、今後必然に起るべき軍備の擴張と共に、其精神たる武士道の進步發達と言ふことも、また隨て忽にすべからざることであらうと思ふ、又果して武士道なるものが、今後次第に發達すべきものとすれば

世の進步と共に武士道も亦其時代々々に應じて變遷すべきものであらうか

と云ふ問題が起て來る、なるほど之を昔時の狭量なる思想に驅られて居た時に比較して見ると、今日の摸樣はよほど變て來て居る事が多數あるべしと思はる、例へば、敵味方共に文化の普及した今日は、俘虜に對しては殆んど賓客の禮を取り、特に赤十字社の樣なものが出來て、病傷兵に對しては、敵味方を論ぜず一視同仁に治療を施すと言ふ樣な有樣であるから、よほど昔しとは變て居るに相違はないけれども、要するに之等は其形に於て變化せしまでのものであつて、其精神に到りては、所謂恥を知るは勇に近しと言ふのが武士道の本義で、此の根本精神の義に勇み忠を盡すと云其

大本だ萬古不易てあらねばならぬと思ふ、そして此の

武士道なるものと佛教とは相容れざるものであるか、否か、若し相符合する點があるとすれば、佛教中の如何なる教と貢緣が深いか

と言ふ樣なことを考へて見るに、勿論佛教は廣く世界的なものであッて、武士道は近く大和魂を養ふ法で狹く吾國民に限ると言ふ樣な、範圍に廣狹の差もあり又武士道は主として義俠廉耻を尊び佛教は萬機に應じて衆德を指示する者である故全國に非る事は勿論であるが亦決して相容れざるものでもなくて、頗る吻合するところかある樣に思はれる、而して佛教中でも特に禪の活機と眞宗の報恩と言ふことが、尤も武士道と相合ふ樣に思はれる、即ち彼の禪の喝棒行事なるものは、釋迦達磨等の佛祖をさへも罵倒して憚らないと言ふ、頗る快心の教であるから、進むを知て退くを知らず、額に矢は立つとも背には立てじと言ふ勇壯活潑の武士道と能く合體するところがある、それで古來武士に禪機悟達の人の少なからざりしも決して偶然ではないのである、それから眞宗の報恩なる觀念は、絕對的に佛力に一任して安心立命した後、動靜云爲一に佛陀の命に隨順して、些も私念を挾まざる純潔無垢の思想であるから、恰も武士が君命にこれ從順して、一身の安危を思はず、一家の利害を顧みず、死を見る歸るが如き誠忠の觀念と、能く一致するところかあるのである、此事は現に眞宗七高祖の一なる曇鸞大師の言にも夫菩薩歸〻佛如〻孝子之歸〻父母〻忠臣之歸〻君后〻動靜非〻已出沒必由〻等と有て上佛陀に歸命するの心と君父に忠孝するの心とは全く同一としてある程の事である、以上は最も恰當なるものを擇んで、禪と眞宗との二宗を舉げたのであるが、元來佛教は無我を本義として居るので、無我とは我即ち私慾に打克つことであるから、恰も私事を忘れて公に殉する武士道と能く會ふところあるからして、凡て佛教と武士道とは兩々相待つて吾國民氣魄の精華を發揮すと云ふて宜いのである、それから此の

武士道なるものが泰西文物の輸入につれて、多少變遷すると同時に、また追々薄弱になり行くの傾きはなきや

と慮る人がある樣であるが、是は實に尤も至極なことで、決して杞憂ではなからうと思ふ、獨り武士道のみでなく、すべての社會人心に變動を來しつゝあること

であるが、近時却々盛んに一部の人に依りて唱へられて居る彼の社會主義の樣なものも、能く〳〵用意を注がないと云ふと、爲に君父を重んずるの念が薄らぎ、隨て忠孝の精神も沒却してしまう樣なことになるまいものでもない、勿論一槪には言はないけれど、歐米の社會組織は、個人が主となりて居るから、吾國の如き君臣父子夫婦と言ふ樣な關係の上に重きを置いて居る社會組織とは、其根本を異にして居るので、ドーも一も西洋二も西洋と心醉してしまうと云ふことは、實に寒心すべきことであらうと思ふ、それで泰西文明の輸入は、物質機械等の上には充分採用の必要あることは無論であるけれども、精神道義の上に就ては、餘程注意して新駁なる得手勝手の思想を導く邪說横論は寧ろ輸入を防ぐと云ふほどの用意が肝要であらうと思ふ、國家を保護するの精神、君父に事ふるの道義心に於ては、吾國固有の敎にて充分であッて、決して新來の者を仰ぐの要はなからうと思ふ、世間往々にして忠孝の道を非議したり、其外吾國從來の道德を批難するものがある樣であるが、之等の人は多分吾國の精華とも言ふべき武士道までも、彼是言議することであらうと思ふが、斯ふ言ふことは決して自然の成り行きに一任すべきでなく、世の敎育家宗敎家等、社會の木鐸を以て自ら任ずるの人は、常に細心に注意を怠らぬ樣にせねばならぬことであらうと思ひます。

武士道と佛敎との關係に就て

文學博士　南條文雄

此題に就ては島地村上二氏の論說ありと聞く、然れば余復た何をか言はん、然れども是非一文を草せよとの事なるより、單に平生思ふ所を略記して其責を塞がんとす。

世人常に言ふ、佛敎は慈悲を本とす、故に武士道に於て裨益なきのみならず、却て士氣を沮喪するの恐ありと、此は一を知りて二を知らざる皮相の見を以て言ふ者なることは、苟くも佛敎の大綱要領のみなりとも聞き得たる者は、皆能く之を知る、即ち慈悲に對する智慧、攝受に對する折伏、攝取に對する抑止と云ふ語ありて、遂に一殺多生の理を談ずるに到る、已に因果の道理を確信し、煩惱の私心より發起する所の身口意

の惡業を斷滅し、菩提の妙果を證得して自利々他せんとする公心ある者は、其勇氣固より尋常人の及ぶ所に非ず。

本邦に於て佛教主義の法文の上に躍如たるは、無論聖德太子の十七憲法なり、其中に實に左の條あり。

二曰、篤敬二三寶一、三寶者佛法僧也、則四生之終歸、萬國之極宗、何世何人非レ貴二是法一、人鮮二尤惡一、能敎從レ之、其不レ歸二三寶一、何以直レ枉。

六曰、懲レ惡勸レ善、古之良典、是以無レ匿二人善一、見レ惡必匡、其諂詐者、則爲下覆二國家一之利器上、爲下絕二人民一之鋒劒上、亦佞媚者、對レ上則好說二下過一、逢レ下則誹二謗上失一、其如レ此人、皆無レ忠二於君一、無レ仁二於民一、是大亂之本也。

九曰、信是義本、每レ事有レ信、其善惡成敗、要在二于信一、君臣共信、何事不レ成、君臣無レ信、萬事悉敗。

此第九條の如きは、華嚴經の信爲道源功德母云云の意に非ずや、蓋し聖德太子終身の擧動は、大無量壽經に說く所と符節を合はすが如し、此經は舒明天皇の時、僧慧隱をして宮中に講ぜしめたまひしより見れば、其前代たりし推古天皇の時も已に之を讀誦玩索せし人ありし事疑なし、經に曰く。

志勇精進、心不二退弱一、爲二世燈明一、最勝福田、常爲二導師一、等無二憎愛一、唯樂二正道一、無二餘欣戚一、拔二諸欲刺一、以安二群生一、功慧殊勝、莫レ不二尊敬一、滅二三垢障一、遊二諸神通一。

是れ豈武士道の極意に非ずや、如之佛敎の輪回轉生の說、亦武士道をして一層其斷行を强からしめしものゝ如し、即ち楠公兄弟の七生報國の申合せは、今や人口に膾炙して、之を知らざる者なきに到れりと雖も、此思想の佛敎に出でたることを知らざるものなきに非ず、故に煩しきを厭はず左に太平記の一節を抄錄すべし。

正成座上に居つゝ、舍弟の正季に向て、抑最後の一念に依て、善惡の生を引と云へり、九界の間に何か御邊の願なると問ければ、正季からからと打笑て、七生まで只同人間に生れて、朝敵を滅さばやとこそ存候へと申ければ、正成よに嬉しげなる氣色にて、罪業深き惡念なれども、我も個樣に思ふなり、いざさらば同く生を替て此本懷を達せんと契て、兄弟ともに刺違て、同枕に伏にけり。

軍神と呼ばるゝ廣瀨海軍中佐の正氣歌にも

嗚呼正氣畢竟在二誠字一　呶々何必要二多言一

誠哉々々斃不レ已　七生二人間一報二國恩一

とあり、又辭世にも

七生報レ國　一死心堅　再期二成功一　含レ笑上レ船

とあり、出師表に鞠躬盡力死而後已とあるは全く過去未來を談ぜざる儒敎主義なり、諸葛の死は遂に蜀漢の滅亡を見るに到れり、我が武士道は三世因果の佛敎を得て、身は斃れても精神は依然たり、故に七生までも人間に生れて、本懷を遂し、國恩を報ぜんと言はしむるに到れり、已に七生の報國を期す、此精神は即ち至誠の心なり、此心を神とし、此心を佛とす、此心即ち天壤無窮の皇祚を翼贊する、五千萬の臣子忠孝義勇の大道心に非ずや、余は常に軍人と否とを論ぜず、此事を以て談柄とし、啻に戰爭中の後援となすのみに非ず、將來ますく此道を明かにせんと欲する所なり。

眞宗に於ては往相回向還相回向の談ありて、信心決定の時已に其心は正定聚不退轉の位に住し、命終れば直ちに無量壽無量光の佛果に進み、穢國に還り來りて人天を濟度する事は、釋迦牟尼佛の化導の如しと云ふ、此信心の堅固なること金剛の如しとす、我行精進忍終不悔の佛心即此信心なり、故に死を視ること歸るが如き決定心あらしむ、因て余は信ず此を以て武士道を奬勵するに足るべきなりと。

本號には島地、村上、南條三氏の武士道に關する意見を掲載する筈なりしが、村上氏のは已むなき事故の爲め本誌編輯の間に合はず、之を次號に廻すことゝせり。

本誌は武士道に關する諸大家の高見を叩き聊か思想界に貢獻するところあらんことを期す

△時局より見たる武士道　井上哲次郎氏
△武士道と今後の敎育　戸水寛人氏
△武士道に就いて　渡邊子爵
△武士道の懷古　根本通明氏
△武士道は基督敎に酷似す　本多庸一氏
△武士道と人格の觀念　綱島梁川氏
△武士道と歌　坂正臣氏

以上は既に掲載せり敢て江湖の一讀を乞ふ

東亞の經營と醫術の普及

醫學博士　片山國嘉

日本が歐米の文明を輸入して、今日の如き國運の隆盛を來せるもの、其原因多々あるべしと雖も、之が先驅をなしたるものは實に醫術なりといはざるべからず。醫術は常に文明に伴ひて入り、文明に伴ひて發達するものなることは歴史の明かに證明する所なり。

支那は已に遠き古に於て文物の發達をなし、日本の如き彼より學びし所決して少々ならざるなり。醫學に於ても彼の傷寒論又は漢法醫學を取つて之を學びしと雖も日本の漢法醫學は其本家たる支那よりも遙かに大いなる發達を遂げたり。況んや日本が泰西の醫學を採用して迅速なる進歩をなしたる今日より見れば、現今の支那には全く醫學なしといふも決して過言にあらざるなり。吳汝綸に向て支那の醫學教育の現狀如何と問へるに、支那にては醫術の稽古なくして醫書を讀み、讀書によりて直ちに醫師となる、診察又は施術するの技能に至つては些かも之を有せざるなりと。かゝる情勢なれば支那の病患者は實に憐れむべき狀態にあるなり。正しき治療だに受けなば直ちに全癒すべきものが、醫師の惡しきによりて死し、又は死せざるまでも無益の苦痛を受けざるべからざる實況なり、日本の如き醫術の進歩したる國の見地より考ふれば、實に情けなき有樣といはざるべからず、支那の開發はよく人の口にし、筆にする所にして、之をなすの方法又頗々あるべく、着手するの方面又多々なるべしと雖も、予は之を日本の歴史より考へ、之を醫術と文明との關係に省みれば、支那の開發も亦醫術の輸入より初め、之をして文明の先驅たらしむるは最も有力の方法たるべきを信ずるものなり。醫術の普及は一方には病患者の苦痛を減じて人道の實行となり、一方には文明の先驅となつて支那開發の端緒を開く、我國人たるもの一日も之を忽にして可ならんや。

然らば之をなすの道如何。先づ醫術をして普及せしむるの機關を設くる必要あり、是れ吾人が一昨年に於て同仁會なるものを作りたる所以なり。之を仁道といふは其一面より見たる觀察にして、他の一面には文明の先驅となり、從て支那と日本との交際、及び商工業の發達に大關係あることを忘るべからず、今日我國人が

支那に渡りて其事業を經營せんとするに其最も恐るゝ所は病患にあり、彼地には傳染病多し、而して良醫なし、一旦疾病に罹らば如何にすべき。此恐怖は多くの人をして渡淸して事業を起すの念を中絶せしむ、若し醫學にして進歩せばかゝる不安心は自ら消滅し、彼我の貿易益々隆盛となるべきや必せり。之れ彼我の社會的、國家的の大利益にあらずや。

其目的や斯の如く正大なり、其事業も又偉大なるを以て之に要する資金も亦僅少なるを得ず、僅少の資本を以て此偉大なる事業を經營することは人間のなし能はざる所なり、資金のことを一考すればかゝる事業に向ては容易に手を下すこと能はず、されど着手せざれば何時までも時期は來らざるなり、之れ吾人が同仁會を設けて其端緒を開きたる所以なり、而して此事業の前途は頗る遼遠なるを以て其基礎を堅固にせざるべからず、半途にして廢止するが如きことあるべからず、又種々の議論生じて當初の目的まで變更するが如きことあるべからず、依て吾人は此同仁會を以て財團法人となしたる所以なり、財團法人とすれば其目的は變更せられず、初一念は貫徹すべしと意を決したるなり、資金なきに財團法人といふは少しく滑稽の感なきにあらずと雖も初一念を貫徹せんとの志よりかくなしたるなり、先づ法人の形をとつて其基礎を固め其目的を追うて進まんとするなり。而して此會の成立後間もなく日露の開戰を見たるを以て此會のために資金を投じ、此會の事業を助けんとするには最も人の躊躇する時期即ち此會の爲めには最も不幸なる時期に遭遇したるなり、昨年の一月二月頃より戰爭の噂次第に高く、國民は皆時局に向て熱中するの際なりしを以て、此會の目的に向ては何人も不贊成の人なかりしと雖も、其基礎をなす資金を投ずる人は極めて僅少にして非常の困難を極めたり、されど吾人は熱誠以て此事業に盡したるの結果資金は集まらずと雖も徐々として歩を進むることを得たり、近頃議會にて淸韓に於ける衞生に關する建議あり、多數の贊成者あるを以て見るも輿論が此會の必要を認むること疑を容れざるなり。

而して此事業の如き醫學に關することなれば吾人醫師のみに經營せしむべきものゝ如く解せらるゝあらば之れ大いなる誤りなり、此れ日本國民が淸韓人を救濟する心を以て國民全體の努力すべきものなり、醫師のみにて成就し得べきものにあらず、國民全體が醫師を使用して其局に當らしむるのみ、其背後には全國民の

力あらざるべからず、吾人の希望する所は實に我日本國民全體の盡力にあるなり、又滿韓人と雖も此會の性質を了解せば、充分に力を添ふべく、又添へざるべからざることゝならんと考ふ。幸に戰爭は連戰連捷にして戰後經營の着手將さに近きにあらんとす、日本國民たるもの戰後經營の一端として、同情を此會に寄せ、以て此會の成功を計るは最も有効にして眞面目なる經營の方法たるべきを信ずるものなり、

同仁會の事業は一種の赤十字事業なり。今日の赤十字社は戰時の事業にして此同仁會の事業は平時の赤十字社事業なり、平和事業の成功を成就する上より觀すれば決して赤十字社の事業に劣るものにあらず、國民たるもの其職の何たるを問はず、其業の何たるを論せず、赤十字事業に盡せると同一の熱誠を以て此會に盡力せられんことを希望す。之を事業の側より見れば少しく資本を投じて、實行さへ伴ひば、其結果の善良なることは瞭々たり、事業の困難―困難は多々あるべきも――の如き論ずるに足らず、後援だにあれば之を成功せしむるに足る。而して現今は最も大切なる時機なり、戰後といはず、戰時と雖も資金だにあらば着々之を實行すべし、吾人は已に此事業を企てたり、豈に多少の勞苦を厭ふものならんや、只我國民の後援なくしては無錢旅行の事業をなすこと能はず、清、韓、滿我等の事業をなすべき地は廣大にして其前途は實に有望なり、我國民たるもの一日日を緩うすれば一日の後れあり、速かに奮て此事業に助力せられんことを切望して止まざるなり。

而して予はわが全國民中特に宗教家諸氏の活眼を開いて此事業に盡瘁せられんことを願はざるべからず。歐米の宗教家は昔より此事業に類するが如きことを獨力にて實行せり、彼地の宣教師は日本人の未だ足踏み入れしことなき如き地に入りて、病院を作り、醫藥を裂し、以て幾多不幸なる病患者を救濟せり、日本の宗教家は社會事業を視ること極めて冷々、今日まで何等顯著なる事業を經營したることなし、此事業の如きは寧ろ宗教家の率先して經營するは當然なりしならんと考ふれども日本の宗教家は之をせざりき、宗教家はかゝる事業に得意ならずとすれば自ら手を下して之を經營せざるもよし、已にかゝる事業の成立したる以上はたゞ力を添へて此事業の成功を助け、以て歐米の人に讓らざらんことを勉むれば可なり、之を人種の上より見、之を言語の上より察して滿韓人に對する吾人の施

設は彼等歐米人より遙かに便益なる地位にあると論を俟たず、同一の力を用ふれば吾人は遙かに善良なる結果を得べし。從來外國宣敎師等が多大の費用と勞力を以て甚だしき成功を贏ち得ざりし所以は吾人明かに之を知るを得るを以て、吾人其轍を踏まずして進めば此事業の成功すべきは決して疑あるべからず、故に我が全日本の宗敎家たるものゝ同心協力、宗派又は宗門などの狹隘なる見を捨て、此事業を成功せしむれば、これやがて一大菩薩行にして又宗敎家がなしたる一大社會的事業なり、以て歐米人に對して決して耻づる所なかるべし。願はくは我國民特に宗敎家諸氏の助力によつて此事業を成功せしめ、以て東亞經營の實を擧げられんことこれ予の熱誠なる希望なり。

日露開戰に於ける露國の失策

松井柏軒

日露開戰以來早くも既に一ヶ年を過ぎぬ。此の間の事實を綜合し又解剖して觀察するに、露國の失策實に甚だしきものあり。吾人今之を指摘して一は世の批評家殊に史論家に質し、一は遙かに露國官民の反省を促さんと欲す

露國第一の失策は、日本國民の意向を誤解したるに在り、直截に之を言へば。日本は此の戰役を以て國家生存上已む可らざるものとし。國民皆以て己れの戰ひと爲せるも。露國に在ては單に『政治上の戰爭』に過ぎず。更に適切にいへば少數なる野心政事家の慾望より出でたる戰爭のみ、抑も明治二十八年日本が淸國より遼東半島を割取せしに當り。露國主となりて獨佛兩國を提げ。日本に迫りて之を放棄せしむるや。日本國民は皆臥薪嘗膽を叫べり。特に露國が淸廷を脅迫し欺瞞して旅順口大連灣を租借するや。日本國民の露國に對する怨恨は益々深く且つ牢固を加へぬ。勿論日本政事家中には。露國と抗爭するを不利とし。寧ろ之と提携せんと希へるもの無きに非ず。然れども國民の多數は斯の如き希望を無耻として怒れり。參謀本部は十年計畫を建てゝ海陸軍を擴張し。東洋に於て露國を擊破するを以て其の最大目的としたりき。而して彼の日英同盟の如きも素より深慮ある政事家が露國に當らんが爲め締結したるものとは言ふを得ざるも。少くとも

(偶然ながら)對露の最大有力なる援助となりしとこ及び日本政事家が之を利用するに躊躇せざりしとは蔽ふ可らず

且つ朝鮮との關係は。日本に於て實に神功皇后以來の宿題にして。所謂歷史的大問題なり。若し強力にして野心ある者(喩へば露國の如きもの)に之を領有せらるゝに於ては日本の安全は大に壓迫せらるゝが故に。日本は其の存立上必らず全力を盡して之を爭はざる可らず。然るに露國の政事家は此の事態を十分に知悉せざりしが如く。輕々しく日本を凌辱し挑發して竟に砲火を交ゆるに至りしは。實に甚だしき失策なり。國民皆戰ふ處の日本に當るに。未だ何のために戰ふやをすら知らざる露國人民を以てせんとす。勝敗の決始めより知るべきのみ

第二の失策は日本の實力を誤解したるに在り。ヲーガック少將は多年日本に在つて日本の軍狀に通曉せる名將と稱せらる。然れども少將は日本軍が日清戰役の經驗によりて特科隊の大改正を加へ。且つ滿州西伯利亞の地理に考へて其の兵站等に大なる改良を行ひたるを察せず。日本軍の兵數日清役に倍するも。尙ほ依然たる當年の日本軍と做して毫も怖るゝに足らずとし。之を以て屢々アレキシーフ總督に說き。又露廷にも報告したりき。露國が之を輕信したるは實に大なる過失なり。殊に日本が四十万以上の大兵を動かすと能はずといへる報告を信用したるが如きは。甚だしき失策なり

日清戰役に日本の費せし處は二億圓を超えざりき。今は日本は十ヶ月にして五億圓を費せり。十年前に比すれば實に非常の負擔なりといはざる可らず。然れども日本國民は既に一億圓の增稅を負擔し。既に三億圓の公債に應じ。又將さに一億圓の公債に應ぜんとするも。幾んぞ聲色だも動かす所なく。財界は極めて平靜にして唯だ僅かに開戰前よりの不景氣を一部分に存するのみ。輸出額は益々增加せり。民間の貯金額も著るしく膨脹せり。經濟上の狀態好良なるは幾んど平時以上にあり。是れ財界に於ける官民が下級社會の濫費を戒めて小資本の吸集に鋭意したると。愛國心によつて製產を獎勵し。兼て軍事當局者が軍費の散布上に善良なる手段を執れるがためにして。亦日清戰役の當時に鑑みて周密なる注意を加へ。而して國民亦一致して露國に當るがため十年來準備を怠らざりし結果のみ。要するに適宜に之を指導すれば日本の財源の滾々として

盡きざるの事實は。之を證するに餘あり。然るに露國が日本を小國と做し。民間政事家又は新聞紙が故らに悲觀して政府の財政を攻擊するを視て。日本の財力到底大戰に耐えずと判斷したるは。猶ほ李鴻章が日本議會の喧擾を見て日本人の愛國心の熱烈なるを察する能はず。官民反目して竟に戰ふ能はずと爲したると一對の誤謬に陷ゐれるものなり

第三の失策は確乎たる決心なかりしに在り。此の失策は普佛戰爭に於て曾てナポレオン三世の犯せし處なりき。當時ナポレオン三世は外交上に多くの失策を演じて漸く民望を失はんとするを患ひ。西班牙王繼嗣問題を以て強ひて普王ウヰルヘルムを屈伏せしめんと欲し。繼嗣問題の事實既に消滅したるに拘らず。飽まで普王を窮迫して竟に開戰の口實を得ながら。尚ほ十分の勝算を有せしには非ず。佛國議會に於ても例の激動し易き佛人の癖として開戰論甚だ喧かりしと雖も。其の實全國中唯だ十七縣開戰に熱したるのみ。他の七十一縣は之に反對し。若くば躊躇したりき。ソレール氏の外交史に據れば。ナポレオン三世は七月十四日の第一回内閣會議の際。尚ほ閣員の多數と共に平和說を執り。第二回の閣議に多數が開戰に傾けるも未だ之に同ぜず。午後六時半より同十時に至る僅々三時半の間に於て。開戰派の強請によりて竟に之に從ひ。同夜十二時に開ける第三回閣議に於て始めて開戰を確定したりといふ。今夫れ露帝ニコラス二世はナポレオン三世よりも更に甚だしく狐疑し逡巡したるなるべし。政事家として第一に手腕あるウヰッテ氏も。外務大臣ラムスドルフ伯も。第一の宿將ドラゴミロフ大將も。甚だしきは陸軍大臣たりしクロパトキン將軍すらも。尚ほ開戰には反對なりき。然れども意思薄弱なるニコラス二世は。各大公を透し來るアレキシーフ總督の開戰說を斥くる能はず。ベゾブラゾフの強烈なる主戰說を拒む能はずして竟に心ならずも開戰を裁可したるなるべし。而かも眞心より十分に開戰の利を確信せざりしもの何ぞ啻だニコラス二世のみならんや。開戰說の張本たる(少くも今日まで斯く看做さるゝ)アレキシーフ總督と雖も。實は十二分の勝算ありしには非ざるが如し

アレキシーフ總督は。先づ威嚇を以て日本を屈伏し得べしと做したるが如きも。又必らずしも開戰の意思なかりしにも非ず。二月八日夜半水雷艇が旅順口外に露國艦隊を襲擊するや。彼れは手を拍つて我が事成れりと做し。大艦三隻開戰の犧牲となれるも。此がため

日本を撃破し得べしと言へりとの說あり。或は事實なるべし。而して是れ彼の本心なりや否や疑はし。當時彼れの有せる艦隊は素より露國海軍の精英を萃めたるものなりと雖も。數に於て十分に日本艦隊を壓するの算ありしに非ず。其の陸軍に至ては。僅かに鐵道守備隊と稱して駐屯せるものと。近く西伯利亞より輸送したるものゝみ。多くも未だ十二万を超ゆるには至らず。之を提げて全勝の算ありと做すは。瘋癲白痴乎。然らずんば全く軍事を解せざるもの也。アレキシーフ身海軍大將として如何ぞ能く之を解せざらんや。彼れは單に威嚇によりて日本を屈伏せしめ得る乎。然らずんば艦隊を以て一二の攻擊を加ふる丈けにて。日本を取挫ぎ得ると做すが如き漠然たる考を持したるものにして。斷乎たる勝利の確信ありしには非ざるべし。果して然らば是れ一種の「半決心」(吾人は假りに斯く稱す)のみ。軍事上に於て「半處置」と呼び做すものと恰かも相似たり。夫れ「半處置」は軍事上甚だ忌むべきものの一なり。「半決心」の大事を過まる。何ぞ多言を要せんや

而して此の「半決心」を懷けるもの單に一のアレキシーフ總督のみならざるなり。露帝も露國政府の多數も亦皆斯の如くなりしのみ。彼の開戰に反對したるウキツテ。ラムスドルフ。クロパトキンと雖も亦恐らくは然りしならん。是れ實に重大なる失策と謂はざる可らず

第四の失策は軍事と外交との一致せざりしに在り。此の事實は前項に同一なるも。便宜上假りに分ちて論ずべし。夫れ露國にして。未だ日本を壓倒すべき軍事上の成算無き乎。宜しく外交上の措辨を以て時局を收拾せざる可らず。其の機會の一は。日本が曾て一び鴨綠江の兩岸を中立地帶として交綏すべしといへる露國の提案に同意したる時にあり。露國が此の機會を利用せずして。恰かも平和に結局するとを好まざるが如き態度を示し。日本の驚ろくべき忍耐を過度に濫用したるを視れば。殆んど日本を屈伏すべき十分の成算ありしに似たり。然れども眞に日本を屈伏せしめんと欲せば。十分に其の兵力を備へざる可からず。少くも日本艦隊を壓して制海權を把握せざる可らず。日本政府は現に制海權喪失の時あるを慮かりて。陸軍を釜山より上陸せしむるの計畫をも立てたると。猶ほ日清戰役の當時に異ならざりき。故に露國若し制海權を有せんか。日本軍が道路嶮岨にして(寧ろ道路無くして)輸送困難

を極むる朝鮮を縱貫し來る間に。大兵を鴨綠江邊に集中して。比較的に物資豐富なる滿州に占據し。直ちに滿韓國境に於て日本と雌雄を爭ふの便を得べし。然れば日本を屈伏し得べきを期し難きにあらず。然るに露國未だ此の準備をも存せずして。却つて龍巖浦事件の如き高壓手段を以て日本を激怒せしめ。百方日本に挑戰したるは何ぞや。曰く軍事外交一致せざれば也。實力なくして威嚇を行ひ。毫も外交を以て軍事上の不備を補ふの手段に出でざりしは。是れ亦大なる失策の一也

●●●●●第五の失策は媾和の機會を失へるにあり。日本は此の戰爭を以て國家生存上の大問題とし。國民の戰爭と爲すも。露國に於ては單に『政治上の戰爭』なるのみ。露國人民の多數は素より何のために開戰するかを知らず。其の小數の智者と雖も亦戰はざる可らざる所以を知らずして。寧ろ戰爭には反對せり。而して其の與國たる佛國は平和を熱望し。獨墺伊亦平和を望み。日本の同盟國たる英國と雖も平和には決して反對するを得ざるべし。況んや米國をや。故に露國にして速かに和せんと欲せば。先づ佛國及び英米獨を動かして之に贊成せしめんこと難からず。而して其の第一の機會は。日本の旅順攻圍軍司令官乃木將軍が七月中旬を以て旅順要塞の守將ステスセル將軍に降伏を勸めたる時にあり。當時は旅順要塞尙ほ堅固にして。露國艦隊尙ほ旅順口内にあり。其の一部は健全にして浦鹽斯德に在り。クロパトキン將軍亦大兵を擁して遼陽に據り。前衛を海城柝木城等に張れり。乃木將軍の勸降は素より媾和の意に非ずと雖も。露國若し之を機として列國を贊同せしめ。兩國兵を解かんといはゞ。日本容易に拒絕し得ざるべし。而して媾和條件の如き亦甚だしく露國の面目を損するに至らざりしなるべし。

第二の機會は旅順口第二回攻擊の後にあり。遼陽役に於ける日露兩軍の苦鬪。旅順に於ける慘狀は人道に於て忍ぶ可らざるものとして露國より媾和を申出てば。列國素より異議なかるべし。而して其の條件は第一の機會に比して稍々不利なるも。亦甚だしく露國の屈辱たるものには非ざりしなるべし

第三の機會は沙河會戰の後にあり。此の理由は第二の機會に同じ。抑も當時旅順口未だ陷らず。太平洋艦隊未だ全滅せず。故に媾和條件に於て。少くも旅順口及び其の守備軍の名譽は尙ほ維持せらるべかりしなり露國が此の機會を捉へて媾和せざりしは實に失策と

いふべし。今や旅順口既に降伏せり。東洋艦隊は全滅せり。而して國内には同盟罷工續發し。都鄙到る處人心洶々として革命の陰謀漸く各處に勃發せんとす。日本軍は其の強烈なる力を一にして諸方より來るも。露國は唯だ一條の西伯利亞鐵道のみにして。到底大兵と大兵に供給すべき物資とを輸送する能はず。加ふに連戰連敗によりて兵氣は甚だしく沮喪せり。假令ネヴァ河の水逆流し。太陽オデッサに出てゝ浦鹽斯德に沈むとも。竟に戰勝の目的あると無し。若し更らに時日を延さば。敗戰の結果彌よ大にして。其の屈辱益々加はるべし。或は全く西伯利亞を失ひ。其の本國の政府顚覆するも亦測る可らず。媾和の機會を逸したる失策も亦大ならずや

夫れ露國は始めより大義名分の正しき地位に立たず。日本をして遼東半島を還附せしめ。己れ却つて旅順大連を取り。淸國の不幸に乘じて滿州を攘略し。又列國と屢々撤兵を約して屢々之を破れるが如きは。不正不義不信の甚だしきもの也。況んや更に朝鮮を侵害して強く日本の存立を迫害したるをや。斯の如くにして益々日本の怨恨を深くし。列國の憎惡を招き。竟に佛神の憤を享けしのみならず失策に重ぬるに失策を以てせり。其の前途暗黑ありて光明無き淵に其の陷ののみ。然り。因果應報の明證爭ふべからざるなり

盲啞教育問題

東京盲啞學校長　小西信八

今回の戰爭に於て負傷せるもの數多き中に、盲人となりしものも亦決して少からず、先日澁谷病院に至りて予の親しく見たるものは群馬縣の高橋万吉と呼ぶ人にして彈丸は左眼より右眼に貫きたるものなり、其疵痕は極めて小にして恰かも痘痕に等しきものなれども全くの盲者となれり、又今一人の長野縣生れの金澤槌三郎と呼ぶ人なり、二百〇三高地の戰爭に於て盲者となれり、其他二三人の盲者ありき、予の澁谷病院に行きたるは我盲啞學校の生徒五名熱海に居る陸軍傷病兵のマッサージに雇はるゝことゝなりしを以て其生徒を連れ、見舞を兼ねて見物に行きたるなり、此盲者等は後來如何にして生活するか、按摩をとつて國に奉公しては如何になどいひて彼等を慰籍し若し其心想あらば敎へてやらんとて行きたるなり、我校にては例年紀元

節に當つて餅菓子を與ふれども今年は煎餅に代へ、盲者に最も同情を表すべきは、教育を受けし盲者なるべきをいひ、生徒より一枚づゝの煎餅を土產とし生徒と共に此病院を訪問せり、赤十字社にて種々のいた〳〵しき傷病者の有樣を眺むれば最早や物を欲し、利を思ふなどの念は決して起らざるなり、たゞ〳〵憐憫の感にうたるゝの外なし、福島縣の栗城卯太記も亦仙臺豫備病院より如何にして餘生を送るべきやを問ひ來れり金錢を要することは我等のなし能はざる所なれば、たゞ職業を與へて精神を慰めやらんと考ふ、政府は金錢を與ふることをなすべきも精神上の慰を與ふることは能はざるべし、精神上の慰藉を與ふるは吾人の事業なり。

思ふに今回の時局にして終結を告げ、陸海の將士凱旋するの際は國民皆滿腔の熱誠を捧げて之を歡迎することなるべし。東鄉大將が一時歸京せられし時の如きも彼の如き盛況なりしならずや、旅順艦隊を全滅せしめたる將軍を迎ふるに盛大なる歡迎會を開くは至當なり、新橋に於ける東京市民の歡迎、日比谷に於ける會合、又各區、各團體に於ける祝捷皆適當のことなり、然れども東鄉大將自身は極めて謙遜にして未だ戰爭は局を結ばず、我獨り歡迎を受くべきものにあらずと謙遜に謙遜を重ね、辭退に辭退を重ねられたり、此謙遜と辭退に拘らず彼の如き盛會を呈したり、我は東鄉大將が一言我れを歡迎祝賀することをやめ、陸海軍の傷病兵の爲めに紀念となるべき病院を建設せよ、病院はありとするも盲啞者の爲めに學校を設立せよといはれなば實に此上なかりしならんと思ふも大將がたゞ〳〵謙遜辭退のみせられて止みしは些か大將の爲めに惜まざるを得ず、こは大將に多きを求むる者にして之が爲めに大將の德を累はすにあらずと雖も、若しかゝる議を呈せられなば一層其德を高めしことならんと考ふ、されど既往は詮なし、今後いよ〳〵凱旋の際には必ず紀念となるべきものを殘さんことを望まざるを得ず、日比谷の會に於ては臺甚だ低くして遠方のものは之を見るを得ず、之を高くすること必要なり、露臺として高くし、凱旋臺又は紀念臺の如き名を附し、日比谷に集る人悉く之を望み得る樣の臺一つを紀念とすること必要なるべし。

又次ぎに各區別々に金錢を費やすことを廢し、盲啞の爲めに紀念學校を建てられんことを希望す、その費用は出來得べくんば凱旋將軍の金鵄勳章の年金の幾分

[illegible]言し難きものなれば歡迎の費用の幾分を以て此れに當てられんことを將軍等の言葉を以て進められなば一層其德を高むることとなるべしと信ず、たゞ消極的に辭退せらるゝことをせず、積極的に善良なる事業をせられんことを希望す。戰爭の紀念として後世に殘るものを欲するは何人も一致する所なるべきも凱旋門などいふ金のかゝるものよりは寧ろ實益の大いなるものを得たしと考ふ、日光の東照宮、芝の増上寺信濃の善光寺など後世に傳はる建築物なりと雖も我等は寧ろ國家の有功に國民に盡瘁したる人の心を慰藉するものを建築せんことを望む。ルイ九世が千二百六十九年埃及征伐の十字軍を起したる際三百人の盲者を生じたり、依て三百盲院なるものを建設せり、これ世界に於ける盲人保護の嚆矢とす、されどたゞ世話するに止りて今日の所謂教育にはあらざるなり、今回の日露戰爭に於ても盲人となるもの極めて多かるべし、此等の人を教育し、娯樂を與へんとすることは戰爭より凱旋したる人と世の教育家たる人の當然盡すべき義務なるべしと考ふ。

今日文明國と稱するものにして我日本盲人の爲めに費用を出さぬ所あるなし、盲人の爲めに建てたる學校[illegible]洋の英國を以て任ずる我日本帝國の首都東京に於て僅一つの盲啞學校より存せずといふは少しく其當を得ざるものにあらずや、今英國に於ける盲人教育の大體を述べんに英國にては一千八百九十一年までは普通教育も放任主義にして其輸出品は毎年其高を減じたり、其原因を怪しみ、亞米利加及び獨乙に向て特派員を出したり、然るに此二人の特派員の歸り報ずる處申合したる如く一致せり、即ち亞米利加及び獨乙にては普通教育の普及甚しく如何なる寒村僻地に至るまで小學の設あらざるなし、而して實務教育の効果は着々として上り、丁稚小僧に至るまで英國の最も經驗ある番頭の事業をなすことを得、新一本を使用するにも尙物理の法則に協へり、故に其なす所の仕事は英國と雲泥の相違あり、英國が今日の儘にて普通教育を放任すれば米獨の爲めに總ての商權を奪はれんと。是に於て英國も斷き普通教育を强制せり、之と同時に盲啞白痴の教育をも强制し、倫敦市中盲人の爲に出來たる無月謝の學校八、啞人の爲めに十八、白痴の爲めに三十一、其生徒は學齡に達すれば必ず入學せざるべからず、月謝學用品は總て官費なり、且つ途中の手引となる兄弟又は親

に向ても金錢を與ふ、而して視學官を置きて嚴しく調査し年齡に達すれば必ず入學せしむ。これ歐米大陸に於ても未だ見ざることを英が卒先して行へるなり、我東京市に於て盲人の爲めに一つ、唖人の爲めに一つ位の學校を設立するも必ずしも市の經濟を狂はしむることもあるまじ。

若し人間以上の動物ありて、吾人が植物を養ふ如く、枯葉を取り、枝振を正すが如く、人間を淘汰するものあらば格別なれども、それは人間のなし能はざる所なり、されば只不具者なり、盲唖者なりとして之を剰りてのみ放任せず、之を助けて自己の糊口の資を得るの道を授くれば國家經濟の上より見るも甚だ利益なることなるべし。若しかゝる事業を以て慈善とすれば之より大なる慈善はなかるべし、予は之を目して慈善といふことを好まずと雖も慈善としても大いなる慈善なり、予は盲唖事業を見るに亞米利加人の考をよしとするものなり、即ち盲唖人も又國民なれば政府は普通の國民を教育すると同じく盲唖人を教育するの義務あり、盲唖人は之を受くべき權利ありといふにあり。故に米國にては各洲に數個の盲唖學校を設け、其一切の費用は皆政府にて支辨せり、而して盲人は盲學校、唖人は唖學校と分ち、通學のものには一年百五十弗、寄宿のものには三百弗の豫算を以て之に給與するなり、我日本に於ても只慈善〳〵といはず國家の義務として之を實行せられんことを希望す、慈善といひて人の懐中を相手にするは國民を待つの道にあらざるべし、是れ予の立場より見たる盲唖事業の觀察なりと雖も世の識者必ずしも我田引水的の議論と貶せざるべきを信ずるものなり。（文責記者）

文士初對面錄（その六）

天中天

▲内田魯庵氏（ノ一）　想像したやうにもない、また世間の評のやうにもない、これは人違ひではあるまいかと私かに危んだのであるが、事實其人の家で面會したのであるから間違もない魯庵内田貢君である、と何故想像が外れたか、氏が餘りに温厚で謙遜であるからで、『私は全く文章が下手で、その上極めて遲筆なんですよ、……何に苦心すると云へば大層聞えが可いですがね、テンデ頭から出て來ないのです、巖谷君なぞは人と話をしながらすら〳〵と文章を作る、それで立派なものが出來る、私のはさうでない、筆を嘀んで〳〵少しも滿足なものが書けない、……なに嘘ぢやありません、御覧なさい、此間から文章の稽古をする積りで、自分でも情けなくなりましたからこんな物を讀んでるのですよ』見ると唐宋八大家文である（つゞく）



本誌に掲載する處の海外新潮に依つて歐米列國の大勢を知らんと欲するもの頗る多きが如し、歐米の大勢を知るは即ち世界の形勢に通ずる也、吾人が之に多大の費用と精力とを傾注するもの、各國語に通ぜざる人をして現世界をより多く熟知せしめんが爲め也、これ蓋し我國現時の急務なりと信ず

一千九百四年の歴史事件

其一

「ウイルソン氏」

一千九百四年は東西兩洋の關係上一大新時期を劃する者なるを以て歴史上特に記臆すべき價値あり。數世紀前オットマンの侵略が遂に失敗を以て了りたる以來、非基督教國は軍事に於ても到底基督教國に敵對し得べきものにあらずとは歐洲政治家の信じて疑はざる公理となれり。亞細亞及び亞弗利加の文明は白人の前に全く其光を失ひて、一顧するの價だになきものとせられたり、かるが故に日本が露國の朝鮮政略に向つて抗議すべしなどいふ事は彼等露國政事家の夢想だもせざるところなりき、滿洲に於けるアレキシーフ總督及び聖彼得堡に於ける大官等の腦中をもて、すでに黄人種唯一の自治國たる小日本の如き一擊にして挫折し得べしとし、遂に上に事端を開きたるものゝ如し、然れども日本は此虛喝に動ぜず二月上旬戰爭を開始し、其結果日本は全く朝鮮を征服し、極東に於ける露國の海軍力を殲滅し、黑鳩公の軍を奉天迄退却せしめ、旅順の陷落を旦夕の間に迫るに至らしめたり、此戰爭の終結は未だ得て之を知るべからずと雖も露國に利益あるものにあらざるは昭々として明かなり、

此日露戰爭は世界歷史の上に三大影響を及ぼすものゝ如し。第一、戰爭中行はれし無數の殺戮及び死傷は所謂戰爭なるものゝ甚だ悲慘にして背理なることを知らしめ、國際間の平和を希望するの傾向頗る顯著となりしこと、第二、日本は東洋において獨立を失はざる諸國の指導者となり、第三、露國の君主專制主義の基礎甚だ薄弱なることを全世界及び露國自身に向ても暴露したること即ち是れなり。

開戰一二ケ月の間は露國の愛國熱も頗る盛なりしと雖も、アレキシーフが彼の獨裁主義を以て大失敗をなし、露國政府の失敗益々明瞭となるにつれ、人民の怨恨愈々甚しく遂に內務大臣プレーヴ氏の暗殺となりしも皆此殘酷にして無情なる壓制者の去りしを喜ぶ程なりしかば 反動派の人は此大臣の位を繼がんとする勇氣あるものなく、終に皇帝も其政策に背き、自由派の一人ミルスキー公を之れに代らしむるに至りたり、公は露都に於て地方會議（ゼムストボス）を開き大に民心を和らげんと試みたり。

露帝及びミルスキー公は大に反對を試みしに拘らず、地方會議は秘密の場所に開かれ、其決議は今日まで露國に未だ嘗て見たることなき性質を供へたり、出版自由、信教自由、及び憲法制定これ地方會議が始め、莫斯科市會、大學會、法律家及び貴族までの請求なりき。革命の宣言は

名士等によりて至る所に傳へられ、今や專制政治は之れによつて養はる僅々二百万の人のみを幸するに過ぎざるものゝ如く信ぜらるゝに至りぬ。

露國内部の狀態今日の如くに至るべしとは到底想像だも及ばざる所なりき、フインランドに於てさへ、知事ボブロスキを除き、議會には自國の管理者を多數ならしむべきことを許されたり、常に最も嚴格なる支配者を派遣することを好む露帝はオボレンスキを以て大侯國に送りしと雖も此人の爪も暫後直ちに切り取られ了りぬ。出版は其制破れて一年前に於ては西比利亞に流謫せられし如きものゝ市中に歡迎せられ、十二月に至つては國内の爭擾益々甚しく、多くの流血を以て稍々鎭定することを得たり。

而かも幸にして極東の戰爭は二國の範圍を超えず、日本は支那の助を藉り又は佛が露の味方をなすが如きことなかりしは列國にとつて實に大いなる利益なりしといはざるべからず。

又た一方に於て西藏問題及び北海事件起りて英露の關係危機一髮の間に迫り、人をして不安措く能はざらしめしと雖も幸に事なきを得たるは大いに外交其宜しきを得たるに歸せずんばあらず。

大英國の歐洲政治界に於ける勢力はエドワード七世の才幹と氣力によつて回復せられ、仲裁の條約は英佛以及び衞の間に批准せられたり、又かゝる條約の北米合衆國との間にもなされんとしつゝあるは公然の秘密なりとす。此外交的行動は全國民の歡迎を受け、之れに對して不滿なるは佛の助によつてモロッコ問題を定めんとしたるロースビリー卿一人あるのみ。

歐洲内部の政治舞臺に於て第一注目すべきは佛蘭西共和國と法王權との爭是れなり。カーヂナル、ラムボラの隱忍なる政策は反對せられ、一層眞摯なるカーヂナル、メリー、デル、ヴアルの議は容れられ、ガリカン州を以て其管轄地の中に合することゝせられたり。

米國に於ける大統領改選は大多數を以てルーズヴエルト氏再選せられたり、米國に於ける眞の二大勢力はトレード、ユニオン及びツラスト是れなり。此二大勢力の爭鬪は必ずしも表面に顯然たらず、人に於てはブライアン氏、パーカー氏、ルーズヴエルト氏、黨派に於ては分權派及び共和派等の離合贊助によつて活劇を演じつゝあり。

尙英國に於てはチヤムバレン氏及びバルフオー氏等の所論、大に論壇に花を咲かせ列國の政治上に關係を及ぼしたること少なからず、其の他個人として記載すべきこと少きにあらざるも管々しければ玆に之れを畧す。

其二　「リテラリー、ダイゼスト誌」

一千九百四年は戰爭と平和との兩方面に於て最も注目すべき年なりとす。假令血腥き戰爭より免るゝ能はざりしと雖も人道的社會の顯出を望む熱心なる努力と、世界の改善を計る眞摯なる希望とを認むることを得べし、ジョーナル誌は曰く「人間の社會的、智的及び靈的なる改良を計り、以て世界の平和を推奬する第二海牙會議の如き即ち世界が漸然平和の道に入らんとするを認め得べし、素より世界に於ける最大合戰、最大包圍及び最大勝利等此年に起りたりと雖も、これ亦平和の勝利に歸すべきことを吾人に示しつゝあり」と。

げに極東に於ける爭亂は此年に於ける最大事件なり。互に血を流すこと十一ケ月而かも戰爭は未だ其局を結ぶべくも見えず、されど之れと共に一方には平和の爲めになされたる努力少なからず英佛條約先づ成りて仲裁の條規次第に定り世界の列強大抵之れに加はり、又た第二平和會議

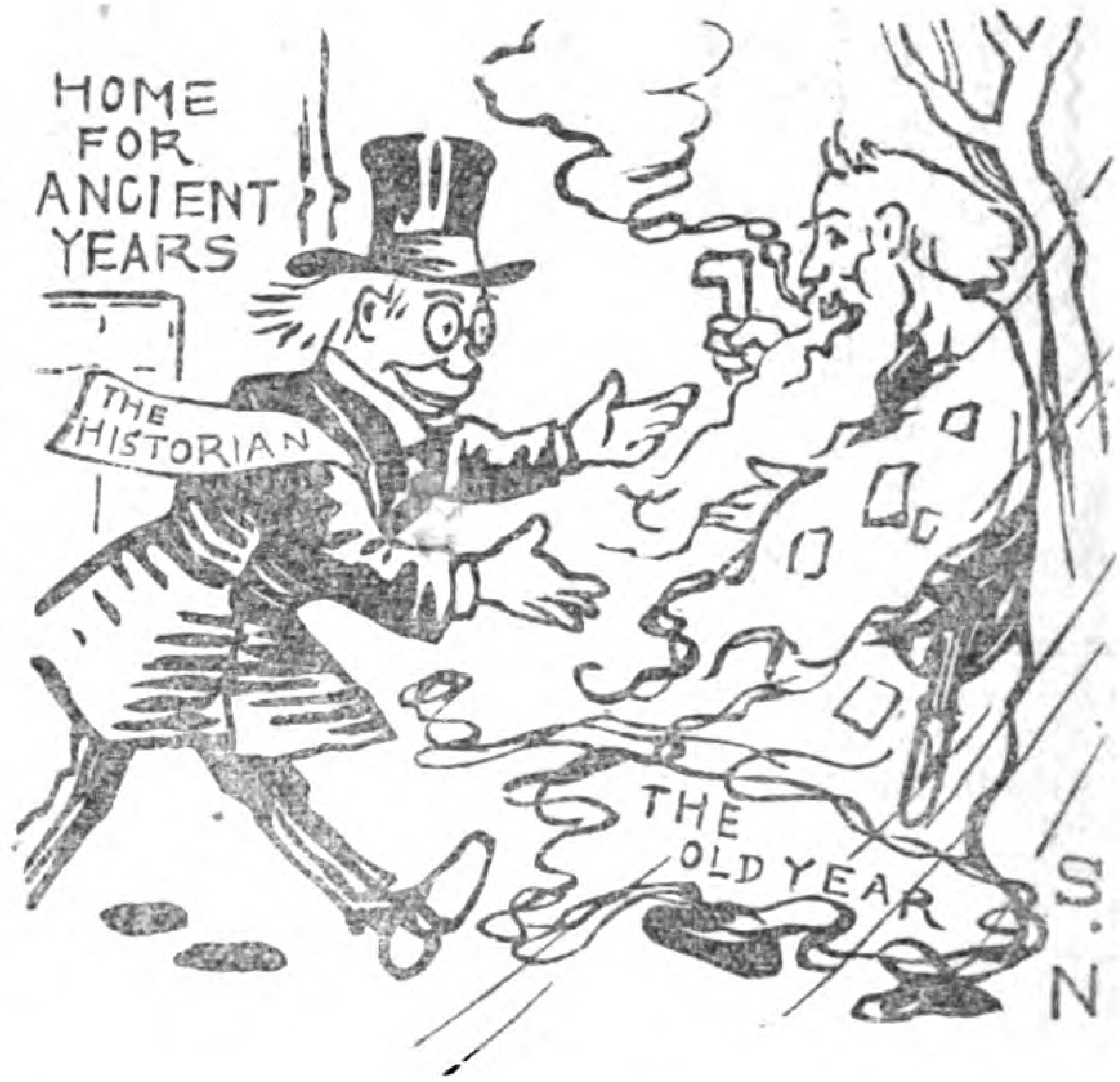
の發議を見たり。北海事件の仲裁及び英獨以がヴェネズエラの償金要求に關する事項は國際間の爭に對して列國仲裁の極めて進歩したることを示し、其他の國際事件即ち西藏に於ける英國主權の確立、ムーアの盜賊よりペルデカリスの救助、墨哥斯に於ける金價標準の採用、南亞米利加に於けるヘレロスに對する獨乙軍、佛國に於ける寺院と政府の爭、モロツコに於ける無政府狀態、コンゴーに於けるレオポルド王の放棄、露國に於けるプレーヴ氏の暗殺、革命自由運動の猖獗及び露帝の之に對する所置等最も注目すべきことなり。又た米國に於ては大統領ルーズヴェルトは前古未曾有の大多數を以て當選の榮を得たり。

此年に於て死去したる最も有名なる人物を擧ぐれば、ツランスバール共和國のポール、クルーゲル氏。サーウイルリアム、ヴルノン、ハルコート氏、サー、ヘンリ、エム、スタンリー氏、動物學者のテオドル、ヘルツル氏、ジョールジ、フレデリツク、ワット氏、ジアン、レオン、ゲロム氏、サー、エドウイン、アーノルド氏、ミッス、フランシス、パワー、コップ氏、サミユール、スマイルス氏、サー、レスリ、ステイフヰン氏及び英國遊船發明者ジョールズ、エル、ワトソン氏等なり。

世界の平和問題

「サターデー、レヴイユ誌」

現今の如き秋に當りて世界の平和問題を提出す、恐らくは甚だ時期を失したるの所論なりといはれん。旅順及び沙河に於ける大慘劇を目前に扣へて而してかゝることをいふ、人の之を以て全く一種の空想なりと嘲るものあるも辨ずるに言葉なきが如し、然れども兩交戰國を除きて他列强の態度如何を察すれば世界が漸々平和を求めて戰爭を忌避するに至りたるの事實、年を追うて盛になりつゝあるにあらずや。激戰十一ヶ月之に對する一般の傾向又個人の思想皆悲觀又は苦痛を抱かざるもの之れなきが如し、開戰の當時最も懸念に堪へざりしは實に他の列强の勢力此戰爭に向て卷き込まれざるべきやにありき、佛蘭西の政策の如き最も疑惧の念を抱かれたるに拘らず、今や事實は全くよく中立を守りたることを證明せり、加之若し二國同盟して露と交戰することあるも佛蘭西は其潮流に卷き込まれざるべき有樣となれり、而して之れを佛國一般の民情に察するも十中の九人までは皆戰爭に對して厭惡嫌忌の念を抱くに至りたり。



THE HISTORIAN: "Der old man, it's my business to take care of you." —Walkker in the Nashville *American*.

而して佛人のかゝる感情はひとり今回の日露戰爭に對してのみならず又一般の戰爭に向て斷然かゝる傾向を有するに至りたるは明白なる事實なり、之れモロッコに對する彼の態度に就て見るも了すべきなり。

又之を獨逸に見るに其政策は全く地理學上の位置によつて定められざるべからず、佛國は如何に平和を望むと雖も常に獨逸と相反目することを免れず、又東隣露國に對しては爭亂の種子其國境に蒔かれつゝあり、又墺太利問題の發展は不本意ながらも獨逸を戰爭に誘はんとし、又た其商權の擴張は海軍力の發展と伴ひ、其人口の增殖は陸軍力の發達と一致せざるべからずとすれば、戰爭に向て最も戒心を要すべきは現今獨逸を以て最となす。

露國及英國に就ては昨年來の出來事に鑑みて益々戰爭と遠ざからんとするの傾向を示せり、英人は最早や戰爭に厭き、露人は最早戰爭に疲れたり、而して歐洲に於ける他の諸國も皆戰爭を忌避せんとするの傾向歴々として徵すべし。

歐洲諸國の意向已に斯の如し、而して彼の第二平和會議の主唱者たるルーズヴエルト氏は大多數、投票を以て大統領に當選したり、世界の平和は一朝一夕にして實現すること能はずとするも漸次其目的に近きつゝあることは最早や疑ふべからざる事實なり。吾人が世界平和問題が提出する必ずしも、輕忽の論にあらざるを信ずるなり。

ルート氏のモンロー主義論

「タイムス」

[illegible]

に就て注目すべき評論をなしたり、其大体に於ては大統領ルーズベルト氏が平和會議の召集の際米國民に告げたる所と相類する所ありと雖も、其の言最も簡潔にして頗る鋭利なるを以て、歐大陸の人心を動かすことルーズベルト氏の說よりも一層大いなるものあるべきを信ずるなり。ルート氏は國際間の仲裁に向て温かなる賞讃を與へたる後、合衆國が戰場に導く唯一の動機は彼の所謂モンロー主義に外ならずといへり、彼は亞米利加大陸の地盤に向て歐洲諸國の干涉を許さずとせる米國の決心を表せる此主義に對して決して攻擊を試みんと欲するものにあらず、又た此提言の抽象的主義に向て否定せんとするにあらず何となれば抽象的主義の爲めに戰爭を起すが如きことは万々あり得べからざるものなりとは彼の信ずる所なればなり、然れども此抽象的主義が實際的問題に累を及ぼし、全く具体的の形体を取るに至れば遂に戰爭を誘起するの媒となることあるは理の免れざる所にして彼が此主義を捨てざるべからずとする所以全く此にあるなり。南亞米利加は實に多くの共和國を含み而かも其共和國なるものは多く文明諸國が認むるが如き正義及び權利の思想と一致せざる國柄なれば、文明諸國は屢々之に干涉し、以て自由の臣民を不正又は不法の行爲より保護するの策を取らざるべからず、而してかゝる保護を加へんと欲すれば假令一時たりとも其の共和國と爭端を開き以て其の一地方を占領せざるべからず、然らば即ち歐洲列國の爲す所毫も不正不法にあらずとするも我モンロー主義よりいへば此れに干涉し之れを防止せざるべからざるにあらずや、其煩はしきこと到底吾人の堪へ得る所にあらざるなり。之れ彼れがモンロー主義を捨てよと叫びたる所以にして又他の米國人も之に向て異議を挾まざる所なるべし。

露廷内に於ける三大軋轢

「セ、ワールド誌」

國人全躰の機嫌をとらざるべからざる露帝の身の上の扨ても禍なるかな。ニコラス二世が露國の帝位に上りしとき彼の希望は全世界と共に極めて平和なる關係を保たんとするにありき、彼は昔より今に至るまで大いなる戰爭の嫌忌者にして啻に兵馬の響に天性の憎惡を感ずるのみならず、些かにても强暴又は不快に類する事項あれば甚しき畏縮の念を起さゞること能はず。彼れ幼時に於て實に恐ろしき經驗を有し、其感念は今に於て胸中より全く脫し去らず、爲めに益々今の如き性格を作りたるなり、即ち彼が漸く事物を知り初むるに至りたる九歲の時土耳古との戰爭起り、極めて神經質にして多感なる其母と共に恐怖の中に日を送り、又冬宮に居りしときは機一髮にしてボルキの破壞を免れたるも彼の祖父が爆裂彈に粉碎せられしときは、彼は其父の傍にありしを以て此悲劇の一部始終を殘る所なく聞き取れり、當時彼は實に十四歲なりき、而して爾後彼の身の上は誠に噴火口上に座を占むるに異ならず、彼の神經が强健ならず、常に平和と安靜と求めて止まざる理毫も怪むに足らざるを見るなり、況んや彼の天性極めて多感にして、不親切なる言葉も直ちに彼の感情を害し、批評的一諱も忽ち彼の胸中を亂す、彼の幸福は實に御身の周圍が彼の感情を亂さゞるにあり、然るに即位十年大に平和を希望せるに拘らず、外には戰爭を構へ、內には黨派の軋轢あり、彼の四周八面悉く亂爭の中にあり、彼奈何ぞ憂へざるを得ん、悲まざるを得ん、彼は何をか爲すべき、何をか爲さゞるべきとも知らずして迷ひ、惑ふの狀實に不憫といふも愚かなり、彼何人の機嫌をも取らざるべからざる位置にありて而かも何人をも不快ならしめつゝあり、世にかくばかり不幸なるものはよもあるまじと思はる。



"Look, Peter, the holy season's lights burn brightest among the heathens this year."—*Wahre Jacob* (Stuttgart).

彼は日本と大戰爭に從事しつゝあるの外、其廷內には三大軋轢ありて少しも寧日なし。

第一スヴイアトポルク、ミルスキー公と大公セルギユスとの軋轢にして其の問題は政治的改革を認許すべきや否やにあり。セルギユス侯は實に露國專制派の首領にして現皇帝の叔父に當れり、彼の聖彼得堡朝廷の命を防がんか爲め、莫斯科の職工を許して亞歷山二世の墓に列を作らしめ、以て農奴開放の愉快を叫ばしめたるものは實に此大公なりき、又た彼等をして團躰を作りて其不平を訴へ、且つ彼等の權利を呼ばしめたる

もの實に此の大公なりき。シヒヤイン氏は已れの死に先つこと二三日前彼大公を刺りて大姦雄なりとし、而して彼が莫斯科の知事となりしは實に危險なる變動を起すべきことを痛論せり、而して彼が新内務大臣ミルスキーに對して反對の地位に立ちしは彼を嫉忌又は恐怖するよりは寧ろ其個人的の理由に出づるもの多し、彼は露國人と呼ぶよりも寧ろ波蘭人と目すべきミルスキーを好み又は信ずること能はざるなり、又彼はミルスキーの行はんとする改革に對して毫も贊同の意を表せず、何となれば彼は夫等の改革は上流又は猶太人に向て利益あるべきも市中に於ける職工又は農夫に何の爲す所なかるべきを信ずればなり、彼の意見に從へば最も人道的なる改革は實に農夫に向てなさるべきものにしてミルスキーの計畫の如き彼の不本意なりとする所なり、而して彼は又廷内に勢力を有すること已れの妻エリザベスとは反對の意見を有しつゝあり、又たポビドノスセフ及び其他の反動派は皆彼の股肱となつてミルスキーの改革に反對す。

▲▲第二又此政治的改革の黨派的軋轢と異なり、別に軍事に關する兩黨派ありて互に嫉視反目の狀態にあり、一方に於てはラムスドルフ伯を首領とする政府黨の人々にして、他方に於ては大侯アレキシス(陸軍大臣にあらず)の黨派之れなり、而して爭の問題は黑海艦隊なり、大侯の同志は皆叫んで曰く、條約の如き我等の毫も關する所にあらず、又其費用如何に莫大なるも此艦隊をしてダータネルスを通過せしめ、以て極東に於けるロツヂストベンスキー將軍の下に結合せしめざるべからずと、然るに他方に於ける彼等の反對黨は之を非難して曰く、かゝる議論は實に甚だしき迂愚なるものと曰はざるべからず、艦隊をしてダーダネルス海峽を通過せしむるは是れ英國と戰端を開かんとするものにして、露艦は直ちに英艦の捕獲する所となるべしと。然るに大侯は之を駁して英國は決して戰を開くことなく、露國の爲すが儘に任すべしといへば、ラムスドルフは此の事は恐らく戰となつて顯はるゝの外なかるべきを主張す、而して前者は止むを得ずんば英とも戰を辭せずとし、後者は此事の甚哀しむべきものなることを恐る。而して露帝は此勢力ある二大黨の間に板挾みとなつて如何ともなす能はざるの狀態にあるなり。

▲▲第三、露廷内に行はれつゝある今一つの軋轢は一層注目すべきものにして多少全露西亞帝國に影響を及ぼすべきものなり、其の攻勢を取るものはクラドー艦長にして、其防禦者の地位に立つものは海軍の事務長アヴエラン將軍なり、近來に至るまで艦長は最も微々たる勢力なりしも近來露廷内の信任は彼の位置を高め戰爭に於ける彼の成功を祈るの念實に盛んなり、而して大侯及びアレキシス大侯も又彼に結合したるを以てクラドの放ちたる攻擊の矢は實に其鋭を加へたり、彼れ大侯は近來まで皇帝の命を以て艦長を牢獄にまで投じたる人なりしに今は全く彼の味方となり、日本を防禦するに於ては如何なるものを犧牲とするも彼の主張に從はんとせり、而してクラドは露國が全力を傾注して軍事に盡し、一兵一船と雖も悉く收めて飽くまでも日本と戰はんとするにあり、風説にして眞なりとすれば遠からずしてクラドは露帝の信任を得るに至らんなり。

而してポヒドノスセフ及びウヰイテ氏の軋轢については今ま茲に贅せす、兎に角かゝる皇帝とかゝる軋轢に忙しき黨派とを有する國は實に不幸なりといはざるべからざる也。

ウヰッテ氏の人物を論ず

「リテラリー、ダイゼスト誌」

一時露帝の信任を失ひて、國務の鞅掌に與からざりし露國唯一の政治家ウヰッテ氏は再び又其眞價を認められ、漸次ニコス二世の上に其の勢力を及ぼしつゝあり、其狀恰かも雲霧漸く晴れて月光次第に明かになり行くが如し。巴里タンプは彼の人物を論じて曰く

「財政上に於ける深遠なる智識、露國の政務に與かりし長き經驗、明確なる頭腦、一定の主義、强固なる意志等を兼ね備へたるウヰッテ氏は今や再び皇帝の上に大なる勢力を及ぼさんとしつゝあり、彼は露國財政改革の首唱者にして又た露國工業の創始者なるを以て實に赫々たる威名を振ひたりき、又た彼は主義あり、識見あり、策署ある政治家なりしを以て多感にして臆病に、其意見定らず、其實行果斷ならざるニコラス二世の甚深なる信任を得たりき、然れどもウヰッテの幸運は久しからず、彼の星は漸々其光輝を失へたり、是れ他なしプレヴェ氏の寵遇遂に彼の上に出でたればなり、プレヴェ氏の果斷直截思ふ所直ちに事を實行するの氣風は大いに、臆病なる皇帝の心を動かしたり。プレヴェ氏はウヰッテ氏の主義の皇帝及國民に餘りに人望あるものにあらざるを見、已れ之に代つて其意見を行はんとせり、ウヰッテ氏は君主の自負心を滿足せしめ又は人民の放縱を許す能はざるの人なり、プレヴェ氏は諛言を呈して皇帝の心を得、大藏大臣の信任を地に墜さしめたり。然れどもプレヴェ氏死して溫和なるミルスキー公之れに代りたるも彼は一の政見を有する人にあらず、彼は善良、愛撫、仁惠の行爲を可とし、大いに之を行はんことを勉めたりと雖も人民の要求する所のものは實に彼の期する所よりも遙かに大いにして溫和なる彼の奈何ともする能はざるものなりき、彼は此の間に立ちて躊躇逡巡進んで彼等の請求を拒むこと能はず、退いて之れを容るゝこと能はざるの窮境に陷りたり。



RUSSIA : "Will you open the Dardanelles to my warships ?" TURKEY : "I would if I thought they would not soon come back." —*Fischietto* (Turin).

露國の狀態や夫れ斯の如し、ウヰッテ氏が再び其の地位を得るに至るべきは必然の勢なり、彼には主義あり、政策あり又理想あり、此難關を處理し得べきものは彼を措て他に之れあることなし。彼の野心は恰かもルイ十三世の朝に於けるリセリユーの如し、以てよく露國の現狀を沈靜ならしむべきか」と。

マッコール女史の日本視察談

（デーリー、クロニクル）

戰爭の開始せられて未だ幾何の月日をも經過せざる中なれば通信員及び軍事視察者等の範圍極めて狹小なりしに拘らず、ミッス、マッコールは皇后陛下の特典を得、委しく日本の軍隊を視察するの幸を受けたり。女史の任ぜられたる戰務は實に日本の赤十字社事業を觀察するにありき、女史が此等の事項を記述せる著書は平易、明晰且つ眞實なる經驗に豐かなるを以て極めて趣味多し、女史は實に熱心と敬虔とを以て其業に從ひ、又た日本政府が種々なる便宜を計りたるに拘らず、隨分少からざる困難に遭遇したるが如し。

「予が日本の軍事上及び赤十字の内部の組織にまで立ち入りて視察することを許されたるは、日本政府に向て予は敎へんが爲めに來れるにあらずして學ばんが爲に來れることを知らしめんと勉めたるが故なり、予が視察することを許されたる範圍は實に豫想よりも大いなりき、日本人は實に敏捷なる國民にして、組織的能力は實に驚くの外なし、彼等の最も傑出せる特質は經濟に通じ、正確を過らざるにあり、一毫と雖とも經濟の理に反せることをなさず、一分と雖も正確に外れたることをせざるなり、而して愛國心の旺盛なる想像も及ばざる程にして殆んど狂的分子を帶べりといふも可なり、是れ彼等の生活を支配する最大の感情にして、其他の自己の欲望皆此感情の前に其息を潜め、男女共に之れを最貴最高のものとなし、全く一種の宗敎と考ふへきものなり」。

又女史は日本軍にある露國の捕虜を記して曰く「日本は其捕虜を取扱ふに全く自國の兵士に對すると異なることなし。予は其捕虜の一二に向て通辯によつて言葉を交せるに彼等は喜ぶこと限りなく松山に送られんとすることに就て滿足しつゝある如く見えたり、されど日本の傷病兵は皆前進すること能はざる彼等の運命を哀しみつゝありき、予考ふるに日本の傷病兵は戰場に於て死せざることを寧ろ恥辱としつゝあるが如し、此生命を物の數とも思はぬが即ち日本兵の恐ろしき所以なり、世界何れの國と雖も日本兵の如く死を重んずるものあらざるべし、是れ全く國家の爲めに戰死するは男子の最高名譽となすによるものなるべし」

又マッコール女史は日本軍の衞生に向て甚しき讚嘆の筆を振ひたり、近時の戰爭の統計表を見るに戰場に死するもの一人につき、病氣の爲に死するもの四人の平均なりといふ、然るに軍隊は此四人の生命を助くるの準備よく整へり。軍隊の通過する村落は豫め視察せられ、病疫あるときは之を妨止するの手續迅速に施さる。食物の注意せらるゝは勿論、各聯隊は鐵製の鍋を以て皆沸騰水を飲用す、軍隊が河に於て水を飲み又は水瓶に充さんとするときは極めて嚴重なる取締をなし、若し其規則に違反するものあるとき其の名を記して之れを罰し、甚しき惡行と見做されつゝあり。

女史が再び日本に歸らんとする時、女史の乘れる船は浦鹽艦隊に逢ひ、非常なる危險將に身に起らんとせしが漸くにして此災難を免るゝことを得たり、當時甲板上の火は悉く消され、人は暗中にあつて最後の來るべきやを案ぜり。

「予は通辯たる黑田夫人の室に入れり、予の想像に違はず彼女は最後の用意をなしつゝありき、彼女は小なる日本刀を持し、まさかの時には腹切りて死せんずる覺悟をなせり。彼女が若し露國人の手に落ちんことあらば直ちに其生命を絕ちて物の見事に此世を去らんず靜かなる決斷ある態度は大いに予の心をして安からしめたり、これ實に日本婦人の忠烈なる感情の顯出なり。彼女は其愛する夫及び二人の小兒あり而かも自[illegible]

けざるの决心かくの如し」と其他種々面白き逸話に乏しからず、大いに吾人の參考となる有益なる著作なり。

外人の觀たる日本の芝居（上）

天弦生

哲學博士カアル、マンチウスは丁抹の名優で兼れて當代の優人中稀に見るところの學者である、其の著『古今演劇史』三卷は斯界近來の好著と稱せらるゝものであつて、其の中の一節を割いてわが日本の演劇が紹介してある、是を一讀すると隨分杜撰な點も多いのであるが、とにかく日本演劇に關する記述としては恐らくは最近のものであらうと思はるゝし、又丁抹の名優にして學者なる彼の觀察を覗ふのも必ずしも徒爲ではあるまいと思つて、茲に其の大意を紹介する。

日本演劇の濫觴

傳說によれば、第九世紀の頃ヤマトの國に大地震があつて、毒氣一面に海上より發し、到る處土地崩裂して多くの死人を出した。何ものもこの畏ろしき神の怒りを宥むるとは出來なかつたのであるが、僧侶等の思ひつきで寺の外の草山の上で魔法の表象的舞踏を演ずるに至つて、忽ちに毒氣は霧散消滅して、平和と幸福とは再び此の國に立ち歸つた。日本演劇は實に斯くの如くにして發生したのであると。



THROTTLED!

Once upon a time there was a man who thought he could prevent the dawn of day by stopping the rooster's crowing. —Maybell ih the Brooklyn *Eagle*.

「シバイ」は芝生「ヤ」は家屋のことであるから、劇場といふ意味の日本語「シバイヤ」は、以上の濫觴の傳說を思ひ起さしむるものである。今日に於てすら、此のヤマトの國の大奇瑞は、演戲毎に其の序開きとして、以前と同樣の宗教的舞踏によつて表彰せらるゝのである。印度の凡ての劇詩が必ず祈禱を以て始まる如く、日本に於ては劇の始まるに際して必ず一人の俳優が老僧に扮して場に現はれ、扇を翳へして律呂ある舞蹈を演ずる、其の間樂部（コーラス）は哀切にして幽玄なる歌謠を以て救ひの神々の惠みを願ふのである。

併しながら勿論以上の傳說にもせよ其の他のにもせよ、演劇の發生を以て一の神話的出來事に歸するといふ事は、何等の歷史上の價値を有せぬのである。斯かる起源に出づるといふことは藝術の性質上ありうべか

らざることであつて、此の日本の傳説も、すべて演劇は、凡そいづれの國に於ても、其の初めは必ず宗教上の儀式典禮と相關係してゐたものであるといふ事實を示す點が面白いのである。（中畧）

辻芝居と行列

祭日に於ては、大きな寺の外に舞臺を建てる。舞臺は地上約六呎の高さの木造の臺で、昔の日本の建物の特色たる四角の上向きになつた屋根に蔽はれてゐる、此の屋根は天蓋の如くに細くて弱々しい柱に支へられてゐる、其れ故舞臺は三方が開けて一方即ち寺の前に接した方だけが塞がる、此舞臺の上で奇異なる身振狂言を演ずる。この狂言には宗教的の分子と粗野極まる滑稽の分子とが混じてゐる。是等の狂言は凡て小供によつて演ぜられ、其の多くは十歳乃至十二歳位のもので、ある歐洲人の看客は此等の少年が身振りを演じ對話をなすに極めて冷靜自若たるものあるを賞讃したのである、其の少年等の衣裳は壯麗であつて、彼等は日本人の主なる才能の一なる粗大なる誇張の心を以て彩られ描かれた假面を被つてゐる。假面は唯舞踏即ち身振狂言に於てのみ用ひらるゝのであるが、或る野蠻人の中に見ると均しく、其の面の內側に附けてある小さな木片のところを齒で嚙み止めてゐるのである、儀式典禮のない時には寺は殆ど空虛であるが、此等の觀せものに牽き寄せられて夥しき群集は聚り來るのである。殊に其の觀せ物は、國家又は僧侶から費用を支辨して貰ふので、無料であるところから、更に一層評判が好いのである。

此等の寺芝居は支那の寺芝居と非常によく似てゐるのであるが、果して其の故に支那の文明の影響を受けたものであるか否かといふことは疑問であらう。また其の寺芝居が歐洲の中世紀に於ける神秘劇に酷似せることも著しき點であるが、歐洲の神秘劇の方から考へて見ると、其の影響がなかつたといふことは確かに言ひ得ると思ふ此等の類似せる現象は人類全體の文明史上に於けると均しく、演劇史中にも亦常に起り來ることである。されど、同一階段の文明に達したる人間の心は常に同一の法則の下に活動するものらしく、從つて遠く相懸絶せる國民の間にも、驚くべき類似の現象を生ずるものであるといふこと以外には、以上の事情から何事をも論結することは出來ないのである。

近世の佛蘭西の一旅行家の記すところによると、一夜彼がエッドオ（江戸？）から二十哩ほどある名高き神聖なる村を通つたとき、急かに樅の林の奥から響き來る奇異なる音樂を耳にしたが、かゝる深夜に何事とも全く解し得なかつた、やがて其の響きを辿つて行くと、假裝せるものが、風變りな單調な歌を謠うて、松明の光りに照らされながら森の中で踊つてゐるのを見た。そしてそれはフドーサマのために祭りをしてゐるのだといふことが分つた、しかし、若しこの佛蘭西人の旅行家が、彼等が森の中でかゝる深夜に踊つてゐるのは、その旅行家が斯かる夜更に旅行すると同一の理由である、即ち夜氣の冷凉（時は八月であつた）な好んでゞあると思つたら、それは大きな間違ひである。

この夜祭りはたしかに上古の日本人が、滿洲人や亞米利加印度人其他の野蠻人の如く、月光又は松明の光りによつて神秘的舞踏をなし、以て神々を祀つた其の太古の文明の遺物である。

行列と相關せる特殊の辻芝居に於て、やゝ進歩したる芝居を見るのである。それは現今尙一個通俗的娛樂として存在し、歐洲中世紀の辻々で行ふた神秘劇、ことに英國に行はれたものと相類似せるものである。辻芝居や行列を行ふは常に宗教上の儀式典禮の際であつて、其の費用を負擔するものは善男善女である。町々はそれ〴〵其の行列の衣裳などを用意し、また其の俳優の稽古をなさしむるのである、しかしながら、總じ

て此等の演戯をなすは小兒で、恐らく往昔は男兒女兒相混じて行つたのであらうが、現今では全く男兒ばかりである、其演ずる題目は神話的又は英雄的であるが、またかの歐洲神秘劇に於けるが如く、其の演劇の動作とは何等の關係なき道化た幕をも入れるのである。

『日本の歴史及び記錄』を著した有名なる旅行家エンゲルブレヒト、ケムフエルは、彼の當時即ち十七世紀の末葉に於て演ぜられた行列芝居に就て下の如く描寫してゐる。尤もこれはスヲ神の降誕を祝する祭りである。

『費用を出して其の祝節をなす町は、下の如き次第で行列を整へる、第一に其の町の守護神、それから華美なる日傘、その日傘の中央には町の名が書いてある。其のすぐ後方に樂人が笛と太鼓とを持つて從ふ。其の音樂は價値なきものである、それは神々を悅ばしめ得るかも知れれど決して人間の耳に快感を與ふることは出來ぬ。……舞踏は其の甚だ巧妙機敏なることを示すのであつて、此の點に於ては、彼等は多く歐洲人に劣らぬものである。樂人の次ぎには舞臺の飾り附けや演劇に必要なる道具類を持つ者が從ふ。少し重い物は職人が持ち、輕い品物、即ち倚子、杖、花などは其の興行の費用を支出する町の小兒等が、凡て華美な衣裳を着けて是を持つのである。而して最後に來るものは俳優で。其の背後からはお祭り着を着けた町の住民が悉く隨いて來る。……町々での舞踏は凡そ四十五分ほど續き、これが終ると又次ぎの町へ進んで行く、行くに從つて後方から隨いて來る見物人は益多きを加へる。町々はいづれも互ひに自分の町の興行の能ふかぎり立派ならんことを競ふのである。興行は早朝から始まつて正午頃に終る。……毎年々々俳優の身の廻りの道具を新らしくし、觀物や舞踏を更へればならぬのである。若し前年から持ち越して再び使つたり繰り返したりするやうな事があれば、之れは興行の保護者即ち町の耻辱不面目と思はるゝのである。（次號完結）



THE SUN FLAG OF JAPAN.
It has risen over more than Port Arthur.
—Bartholomew in the Minneapolis *Journal.*

なが〳〵と
川一筋や
雪の原

A single river, stretching far
Across the moorland swathed in Snow.

雜錄

明治闇黑史

有磯逸郎

○後藤象次郎の對韓陰謀（上）

『民權運動の本舞臺に入る前に、引き續いて、朝鮮に關係した陰謀事件を聞かさう、朝鮮に對しては、此の明治の三十八年に至る迄、幾度か壯擧を企てゝ、幾度か同じ失敗を繰り返して、蹶いてをる、いや、日本の志士ばかりぢやない、前には支那の才子寄手を燒き、日淸戰爭後には、露西亞の連中は、國王を抱き込んで、味を占めんとした、が之も今度の戰爭で、見事に失敗した、何んぢや、朝鮮の富豪原は、三百萬圓の借款契約を非認してをる！、我國の好意を無視せんとし

に忍びず、なんて洒落臭いことを言ひだしたもんだ、内部には、役者を操つる傀儡師があるに相違ない。否、之は想像ぢやない！、陰謀の消息を知つた、我輩等には、此の頃の朝鮮の模樣が、手に撈るやうに、ありありと眼に見えてくる』

『閑話休題として、遙然と飛ッ走つて、明治十七年の、後藤象次郎の對韓陰謀を話さう、此の陰謀には、後藤象次郎を中心として、色んな人物が關係しをつた、板垣退助も關係すれば、何時も屋根の上の烏のやうに、オッに澄して、政界の外に冷然としてゐた三田の老爺──福澤諭吉も關係した、爾してだんだら幕を張つた此の舞臺に、烏帽子直垂の伊藤博文、井上馨などいふ大宮人も、兩花道に姿を現はす、日本の人物ばかりでなく、さて幕を引くと、當時朝鮮獨立黨の牛耳を握つてゐた金玉均、朴泳孝などいふ人物は、舞臺の正面に控へてをる、奥の影暗き方を見ると、當時我國に駐在してゐた佛蘭西公使サンクウイッチは、支那駐在の同國公使パテノートルと幷んで、笏を持つて、どつかと椅子に懸つてゐる、安南戰爭に出陣してゐた水師提督クールベーも、一ト役を勤めてゐる、仕掛が、從來の

つたのぢや」

「今、一人、特書すべき人物がゐる、それは當時佛蘭西公使館に、書記生てゐたサーベルといふ男ぢや、此男の素性は、我輩能くは知らぬが、ナポレオン三世の政府を顚覆せんとした、秘密結社に加はつてゐた亡命客ぢやといふ噂てあつた、我輩も一二度會つたが、左様さ、年齢は三十一二歳の血氣盛り、面魂の鋭い男で、一ト癖ある様子が、擧動の上にも、耀然と見えてゐた、小林樟雄の通辯て、言葉を交へて見ると、ハキ〳〵とした、活氣を帶びた物の言ひ振り、凝然と相手の顔を見て、熱心に話す具合が、妙に相手を引きつける、その僻言葉の機會に微笑を含んで、東洋風の、粗大な意見も交へる、成程此男ならば、と一見して、陰謀骨のある男ぢやといふとが首肯かれる……此のサーベルは、後藤の對韓陰謀に、佛蘭西公使と後藤との間に挾まり、小林樟雄と共に帷幕に參して、斡旋の勞を取つたのぢや、之て此の事件の花役者を紹介したが、まだ我輩等の連中て、後藤の帷幕に參した二三の人物は居るが、之はその塲合に臨んて、紹介しよう」

「君等も知つとるぢやらうが、明治十五年の十月、朴泳孝、金玉均、閔泳翊等は、使節と爲つて、國王の命を奉して、日本に遣つて來たとが有る、當時朝鮮の國狀は、如何て有つたかといふに、一時威を振つた大院君の勢力は、地に落ちて、政權は全く閔氏の手中に歸してゐた、が、稲妻のやうにくる〳〵變はる朝鮮の事ぢやから、固より當てに爲つたものぢやない、果然！閔氏の一族て兵曹判書の職に居た、閔謙鎬といふ奴が、軍卒の食料を私したとかいふので、軍士の間に紛擾が起つた、隊を組んて、閔謙鎬の家を擊碎した、その足て、大院君に閔族一同を斬殺せんとを請ふた、野心滿々たる大院君は、好機到れりと、起つて、名を鎭撫に借り、閔族を殺傷せると同時に、鎖國主義の實行を試み、我公使館を襲擊した當時の朝鮮公使は、今の宮内次官の花房義質て、書記官の近藤眞鋤等と力守したが、敵はず、京城を棄てゝ仁川に走り、濟物浦より月尾島に出て、英船のフライングフヰッシに救はれて、生命から〳〵長崎に歸つた、とは君等も知つとるぢやらう、此時の外務大臣――外務卿は井上馨で、報を聞いて、自から馬關に出張し、花房公使に訓介を與へ、大に其の罪を問はしめた、……斯んな事は、其處等の古本屋の前に列んてゐる書物には、ざらに出てゐる事實ぢやから、良い加減にして、廢めるが、そ

の結果國王の命を奉じて、謝罪に來たのは、即ち朴泳孝、金玉均等さ、」

「朴泳孝、金玉均等の日本へ遣つて來たのは、單に謝罪使として來たのであるが、之より我國人と、朴泳孝等と切つても切れぬ關係が結ばれたのぢやから、此の時の朝鮮使節は、結果に於て、幾多の意味を遺こしたので、今日から回想しても、趣味は津々としてゐる、金玉均等は、親しく日本に來て、文化の著しきに感服し、朝鮮改革の念を高めた由であるが、我國人も亦た之を機會として、大に渠等と接近したので、此時より既に個人的に、朝鮮と日本とは、一種の連鎖を作つた、朴泳孝等が福澤先生を知つたのも此時であれば、民間の有志と知り合つたのも此時が初めぢや、特に拔目のない金玉均は、百尺の竿頭に一歩を進めて一人こつそりと、茶屋酒の味を覺え、我國の愛すべきを經驗したといふから、ます／＼面白い、猫の眼の玉のやうな朝鮮は、使節の歸國後、如何變化したかといふに、猫の眼の玉は、獅子の眼にも、虎の眼にもならぬ、相變らず轉輾してゐたが、其の後、朝鮮の政界に、判然とした二ツの標幟が現はれたのは、混濁した朝鮮の政界には、先づ珍らしき現象ともいふべきぢやらうが、其れは事大黨と、獨立黨の區別であるが、事大黨といふのは、支那の大に事へんとする閔氏を中心とした黨派で獨立黨は朝鮮の開化を謀らんとする、新進氣鋭の青年に依つて、成立つてゐた青年黨だ、詰り事大黨は支那黨で、獨立黨は日本黨よ、今より思ふと、此時既に二十七八年役を醞釀してゐたのぢや」

「一躰、支那は、今日こそは、彼のやうに詰らない状態に沈んでゐるが。日清戰役以前迄は、歐米人の眼にも眠れる獅子を以て喩へられてゐた大國で、その勢なか／＼凄じなんぞといふばかりなく、朝鮮に於ても、眼中日本なく、魯西亞なく獨り威を縱にしてゐたが、大院君が鎖國主義の實行を初め、我公使館を襲つた頃迄は、朝鮮に對しては、單に名義を持するに止めてゐたが、我政府が、再び花房公使を入韓せしめて、其の罪を問はしめた時に至りて、俄かに從來の態度を變じ、吳長慶、丁汝昌、馬建忠等を派して大院君を捕へしめた上に、電光石火のやうに、朝鮮の內政に關係して、名實共に朝鮮を屬國とするの事實を示した、內外共に啞然として、支那の傍若無人に驚いたが、當時の支那の勢は歐米人にさへ其の實力を買冠られてゐたのぢやから、我政府の如きも、指を咥へて、李鴻章の爲

すおかへを見てゐたのおりお、意氣地がない、、左樣なり
や、意氣地のない骨頂であつたが、已むを得んかつたのぢや、當時、日清韓の關係は、斯んな形勢であつたから、朝鮮政界の二大區別である事大獨立の二大黨派も、事大黨は、ます／＼大にして、獨立黨は、一隅に屛息して、氣勢の揚らなかつたも、また無理てはない」

「後藤象次郎が、對韓陰謀を企てたのは、正に日清韓の關係が、斯んな形勢であつた時ぢや、最も新聞紙の上には種々の議論が見え、支那が手を延ばして、朝鮮の內政に干涉したのを、ぼんやり指を啣へてゐたのでもなかつたのであるが、何分にも、支那の勢力は、當時馬鹿に光輝を放つてゐたので、恨を呑んで、支那の爲すがまゝに任せてあつたのぢや、それに當時、民間の氣勢は、民權運動にも疲れ、政府には兵糧攻に遭つて、大に衰へてゐたので、明治六年の征韓論のやうな騷擾も起らなかつた、が事を好む靑年原は、井上外務卿を、便佞邪智の小人なりとして、寄ると觸ると、その腑甲斐なきを指摘してゐた、左樣ぢや、我輩の如きは、その筆頭ぢやつた、……が、當時の井上の勢力といへば、それは實にすばらしいもんであつたよ、

それすばらしい井上さ、支那に對するこそキフン、と
參つてゐたから妙ではないか、ハツ／＼」

「十七年の何月であつたが、判然と記憶してをらぬが、朝鮮獨立黨の金玉均は、國王の密旨を帶びて、日本に遣つて來た、それは事大黨の跋扈が甚しいので、日本の力を假りて、朝鮮の內政を改革せんとて、密かに日本に遣つて來たのぢや、固より密行であるから、朝鮮に於ても、朴泳孝外一二人の外は、金玉均の日本行を知れる者が無かつたさうぢや、爾うして金玉均が先づ向つたのは、外務省の應接室で有つた、金玉均は朝鮮唯一の日本通では有つたが、當時はまだ充分に朝野の事情に通せず、伊藤井上等の人物を、能くは知らなかつたものと見ゆる、唯、日本に行けば、志を助くる者あるべく、特に日本の政府は、對淸政策の必要より喜んで獨立黨を助くるであらう位な、單純な考へて來たらしい、……單純に考へたのも無理はない、金玉均は、獨立黨の領袖で有つたが、まだ三十歲に出ない靑年で、今の君等よりも、遙然と見識も何も幼稚であつたには相違ない、ナニ、此の以上、奢らんでもよい、我國の正宗二本で、澤山ぢや、朝鮮ばかりではない、我國の維新當時と雖も其の通り、伊藤や、大隈や、山田なん

ていふ連中も皆んな二十幾歳の若僧であつたらうぢやないか、其れが參議で御座いの、大輔で候のと威張りくさつた、即處の國でも、大抵同じ』

「話談は傍路へ外れたが、金玉均は、右のやうな考で、井上馨を外務省に尋ねたのぢや、二ッ返事で欣諾するぢやらう、と期してゐたのが之は案外！、井上馨は例の癖のある顔を澁めて、金玉均の依賴を拒絕した「今日日本政府は、條約改正の一事に精神を注いでゐるから、折角ではあるが、御懇賴に應じ兼ぬる」とケンもホロヽの挨拶で、拒絕した、之を聞いた金玉均の失望落膽、尋常でなかつたといふが、成程左樣であつたらう、最も當時は、井上先生條約改正の一事に熱中してゐたのは事實であるが、當時の外交方針は、事勿れの消極主義を取つてゐたので、特に當時の內閣諸公は、日露戰爭前に、伊藤等は、恐露病に襲はれてゐたやうに、井上を初め、何れも、恐清病に罹つて因た、之が金玉均の依賴を拒絕した最大原因で、外に理屈も糸瓜もあつたのぢやない」

「井上に拒絕された金玉均は、悄然と旅館に歸つた此の時金玉均の泊つてゐた宿は、鍛治橋外の陞樓――樓に歸つて、つく／＼と、井上大臣の今日の模樣では、到底日本政府を便る譯にゆかぬ、之は何んでも民間の助力を請ふより外に策はない、と考へた民間といへば目指すは、在野政黨の首領であるが、大隈は中流以上に勢力はあるが、賴母しくない、板垣か、板垣は、南海に歸つて、今は東京に居らぬといふ、如何したものぢやらう、と思案に暮きて、偶と此時金玉均の胸に浮んだのが、福澤先生で有る、先生は三田の丘陵に、三千の門弟を養つてをらるゝ、同氏に相談ばせ、妙案に接するとが出來るであらう、と思ひつき、翌朝、眼が覺めると、車を飛ばせて、金玉均は福澤先生を尋ねた、之より後藤象次郎の本舞臺に入るのぢや」

『金玉均より一伍一什を聞かれた福澤氏は、その間は何等の言葉も挾まれず、凝然と考へてをられた、朝鮮改革の一擧は、此人の返答一ッにあり、と思へば、金玉均は福澤先生の顏色をまじろみもせず、熟視してゐた、床柱に懸れる時計の音は、ちく／＼と音を立てゝゐる、遙かに校堂より、幾千人の生徒の聲が、一ッに爲つて、風のまに／＼聞えてくる、併しながら、兩人相坐してゐる一室は、深夜の如く、森としてゐる

は、如何であつたらう、稍經て、福澤氏は、靜かに、然かも重味のある聲で、「それは面白い」と答へられたので、金玉均も、ほつと息を吐いたといふとぢや」

『面白い』と答へられた福澤氏は、言葉を改め、「併し乍ら、余自身は、三千の門弟を率ゐて、貴國を助くる、譯に參らぬ、特に余は政治に關係なき敎育家の身なるを以て、身を以て、相談相手と爲るだも、余一身の事情は之を許さぬ、故に余は、貴下の志は、之を賛美するも、共に手を握つて、朝鮮改革の大業に從事するとが出來ぬ」と一己の事情を述べ、色を變ぜぬ金玉均の顏を見ながら、更に、「併しながら、余は那處までも貴下の志を諒とす、故に別に貴下の志を爲さしむるに、極めて適當なる豪傑を紹介すべし、即はち維新の元勳中、最も義俠にして、手腕に富める後藤象次郎氏なり、同氏は自由黨とも關係薄く、其の事業たりし炭鑛業とも手を斷ちしと言へば、閑散なるべし、同氏に面して、相談せば、必らず貴方の志を助くべし」と告げ、一封の手紙を草して、金玉均に渡された、此時、金玉均は、大事成れり、と胸中窃に思つたさうであるが、或は左樣であつたらう」

「福澤氏の紹介狀を携へて、その足で、金玉均は、後藤を高輪の邸宅に尋ねた、當時後藤は、如何な境遇に居たかといふに、心血を濺いで從事してゐた炭鑛——高島炭鑛は、見事に失敗して、親戚の岩崎に尻を拭はせ、其の賣り飛ばした、遺こつた金で、高輪に豪壯な邸宅を作り、爰に陣を構へて、虎視耽々として、天下の風雲を望んでゐた、が、民間黨も、十三四年のやうな活氣がなく、世はぐにや〳〵の、伊藤井上等の天麩羅政治に謳歌してゐた、——左樣ぢや、我輩等の間では天麩羅政治といふ言葉が流行つてゐた、表面ばかり、燦然として、內實は骨拔餡のやうな、海月のやうな、文弱極つた政治であつたからぢや、だから、十三四年の頃羽振を利かせた志士は、皆んな苦境に陷つた、東京に遺つた有志は、まだ四五年前の夢を見て、二三年の中には、如何かなるぢやらうと壯士等を慰めたゐたが、その大將株からが、そろ〳〵生活問題に、頭上を襲はれてゐたのぢやから堪らない、コリヤ斯うしてをられぬ、と氣を揉んでも駄目の皮、民間黨の元氣はから意氣地のないものと爲つた、當時四方に、狹小な國事犯罪が現はれたが、今から思ふと、一ッは「食つてゐられない」といふ生活の必要が、渠等に迫つて、國事犯と爲らしめた傾向もあり、斯んな時節であつた

から、後藤も、其の智と勇とを揮ふに由なく、唯慨然と時の來るを待つ外、他に方法がなかつたのぢや、後藤が野心を抑へて、静に斯んな境涯に眠つてゐた處へ、福澤氏の書を携へて、金玉均は尋ねたのぢや、……暗く爲つた、ホ、最ふ日が暮れるのかへ、世に要事のない我號と雖も、日の暮れるのが、矢張惜しい」

女の交際

三宅花圃

なにがしの會ありといふ日は、えさらぬ用事さて置ても午後よりゆくめり、會場の戸を排けば、星の如く並ゐる夫人令孃など花壇に植並べたる菊花の色をほこるに似たるに、先づ胸のときめくをおぼえて、後にひそみつゝうちまもる、例の前髪大きく取たるに、ヘーアクラフトなどキラ〳〵しう三ツ櫛は彼の面ぐしさしてといひけむ昔物語の姫めきたるもあり、丸髪に油のこちたく、鼈甲の櫛笄、こはさすがに鼻じろみてうちもあふかぬ餘なるべし、五六人交じれる外國婦人は互に絶ずかたるさまなれど、バベロン塔の古こともかくや、何を何とも聞わかたず、たまさか一言二言聞わかつとも遂に物語の何を主にてとは思ひもおよばぬかぎりにて、玉を轉ばす如き、百囀すりに聞ほれ、動く目つき、手まねの多きなどまじろきもせず、中に一人二人物なれたるあり、つねは洋服着すとぞ、いかなるよしありてか

今日は小紋の三ツ重ね裾もあらはに腰のあたりしどろに着なしたる幹事とかいふなるべし、大きなる聲して勞れぬといひさま、ア、とこしうちかけて手まさぐりにするをみれば、シガレットとかや、二つの鼻孔より虹ふくやうにふき出でつゝ、あなたこなた見めぐらして、ナゼみなさん御談し成さらないの、幹事に斗り骨折らせてサ、因循でしやうがないのネ、切角の會合も何の益になりますかと、一睨するに、心弱きはおのづからいよ〳〵尻ごみてひたすら唾をぞのむ、開會の辭、會の報告、某婦人の演説は、聞えぬにしもあらねど、耳よりも目のいそがしき、髪の飾り帶衣服の色合、配合、あの色、あの地、あの櫛、をなどおもふに、襦絆の袖、半襟の形、帶留、帶上げの類、一ツも見殘さず、我襟を正し手元ひきつくろふほどいつしか會も終へぬ、とてかた斗りの立食あり、暮ちかければ、日々の心ならひは、さすがに家の氣にかゝりて立歸るに、夫は早

や火鉢の前に安坐かきて、庭には乳に飢えし乳見のなき聲たかし、下婢の旦那樣にはかく見はからひて、御夕飯さし上げぬと、いふにほと心落居て、腹に筋よるまてしめし帶を、下婢の手をかりて解けば、たちまちおぼゆる空腹に、われも茶漬にてもと下婢にたのみて、庭には母まつ娘のすさびと、脊負ひて軍歌うたふ子守の聲も聞えぬ斗り、泣入るを抱き取り衣服の着かへもそこ／＼に、先づ火鉢の側に、夫の前に座る、諸共に茶など啜りつゝ、會の要にはさて何をかたるべき、聞え知得し事もなけれど、こはわれはさりとも悟らじ、けふの恥かしかりしは、帶の流行におくれし事、某夫人は一點のすきなき出立の、われもかゝらば、とおもひしことなどいふまゝに、かたるまゝに、うちしわめる夫の面の何となく才能なきやうにて、いふに甲斐なくあの樣なる氣のつまれる會には、行まじ／＼、喃きよ、淺草にても行がよかりしものを、と又も下婢にさま／＼けふの有樣どもかたりきかせなどやすらん。彼シガレットくゆらしゝは、會の事手はやに終りて、殘れるサンドイッチ、花かご、菓子など引つゝみて立歸る、きらゝなる電燈のもとに、夫は西洋の雜誌などおしひろげたり、たゞ今、とも禮はせず、いつ御歸つたの、早かつた事ね、今日の會は、マア成効てしたか、ほんとに東洋婦人の因循なのには、と又も燕のさえずり盡せず早く着物でもかへよといふをしり目にかけて、かのサンドイッチうちくひつゝ着物をきかへて、卷煙草をくゆらしつゝ、よりくる子供には、間食せぬものぞなど、いひまけて、花などはとりてやるさまなり、胸におもふは、此次會の事かく擴張してかく改革して、彼の會はかくして、などたゞ／＼おもひを走しらする、社會の表面も、裏見のたきのうらみはかたへに流れて、とゝのはぬ家庭に、夫は不自由の世をかこつもあるべし。教育界の指導者として、夫妻ともに名譽たかく、才名かくれなきに、似もやらず、外妾ありと聞はまことかさりともしらず、おしあてに模範的家庭などいはるゝも恥おぼえじか、子等もいかにおぼゆらん、などある人のいひしに、答ふる人の、彼の如く夫人にして、内を外にあらしめば、また他に慰籍をもとめてやは、といひしとぞ、夫の行爲もいかゞなれど、女の深く、いましめまほしき事なるべし。さらば、まことに、女は内にのみひそみて事足るべきか、おのづから日進の世におくれて、夫の物語の相手にも成得ず、子等の教育にも事かくべし、とにもかくにも今の世の女は、いとど身の所置こそむ

づかしけれ、これまで交際などせまき親類縁者のうちにてすら、なほ華美をきそひ、新調の衣類などほこりしものを、公の會などに行くやうに成ての女の心配はたゞ一ッにこれをはじめなるべし、かくざまにみゆる世なれば、進むは進み過ぎ、おくるゝはおくれすぎ某々の會、といへど、不調和の結果におはる是非なき世の態なり、さるを此頃よき機會を得たるは、此軍時に際して、何となく面目あらたまり、質素儉約などの名のもとに、漸々衣服の如何を、氣にかけ心にとむる習慣の、うちこはされむとする成けり、外飾ばれる着服を事略ぎ、數多く調製し、簞笥の中に仕舞置て、とりかへ、引かへ、着す弊を廢して、何事も簡略に、心輕らにあらまほし、人をとふにもしかぞかし、とはるゝ方も亦しかぞかし、客座敷に衣服あらためて聲づくり、酢醤麥の心づかひよりも、煎茶一杯に、われも針の仕事の手をやすめぬほどに、心おきなくば、互に心のくまもうち出て、智識交換などもしらずしられず容易に要用の事も辨じやすかるべし、日頃破れたる、袖口、裾に、人目はぢらう程、心掟なきはいはんも論なし、たゞわざとしからぬがすべて女も見よかるべし、友達の行かひならで交際に向ふては訪ふ方も、朝より髮ゆひ、化粧し衣服の撰擇などに、半日つひやして土産物の心じらひ一方ならず、さて先方にゆきては、いつも同じ、寒暑の挨拶、無沙汰の侘、などいひはつれば、早言葉はきれて手持なく、そこ〳〵に立かへるいとつきなし、彼これ共に、今すこし面倒をはぶきて、視察などの外は、配合色合さすがに心じらひしながら、華美に流れぬふし糸、銘仙のなれ衣、なれてみだれぬ心を交際の則として事の中庸の得たしとこそは誰もいふ事ならめども、とかく行はれがたかるべきを今一きは心づけまほしうこそ。

從軍外國記者（月旦）

渡邊生

○モーニング、ポスト（倫敦）の

ナイト氏

氏を僕に紹介した某英國人か從軍前に云つた「ナイト氏は英國の紳士だ、紳士のタイプだ、夫りや長い月日の中には癪に觸る事もあらうし、腹の立つ事もあり、衝突せんとも限らんが、必と何所となく英國紳士の態度を供へて居ると云ふ事に氣が付くであらう」と、成

程、約七八ヶ月間寢食を共にした僕は英國の紳士と云ふ者を初めて知つた、そして所謂紳士とは斯樣な人であるかと實際に惚れたのは僕の生涯を通じて後でも前にも此人一人だ、

陸軍大尉で、軍人として二度、新聞記者として十二回、此度で十五度從軍したと云ふ軍事通、南阿の戰爭で右腕を失ひ、漸と瘡が癒えた許りで直ちに東洋へ遣つて來たので、其年齡を問へば五十有八、何んと勇氣のあるものではないか、

だが、先生隻腕の所爲か、それとも老年の爲か大のアワテ者で放心家で時に酷く狼狽する、其爲に滑稽な失敗が何程もある、イヤ之か近道だ、ショート、カットだと何度二人で山の中へ迷ひ込んだか知れぬ、一度斯んな事かあつた、

鎭南浦から義州へ行く途中、嘉山の兵站司令部で急がなければ鴨綠江の戰の間に合ふまいと云はれたので大急行で車輦館迄遣つて來た、所が其前に氏の乘馬は足部を痛めて乘れないと云ふので宜川の宣教師の宅へ預けて小さな朝鮮馬に乘つたのは好いが、仲々思ふ樣に駈けない、馬までが朝鮮的でノソリ〳〵して居る、他の連中は各自に先へ行つて仕舞ふ、サア先生氣が氣でない後に附いて居て、僕を頼みて續けと計りに一鞭當て〻駈け出した、二時間程は無難であつたか、僕か鳥渡二十分間程息んで居た間に先生、何所へ行つたか分らぬ、行けども〳〵追い付かぬ、其晩所串館に着いたが、未だ遣つて來ないと云ふ、僕より先へ來た者か着いて居ないと云ふのは、扨ては途に迷つたのであらう明朝迄には分らうと、仕方かないので打捨置いた、すると夜の引明頃に先生片手に鷄を一羽ブラ下て、馬は朝鮮人夫に曳かしてボンヤリ司令部へ遣つて來た、途を間違へて博川へ迷ひ込み同所の兵站部で鷄を貰らつたが、料理が出來ないので、食はず飲まず夜通し歩いて途中六度轉んで（隻腕の爲め中心がとれないと見えて駈けると必と轉ふと度々てあつた）今此の通りと例の快辨に諧謔を交じへて面白お可笑しく昨夜の出來事を話して居たが、朝餐か濟むと僕等と一緒に出發して些も疲勞の容子か見えなかつた、

或時、難問題か持上つた、之を容易く解決する爲に若し取締の將校から其事を尋ねられたら、斯ふ云ふ風に虛を吐いたら事なく濟むだらうと進言した、所が、先生沈思默考して居たが、何ふも僕には虛は言へぬ、さうかと言つて君に虛を言つてくれとは尚更賴めぬ、虛

を吐かなければ事か面倒になる、それては仕方かない、其事を問ひ掛けられたら返事をせずに置かう、そして他に紛らして仕舞ふ、何と良策てはないかと呵々大笑したが、一寸した事ても氏の品性は現はれて居る、

天幕内て金を百圓程盗まれた事がある、平常周章先生だから、斯んな折には嘸狼狽へるだらうと思つたが、さてさうてない、頗る眞面目に沈着いて僕を招いて「金を盗まれた、が然し誰にも言つてくれるな、傍の者が感情を害するといけないから」と云つたきり、

氏か著書の中て有名なものは「戰後の南阿弗利加」及び「三帝國は何れに合するや」等て、之等の書は丸善へも來て居る、西藏探險記の一節の如きは頗る興味かある、世界の大瀑布ヴイクトリヤをリーブイングストンから五人目に見た人て加之も七ヶ月も立籠つて種々な寫眞を撮り、倫敦て度々之に關する講筵を開いて大に喝采を博したさうだ、

文章は勁健てそして觀察は頗る奇抜てある、此人に接して此文章を見ると何うして何所から此文字が書けたらうかと怪まれる位、而もウヰスキーを飲まなければ決してタイプライターに向はない氏にして：・・・・・

○紐育ウォールド（米國）の
デイウインデー氏

義州の一里計り手前、昌光銅と云ふ所に滯陣して居た時、敵情も分からなければ我軍の容子も何が、何やらサッパリ分らぬ、其所で何でも魁けしやうとのみ、焦せつて居る先生、如何でか愚圖々々して居られやう、直ちに通譯を伴ふて馬を龍岩浦に飛ばした所が、司令部で引捉まつて何んと言つても返へさないのみか、次の便船て鎮南浦を經て仁川迄送り返へされた、（之には軍事上の都合か色々あつたのて）、夫れから先生仕方がないから再び鎮南浦迄やつて來たか、匆々前進を許さない夜逃をしたが通譯の密告て途中で捉まる、と云つた様な滑稽劇を屢々演じて、彼是する中鴨綠江の戰も濟んて仕舞つてからやつと平壤まで來て其所から戰況を打電したと云ふ譯、

前廻りをしやうと思つて飛んだ羽目になり、無駄な費用と時間を費し其上肝心の戰爭を見る事か出來なかつた自暴腹て、色々な風說を立てゝ一時記者連中を騷がした、此人元來狷太で何もかも金一點張りだ、記者連中か打揃ふて、今少し長文の電報を打たして

くれまいかと軍司令部へ出願した時、斷じて出來ぬと言はれた、時に先生眞先に進んで、我社は莫大の費用を拂ふて余に從軍を命じた、將來費す所五六千圓である、而して滿足な電報一つ打つ事か出來なくては社に對して濟まぬ、依つて其理由を我社に打電する事を許されたいと威丈高になつて迫まつた、其時に藤井參謀長は嚴然として「諸君は此の戰を何と思はれるか、吾等は國を賭して東洋平和の爲に戰ひつゝあるので、萬一一歩を誤まつたならば我國家の安危存亡に關すると云ふ大事な場合、此多端多忙な時機に際して吾等の運命を左右するとも云ふべき一條の電線を假令一分間たりとも諸君の私用の爲に使ふと云はれるのは實に我軍に對する同情がないと云ふものじや、諸君は多大の同情を我軍に寄せられて從軍されたものと思つたに、軍隊の各部隊ですらも一字たりとも多く打電したいと願ひ出るのを一々節しさして居る多忙の今日、何んで諸君の私信を一字たりとも打つ猶豫かありましやうか」と極め付けられて一座森となつたが、此度はデウインデー非難の聲か起つて或英國記者の如きはデウインデーの申出は決して我等一同の意志で無いと云ふ事を認められたいと叫んだものもある、

廣人稠坐の中でも何所でも、構はす、おきに金々と云ふのかヤンキーの癖で、從軍記者も一の商買と心得て居る、

檢閲官に向つて、餘り檢閲を嚴重にして我等を苦められると、僕等は國へ歸へて貴國が公債募集の妨をしますぞと又しても金の事だ、

中途で通譯を解雇した、其理由が「電報料を削減されて入手する金か少なくなつたから解雇する」と義理も人情も知らない、只金の事ばかり、其所で僕等は彼に「デン公」なる尊號を奉つて誰れも一向取合はぬ事にした、

次號は

○タイムス(倫敦)のフレーザー氏

○デイリー、ニユース(志加古)のパツス氏

軍國雜記(上)

丁字樓

●愛らしいのは兵士だ、皆自身で然う言つて居る、「隊へ入ると呑氣になる」と、成程どれを見ても、無邪氣で居るから、それで戰爭も出來るのだ、郷里の親兄弟

妻子の事も打忘れて。

●僕は去年來、十數回我家を宿舍に供して、百數十人といふ兵士に接して見たが、槪して氣分は呑氣で居て、沈鬱なものは殆んど見なかつた、たまさか一人二人在るかと思へば、それは乾度、生計上の心勞があるのだ。

●さういふ者に出會すと、同情を表せざるを得ない、僕は口で勵まして、心で泣いたこともある、世間には家族救護と云ふとも、隨分規則上では、行屆いて居るが市郡町村いづれも、吏員の怠慢無責任から、規則丈出來て居て、實行の乏しいのが多い、そこで同じ出征兵士でも、處に依て非常に幸不幸がある、是等は全國畫一にする方法を講じたいものだ。

●さうでないと、出征兵士に幸不幸があるばかりでなく、費用其他の負擔の割當が旨く行かない、町村には富んで居るのもあり、貧しいのもあり、又出征兵士の(戸口に比して)割合が多いのもあり、少いのもあり、そこで一町一村で、それをやらせて置くと、自然厚薄の差を生ずるのも、已むを得ないのである。

●殊に出征兵士は、市郡の爲に出征するのでなく、町村の爲に出征するのでなく、國の爲にするのであるから、どうしても家族救護などは、全國畫一にしなければなるまいと思ふ。

●兵士が宿舍に入込むと、その主人を呼ぶ稱へはさま〴〵だ、僕もいろ〳〵に呼ばれた、旦那、お父さん、大將、親方、御主人、先生など。

●僕の家内も亦、いろ〳〵に呼ばれた、奥樣、お母さん、おかみさん、ごしんぞ抔。

●この呼び方にさへ、旣に其の人の素性は、おのづと說明されて居るのであつて、ほゞ其常識の何たるかを推察することが出來る。

●僕は是迄、新聞記者として、諸方を飛廻つたが、しかし今度の樣に、よく各地の人氣を知り得たことはない、僕は兵士に由て、その土地々々の氣を能く知ることが出來た、「人國記」なども、なか〳〵訂正せねばならぬ處がある。

●それは今、言ふべき場合でなし、又言ふを好まぬが、まだ〳〵何處共、著しい「通性の發達」があつて、容易に其性格が、一つの國民性の中に消化されることではない。

●さて地方に依て、稍く人氣の異つて居る丈それ丈家族救護などゝ云ふことにも、行屆く行屆かぬの差別がある、而して夫れは、二重に其者の爲に利害の影響を及

はして居る。

一は出身地の人氣よき爲、救護なども行屆くと、二は自分も其人氣好き處から出て、性格圓滿なるより、他人にも容れられ、兵士として殊に他の同情を惹き易く、到る處歎待せらるゝと、之を反對の場合に於て示すと、斯樣である。

人氣よからぬ地方
- 人氣よからぬ隣保鄕黨 ── 救護等の不行屆
- 人氣よからぬ兵士 ── 同情を惹くと薄し

◉隊長、殊に中小隊長などのよしあしは、兵士の利害に著しい影響がある、僕は一々こゝに實例を引き得る、數多の材料を有つて居るが、それは他日發表するとして、こゝには言はぬが、兎に角よい隊長につかねば、非常な損がある、人生感意氣で、ちよつとした處で、兵士も死ぬ氣になるのだから、隊長たるものは、餘程そこにコキウが有らうと思ふ。

◉僕の家は茅屋だ、眞に茅屋だ、けれども食物丈は潤澤に供給して、そのほか万事の待遇に注意するとにして居るが、中には一切がッさい、譯のわからない人物（輜重輸卒に多い）があるには閉口だ、併し斯いふともあつた。

◉一夜、輸卒三名ばかりが、遊廓邊へ遊びに行きたい樣な風であつたが、僕はそれと見たので、一あなた方は遊びに行きたいのではないか、然うであらう、併し夫れはいけない、御覽なアノ角力取を、あの角力取でも、勝ちたいとなれば、晴天七日の角力の間、女などに肌觸れるとはない、然うでない奴は、乾度負ける、あなた方は堂々たる大日本帝國軍人ではないか、其大日本帝國軍人が、敵前で遊ぶ抔といふとてはいけない、こゝは敵前だ、ネエ然うでせう」と言つたら、皆苦笑してコソ／＼寢込んで了つたから可笑しい。

◉宿屋業でないものが、宿舍を引受けるとの迷惑は、言ふ迄もないが、これも國民の義務だ、仕方がない、さりながら初めは義務で、申受けた奴が、後には存外商賣氣になつて、慾の皮を引延して居る者も段々あるそんな奴は、いつでも自己の利害からばかり打算して居るのであつて、物にさへなれば、何でも爲る、中には醜業婦などを薦める、不埒な奴もある。

◉この醜業婦の取締、これがナカ／＼うるさい、所謂「軍國の衛生」に付ては、恐る可き三笠症の爲に、戰鬪力を減殺する樣な事を、最も嚴重に取締らねばならぬのであるが、之に付ては、

一、絕對的に遊里に立入るを禁止すると。

二、遊里に立入るとは之を默許し、單に密賣淫の取締りを嚴にすること。

三、遊里の外、料理店飲食店宿屋等に於ける、接客從業婦（仲居下女等）の健康診斷を行ひ、其範圍内にある從業婦を除き、他の密賣淫を殊に嚴しく取締ること。

斯樣に仕方はいろ〳〵ある、三はつまり開放主義であるが、實際の情況を取調べると、之も已むを得ないところがある。

◉或人は絕對的に禁止を主張するけれども、之にはまた或る弊害を作つて來ると思ふ、その重なるものは、一般の風紀を紊すとであつて、切なる情慾の發するところは、素人に影響が及ぶとになるのである、そこで是は單に「軍國の衛生」と云ふ上からばかり見ないで社會上敎育上からも見てかゝらねばならぬ事と思ふ。

◉そこで、ポット出の法學士なンどが、黃な吻をして理屈ばかりで、法律規則を振廻さうとするとの、益々危險なるを感ぜねばならぬ、世上の事すべて相關的理法に支配されて居るのであるから、何でも「全局からの打算」と云ふとに目を着けねばならぬのである。

◉「軍國の衛生」に付て、思ひ當つた事は、かの公娼を[illegible]ナカ〳〵危險だ。

一、娼妓見習の名の下に置いて居る女に、客を取らせること。

二、檢黴醫の貪慾なるものが、時として檢査を故意に寬恕し有毒を放置すること。

◉或る地方では、宿舍で以て、兵士に着物を貸すとをやかましく取締つたら、今度は妓樓から、一種の客引（人力車夫）を出して、それがチャンと和服を持つて居れば、どこでか着替させて、連込むと云ふ趣向である、忘八先生の趣向は驚いたものだ。

◉宿舍へは、種々の行商人か來る、この行商人には、ナカ〳〵弊害が多いから、宿舍ではチャンと「行商人入る可からず」と貼札をして居るのである、それでも委細構はず、ドン〳〵繰込んで居る、その鐵面皮なると驚いたものだ、彼等の中には、ペテン師もある、手長島の者もある、地獄女もある。

◉この「行商人入る可からず」に付て、をかしい貼札を視たとがある、それは公衆人入るべからず。」

◉或日、僕の家へ兵士をたづねて來た、八字髯いかめしい下士先生が、僕に向つて「サハクと云ふ家は何處ですか」と問ふたが、僕は一を聞いて十を悟ると云ふ男（えらいものサ）だから、「さへき（佐伯）でせう、それは[illegible]先です」と答たら、「ウム、成程さうか。

日露媾和と日露同盟

『太陽』　早川鐵治氏

露國は到底勝利を得るの見込なく、我か國は最後まで勝利を持續せんとす、即ち日露の勝敗は既に龜卜を竢たずして歴然たるが故に、吾人は今日を以て方に媾和の時機に到達したるものと做すなり、然らば如何にして媾和の端緒を開くべき乎。如何にして兩交戰國の意志を疏通せしむべき乎。是れ具體的に言ひ難し。斯の如きは唯だ外交家の方寸にあるのみ。此際に於ける我が外交家の任務は實に重大にして、決斷と敏腕とを以て兵戰上の應援を爲すべきの秋なり。知らず、我か當局者果して何等の成算かある。

人或は戰爭終局後、早晩露國の復讐の來らんとを豫想し、之を恐るゝものあり、然れども彼が復讐の如きは毫も恐るゝに足らざるなり。若し復讐を恐るゝが如くんば始めより戰爭を爲さゞるに如かざるなり、人或は又た此際極東に於ける露國の勢力を根底より打破し、全く之を支那以外に放逐すべしと論ずるものあり。是れ寔に一理ある論なり。然れども此事たるや恐らくは望むべからざるの事たり。若し露國の勢力を全く極東の地より掃蕩せんと欲せば、更らに西伯利亞の地より彼が勢力を驅逐するの策をも併せ講ぜざるべからず、露國にして西伯利亞に勢力を有する以上、彼は極東に於ける勢力の衰頽を欲せず、之れが恢復に努むるや必せり。然かも露國を西伯利亞以外に驅逐するは殆んど不可能の事ならずんばあらず、されば媾和の要點は唯だ露國をして極東に對する侵畧的野心を放棄せしむるに在り、換言すれば武力を以て韓國は勿論、滿洲の主權を犯さんとするが如き危險なる野心を斷念せしむるにあり。其の商業的權利を或程度まで彼に與ふるが如きは、固より拒むべきにあらざる也。それ我か國は、韓國が露國の武力の爲めに壓服せられんとしたるか故に戰へり。滿洲の主權が露國の手に歸せんとしたるが故に戰へり、露國が滿洲を閉鎖し、其の利益を獨占せんとしたるが故に戰へり。然るに今や韓國は全く我か國の保護に歸しぬ。此の上露國が滿洲を世界の商業の爲めに開放するを肯んじ、而して領土上の欲望を全く斷念するに至らば、開戰の目的の大部分は即ち爰に遂せられたるものと云ふべきにあらずや。若し我か國が露國の勢力を根底より打破せんとし、執拗の態度を以て臨まん乎、是れ却つて後患を貽すの原因となるやも保すべからざる也。

日露兩國が戰爭結終の日を俟ちて、釋然として從來の怨恨の念を忘れ、互に手を執りて攻守同盟を締結するが如きも、亦一の問題たらざるを得ず。吾人は寧ろ東亞の平和を永遠に維持する上に於て、斯の同盟の成立を可とするものなり。元來我國の賴むに足らざる場合は、同盟論の唱へらるゝものにあらざるは勿論なり、然れども一旦開戰して我國の實力は充分に發揮せられ、敵として恐るべく、味方として大に賴むに足るを證明せられたる以上、平和を維持する爲め進んで同盟を締結すべきは自然

の勢ひなり。若し露國が領土を蠶食せんとするの野心を斷ち、單に極東に於て商業上の利益に浴せんと欲せば、我か國たるもの即ち之れを迎へて共に利益に浴するも不可なきなり。我國は固より領土を蠶食せんとするの野心なく、徒らに平和を攪亂せんとするが如きを欲するものにあらず。均しく平和を希望するの友邦あらば之と同盟を締結するも何の妨げか之れ有らむ。假りに戰爭終結後、日露兩國が攻守同盟を結びたりとせよ、而して露國の野心をして極東以外の地に伸べしめよ、極東の天地は爲めに永遠に安康なるを得べきにあらずや。抑も我國の欲する所は文明の進步にあり。極東の平和にあり。露國が平和を攪亂し、且つ文明の進步を妨碍せんとすればこそ、我は憤然起ちて彼を征したるなれ。露國が既に我國の主義を承認したる以上、之と同盟するも毫も支障なかるべきなり。其の効果は、獨逸が墺太利と同盟したるよりも、遙かに大なるもののなくんばあらず。日露同盟より來る影響は機微に屬し、今茲に之を言ひ難しと雖も、之が爲めに永く極東の平和を維持するを得べきは疑ふべからざるに似たり。今や交戰方に酣なり、此時に際し日露同盟の論を聞かば、人或は吾人を以て妄りに言を好むるものと爲さん。然れども靜思默考遠き將來の利害を打算せば、吾人が言の全く無稽ならざるを知るべし。

軍用手票問題

『東京朝日新聞』

戰局の進捗は益軍用手票の聲價信用を增進すべき筈なるに、事實の之に反するこそ奇怪なれ。畢竟當局の其宜きを失したるに外ならざるなり。一昨日の紙上に掲げたる寄書家の所謂の如く、吾人も亦之れを以て(一)營口附近に流入するもの巨額なること、(二)此停滯せる巨額の軍用手票に對し疏通其當を得ざるもの二點に歸せざるを得ず。隨つて今日軍票の整理を行はんとするに就ても、亦た此點の匡救より着手するの外なしとす。但し實際を云へば第一の點は之れを行ふこと寧ろ不可能なるべし。我か軍が滿洲各地に發行する手票は蓋し非常の巨額にしてもとより貨幣としての土民の需要に超過すること幾十倍なり。其の溢れたる部分は必ず營口の如き地方の中心市場に集中せざるを得ず。之れを避けんと欲せば手票の發行を見合はすの外なく、手票を發行すれば何れ營口邊に集中するものと覺悟するの外なし。即ち第二の施設として疏通の手段を講ずる必要ある所以なり。此點に關する我當局の準備は從來最も粗漫を極む。滿洲各地より營口に集まり來れる幾千萬圓の手票は、此市場を行止りとして又他に疏通の道なく、勢此に大堆積を來さざるを得ず、而して軍の各部に於て發行せられたる手票は更に、後よりと押掛けて來るを以て、恰も出口なき潮水の如く、愈久うして愈多く充溢するに至れるなり、もとより銀貨交換の一路は當初より開放せられありたり。されど此水路は餘りに小に過ぐ。然も小なりとはいへども僅に殘れる疏通の路は只此一方に限れるを以て、交換の請求は常に巨額ならざるを得ず、請求巨額なるが故に我當局者時に躊躇の念を發し、當局者躊躇するが故に交換の請求はいよ〱多く、轉々相及ぼして終に手票の不信と低落とを來せるなり。其失敗の迹あまりに埒もなきに似たれど、是れが即ち事の實際なり。內情を聞かば諒とすべき所もあらん。兎に角に當局者が全く疏通の方法に想ひ到らず、若くは銀貨交換の只一事を以て之に應ぜんとしたることそ、即ち百弊の源といふべきなれ。硬貨を愛するは支那人の天性なりといふも、幷は主に地方の小民に就ての言なり、經濟市場の商民は夙に證券の使用を解す。彼等若し有利に其の所有の手票を疏通するを得ば、何

の必要ありてか強て交換を求めんや我當局者も亦準備の保有に汲々たるに及ばざりしなり。今は即ち支那人をして銀貨交換の外全く手票を疏通するの途を失せしめ而して時に此小水路にすら堰閘を置かんとす。夫れにては餘りに不仁にして且つ餘りに拙ならずや。然らば疏通の便方果して如何、敢て新説といふにはあらざれと手票の動力を滿洲以外にまで及ぼさしむると、換言すれば手票を以て上海、天津、芝罘の如き要地と爲替を取組むを得せしむるの外に策あるべからず。日本との爲替は既に實行せられ居る由なれば、進んで支那の各地にまで之を及ぼすべきなり。今や滿洲（殊に營口）は日本軍の散布せる莫大の資金を以て大に他の市場に買ふの地位に立つものなり。買方なるが故に又大に資金を送出せざるべからず。然るに彼等が現に日本軍の手より得る所は手票なるが故に之を送出するが爲には先づ之を銀に交換するの必要あり（爲替にても）。爲めに我政府は交換すべき銀の準備に忙はしく、彼等は又充分の銀を得る能はずして所有の手票を持餘すに止まる。此の如き事情の下に於て手票に依る爲替の開始は則ち雙力の爲めに一切の面倒、不便を除却する効を擧ぐるを得べく、即ち支那商人は手票を以て他の市場の支拂に充つると同樣の便を受け、我は又爲替の取組即ち間接の交換たる故を以て、無益なる銀準備の煩を免るゝを得。而して軍票が苟くも自然の需要に超過する限り必ず爲替銀行の庫中に回收せらるべきを以て、今日の如く市場に堆積して聲價を墜すの虞も亦之あらざるなり。疏通の方此に至りて始めて大成す、其他の方法としては税關其他に於て公納を許すが如き、日本商人及商品の出入を多からしむるが如き、又未だ其營口に流入せざるに先ち、清國地方廳をして公納に收受せしむるが如き、或は地方自然の需要を増し、或は間接の準備をなし、或は營口市場への流入を少からしむる等の効、もとより多少の見るべきものあるべし。併せて行ふは即ち可、只主として依頼すべきは矢張り上の如く爲替準備の一方あるのみ。吾人は當局者の見る所亦必ず上の如くなるを信じ、速かに其完全に實行せられんことを希望す手票の低落は戰時財政の一缺點として損失少からざるのみならず國家の面目よりいふも亦甚だ面白からざるなり。而して戰後の經營に惡影響を殘すの點最も注意すべし

政黨は成長す、製造せられず

『日本人』

今日政黨の改造を企て若くは新政黨の樹立を計る者猶ほ之れ有り、かゝる計畫を爲すは固より不可ならざれど、而も政黨は箱を造る如く勝手に造り得るものに非らざるを考へざるべからず。從來人間の事唯だ箱を造ると同じきやに思ひ、爲めに失敗を招けるもの擧げて計へ難たし、最も人事に精はしき者にして猶ほ動もすれば此弊に陷れり。奈破崙一世は英國征伐を企てゝ大に軍艦を新造せり、思へらく軍艦にして足れば英國を征するに於いて何か有ると、而して實は士官及び水兵が養成するに多大の年月を要し、たとへ速成して軍艦に乘組ましむるも依りて何程の功を成し得ざるを曉らず、即ち此に念ひ到らざりしが爲めに終に大計畫をして水泡に歸せしめぬ。我が豐太閤も多年海上の生活に慣れし倭寇を利用せんとす、一時に多數の船艦を造りて此に一定の將士を乘組ましむれば以つて能く戰ひ得べしと信じかくて後ち韓國に進前せしも、數々敗北するの已むを得ざるに會せり。此の二人はもとより能く人事に精通せるもの、決して斯かる見易きの理を曉らざるにあらざりしも、たゞ生まれ

てより船艦の經驗極めて少かりしの故を以つて竟に此の如き失敗を演ずるに至れり。顧みて近時の政界に觀るも、他に有力なる政黨の存在するを見、已れ亦た政黨を造らんとせる者二三に限らず、福地丸山水野の三氏先づ帝政黨を組成せしが、謂ゆる三人黨の綽名を博せるに止まり、久しからずして消滅せり、西郷品川の二氏も亦た國民協會を組成し、倏忽の間に五十餘名の代議士を收拾したりしが、久しからずして萎靡振はざるを致せり。次いで伊藤侯の政友會を組成するあり。能く一黨にして衆議院に過半數を制したりしが、組成の後ち紛亂絕ゆるなく、已れ亦た遂に去らざるを得ざるに至る。此等の數人は皆な決して人事に通曉せざるの人とするを得ず、寧ろ世故に慣れたりとすべきに、其の政黨に就て爲しゝ所の兒戲に等しきものありたる、實に政黨の事に經驗を有せず、宛も箱を造ると同じき心を以てしたるに因る。夫れ政黨も亦た人間の集合なり、何んぞ箱を造るが如く斯かく容易に成し得るものならんや、實に政黨は製造するよりも寧ろ成長せしむべきものたるを記憶するを要す。

新たなる政黨を造るは必ずしも不可ならず、但だ此をして政黨らしき活動を爲さしめんとする、一朝一夕の能くすべきに非らざるを銘記すべし。福地氏にして帝政黨の組成者たる、此と共に始終行動を一にし種々雜多の變遷を經ざるべからざりしなり。西郷氏の餘りに國民協會に執着せざりしは元と言ふを要せざる所、而して品川氏の死に至るまで絕えず會務に從事し、如何の破綻分裂に逢ふも深く意とせざりし如き、以て好典型として稱すべきに足る、凡そ政黨を作らんとするには必ず此の如き覺悟ながるべからず、獨り其の何の効果をも見ずして終りたるを憾みとすべし、伊藤氏の政友會に於ける、短日月の間に何等成し得べき筈なし、種々の變化は避くべかざる數にして、一時の勃如たる膨脹はも怪むに足らず、壯觀を好む平素の性癖よりして暫らく身を此に委ねたらんも、政黨は彼が如き御祭り騷ぎを能事とすべきにあらず、此と終始するの決心ありて始めて僅かに緒に就くべきに、幾くならざるに去りて顧みざるに至れる、全く政黨を成立せしむるの理を辨へざる者といふべし。今日政黨の改造を言ひ、新政黨の組織を言ふは固より可、吾人敢て之れを非とせざるも、而も其の決して短日月に成るべきに非ざるを念はざるべからず。

既成政黨を善からずとして新たに政黨を造るとするも、果して此よりも一層良善なる政黨を組成するを期すべきか一層良善なる政黨を組成することは或は之れ有らんも、而も是れ一規約書の能くし得る所ならず。當初既成政黨の弊を慨して大に任ずる所あるもの相ひ集まりて結黨するとも、意見は則ち區々に別れ、組織も種々に變更するを免れず、而して彼此の意見少しく扞格する、則ち延いて衝突を生じ、互に相ひ排擠し攻擊し、前に硬直として稱せし者に對し忽ち腐敗黨の汚名を冠するの奇觀を現ずるあり、要するに政黨として能く活動し得るまでには決して容易のことにあらず、若し此の覺悟ありて而して永く此に從事する、則ち漸く功を成すを誤まらざらんも、然らざる限りは何の成す所もあるなく、或は既成政黨の弊を咎め已れ此と齒する能はずと公言しながら、其の樹立せる所の却て此より劣るも之れ有らん。政黨に快からずば、單獨にして已れの是とする所を枉げざるに若かず、單獨は非難すべき事ならず、又た必ずしも無勢力とも限らず。かの現存せる政黨の弊多きを咎め、其改善さるゝを待ちて後に入らんといふ如き、實に甚だしき謬想に陷る者なり、已れ自ら其の弊を矯めて改善せしむるを敢てせず、却て改善されたる政黨に入りて世に誇んとす、餘りに蟲の善き沙汰ならずや、政黨員たる所は政黨の爲めに盡すべき義務あり、此の弊ありとして非難さるゝに

際しては他と同じく非難を甘受し、而して已れ責を分ちて弊所を改善するが當然なり。
政黨はもと活物、意の儘に製造するを得ず、此をして己れの理想如くならしめんとする、必ず多くの歳月を費さざるべからざるべからず、かゝる明白なる事理を辨識せざる者は、到底政黨の運動に堪へざるものとすべし、徒らに政黨を改善すべし若くは政黨を新造すべしといふ如き唯だ騷擾を好むの徒とす誤何ぞ容易なるの謗りを免れじ。

軍人家族救護の一弊害

『時事新報』

出征軍人の家族遺族に對して社會一般に保護救恤の道を盡し軍人をして後顧の憂なからしむること肝要なる中にも其郷黨隣里の人々は互に淺からざる緣故を有するもの多くして軍人銘々の留守宅の樣子を日々見聞することなれば取別け其保護救恤に熱心なる可き筈にして亦是れ自然の人情なるに近來往々耳にする所に據れば地方に據りては出征軍人の同郷人か其家族遺族に對するの處置甚だ冷淡にして當を得ざる爲めに彼等をして饑餓凍餒に泣かしむるもの少なからざるが如し畢竟土地の重立ちたるものゝ不注意に原因することなれば其自治體の監督に任ずる地方官は斯る事實を認め次第、相當の注意を加へ其町村の經濟に應じて軍人家族の待遇を完全ならしめざる可からず殊に今度地方官會議の開かるゝを機會とし各地方官が互に救護事業に關する研究を遂げ其方法に就て他の長を採り我短を補ふことゝせば最も妙なる可しとして玆に更に注意す可きは折角軍人家族救護の仕組を設けたる町村にして表面は戰死者の爲めに自治體にて葬儀を行ふ等如何にも體裁好きに反し其裏面を窺へば救護の實、毫も擧らざるのみならず斯る仕組の出來たる爲めに却て軍人家族の迷惑を釀すものさへなきに非ず例へば戰死者の村葬を行ふ場合に其筋より下附せらるゝ葬儀費、他の救濟團體及び親類知人よりの弔慰金を悉皆其葬儀費中に引上げながら其金額に相當せざる粗末の葬儀を行ふものゝ如き其他これに類似の事實少なからずと云ふ斯くの如きは救護の名ありて其實なきのみならず軍人の家族に取りて難有迷惑の甚だしきものと云はざるを得ず出征軍人の爲めに其家族の困難を憐察し救護事業の普及を謀らんとするものにして斯る事實を見聞するときは如何の感を催ほす可きや開戰以來僅に一年にして救護の事業漸く緒に就かんとするの場合に早くも是種の弊害を生ずるとは誠に堪へ難き次第と云はざるを得ず地方行政の任に當るもの能く能く管下自治體の内情を察し孜々として救護事業の發達を督勵する其一方に斯る不都合極まる所爲に對しては嚴に戒飭を加へ救護の實を擧げしむるに勉むること肝要なる可し。

上村中將の海軍旗談

『太陽』

◎艦隊にゐましたとき、文部大臣が注意をしたものと見えまして、小學校の子供に、繪をかゝせて送つてきました。國旗の繪や、軍艦の繪を書いてあつたですが、其國旗が皆違つてゐる、普通の國旗の外に、錨の附いた旗を海軍旗と思つて、それを軍艦に掲げさせてある。旭の光線を出してゐるのは、海軍旗で、錨の付いたのは、海軍大臣旗です。學校の先生がコンなことを教へて置かないから、軍艦にみんな海軍大臣旗を掲げて書いてあつた。子供の時からコンな間違を教えて置くと、大きくなつてもやはり間違ひは直りますまい。

◎けれども子供などが、コンな間違ひをするのは、無理もないことで、一般に祝捷などに使つてゐる海軍旗は、大抵間違つてゐます。絵にかいてある海軍旗も、やはりそうです、ドウも軍艦旗と大臣旗とを取り間違へてゐるのが多いです。國旗と海軍大臣旗とを用ゐて、陸海軍に祝意を表するといふのは、氣が附かずに間違ひをしてゐるのです、いつぞや主上が御乗りになつてゐる宮廷列車に、やはり國旗と海軍大臣旗とを交叉して掲げたときへありますが、普通の國旗の外に海軍大臣旗を掲げるときには、その列車の一番首位にゐるべき人は、海軍大臣でなければならぬ筈です、コンナ甚しい間違ひさへあつたのですから、一般に海軍旗を間違へてゐるのも無理はありますまい。

◎それからよく絵にかいてある軍艦が、戦闘中軍艦旗のマストの少し低い所にかけたり、桒の所へかけたりしてあるやうです、子供のかいた絵なら致方もないですが、それも相應な畫家のかいた絵が、最初間違つたから、子供もそれに習つたことと思ふです。一体戦闘をする前、軍艦旗を擧げるときには、艦員が甲板に揃つて、君が代の曲の奏樂中、それをマストの一番絶頂に擧げるのです。それから水兵が昇つて往つてそれを堅かと結付けて、彈丸が當つてちぎれ／＼になつても吹き飛ばされぬやうにするのです、戦闘旗がなくなつては、ならぬのです。

◎それで軍艦旗といふ者は、マストの一番先きの所へ掲げる者です、それを中程の低い所へ掲げておいては、半旗を掲げたといふもので、弔意を表する時に限るのです。それですから中程の邊へ擧げた絵をかきますと、それは半旗を擧げた者と見ればならないのです。又國の海軍旗を中程に擧げるのは甚だ宜しくないことです、先年操江號を捕獲しましたときに、支那の國旗を中程へ低く下げまして、日本の國旗は一番高い所へ揭げたのです。それですから、軍艦旗といふ者は、一番高い所へ掲けて書いておかればならぬです。

◎海軍の事が、一般に世に知られてゐないのは、遺憾にたえませぬ、殊に畫家などは、此等の邊に注意をして貰ひたいものです。こゝにある寫眞は、日本艦隊の絵を複寫したのですが、原との絵は英國の畫家ウヰリヤムに頼んでかいてもらつて、東宮殿下の御慶事があつた時に献上したのです。もつと大きい寫眞は、海軍大臣の官邸にかゝつてある筈ですウヰリヤムといふのは、船の絵をかく專門家で、此絵を頼んだとき、英吉利の波と、日本の波とが違つてゐるといふことで、わざ／＼印度洋まで海を見に來たといふことです、波を見るのにも、艦の舷側へ金網を張つた者を出して、波の來るのも構はず、それの中にれてゐて海を見るといふ具合で、中々勉めたものです。それで一年もかゝつて此絵かできあがつたのです。この絹ができてから、船の專門家に見せましたが、總て船の構造が、みんなチヤンと寸法を測つてあつて、殆んど驚くばかりであるといふことでした。絵をかく人は、この位に苦心をせねば、よいものはできまいと思ひます。

◎西洋の絵は、一體によくできてをるが、此頃倫敦から來る戦争畫の入つた雜誌を見ますと、水雷を發射したり、大砲を擊たりする所は、みんなよくかいてありますが、その中にもやはり意外な間違があるのです大砲といふ者は、平生舷門から中へ引き入れて、鎖をかけてあるのですが、戦闘準備をしますと、鎖を外づして舷門へヅツト出して發射するのです。それを英國の雜誌には、鎖のかゝつたまゝで、發射してゐる絵を畫いてあるのです。此等の間違は、皆海軍の實地を知らない所から來るので、致し方もありません。

三版

家政百箇條

此書は本會が多年の經驗を帶みて一般家政上の法則となるべき事ども百箇條三百六十七項を一冊にまとめ軍國の際能く家政の法則を心得て家を齊へ堅忍持久の覺悟を十分ならしめんが爲に發行せるものなり定價拾貳錢（郵送料を要せず）郵便切手代用苦しからず

東京麴町區下二番町三七
大日本女學會
電話番町千三百三十番

家政百箇條世評一斑

◎國民新聞　「をんな」の臨時增刊で料理、裁縫、洗濯汚點拔、家事衛生、家庭教育、禮法、家庭に關する法令等百箇條を集めてある何れも實際適切なるもので一家の主婦及主婦たらんとするものに取り至極よい心得草であらうと思はれる

◎中央新聞　家政に關する百般の法則を婦人に辨へしめ軍國多事の際家内に無駄を生ぜずして能く家事を整理せしめんがため特に增刊したるものにして（中畧）記事着實にして妄りに高尙に走らず家を齊ふる婦人の熱讀すべき良書なり

◎都新聞　（前畧）一般に婦人の心得べき事百箇條を簡單平易に記述せしものにして家を齊へんと欲する婦人等の益友と爲すに足るものなり

◎京都日出新聞　（前畧）日常家庭に於ける須要の事どもを網羅して遺憾なし寔に主婦の良益友たるを疑はず

◎大阪朝日新聞　（前畧）家政を執る婦人の座右に缺くべからざる參考書なり

◎大阪新報　大日本女學會が多年女學講義錄を編輯するに當り廣く諸名家の講義中より家政の法則となるべき事項を摘記し（中略）所說懇切穩當是非家庭に一本を備ふべき良書なり

◎神戶又新日報　本書は家政に關する法則を一般婦人に知得せしめ戰時は勿論何の時にあたりても所謂無駄なる者を生ぜざる樣克く家事を整理せしめんとするにありて（中略）行文解し易くして懇切

◎中京新報　（前略）一般婦人殊に軍國婦人の爲發刊せるものなり家政を執る御婦人達には座右の寶たり處世の羅針盤たり

◎橫濱貿易新報　（前畧）同會が多年女學講義錄編輯上ひろく蒐輯したる名家講話中家政の法則となすべきものを選び上は禮法教育の事より下は料理の鹽梅漬物の加減に至るまで婦人として日常心得べき必要の箇條を網羅したり夫人令孃もこの卷を誦んずるを得は一家の幸福を增進すること少からざるべし

◎滋賀日報　本書は雜誌「をんな」の臨時增刊にして同誌主筆山澤俊夫氏が家政を掌る婦人の爲にものせられたる者にして（中畧）何れも家政の珍とすべく家政を掌る婦人の座右に備付すべき良書とすこれ記者が讀者に一讀を薦する所以なり

◎鶴岡新聞　（前略）何れも有益の記事を以て充滿せり殊に同會にては世人に普及の目的にて印刷實費を以て其需用に應する者なりと

◎常總新聞　（前略）軍國健婦の好伴侶として見るに足るべく又時機に適したる册子と云ふべし

◎高知新聞　（前略）ありとあらゆる家政向きに必要なる廉で百箇條を纏めて一册と爲し婦人齊家の金科玉條とすべきものなり

◎尾道新聞　（前略）齊家の婦人は勿論將來理想の家庭を組織せんとする女學生諸孃は必ず一本を購ひて座右に備へざるべからず

◎鷲城新聞　こは一家の主婦には平生より心得おくべき日用家事心得を項を分ちて錄したるものにて理論にはあらず誠に家政上一寸都合よき者にして何處の家々にも一本づゝは備へおくが宜しからん

SMILES' DUTY

サミユエル スマイルス原著

職分論

大阪朝日新聞の評語

我國の青年に偉大の感化を與へたる『西國立志編』及び『西洋品行論』の原著者スマイルス氏の著『チューティ』を譯述したるものにして右二書と同じく國民の德性を涵養し品性を陶冶すべき良書なり氏は昨年九十歳の高齢を以て圓滿なる一生を終りたるが元來躬行實踐の人にして身自ら立志編中に入れらるべき人物なり氏の如きは眞に英國紳士の好模範と稱すべく氏の著書を愛讀する者は親しく氏に接して諄々たる教訓を受くるの感ありて知らず識らずの間に至高の靈化を被むるを得べし世の青年諸子徒らに岐路に趨りて成功を急がんとするを止め飜然自警して品性修養の大道に立歸れ此書夫れ或はこれが指針たらん

下巻發兌

要目次の如し

第八章　陸軍軍人
第九章　博愛
第十章　傳道に於ける勇氣

上巻（第五版）中巻（第三版）下巻（再版）以上
各巻定價金參拾錢　郵税四錢宛

出版元　東京本郷駒込西片町十番地　内外出版協會

詞藻

出來心

登張竹風

「私は眞實貴女に惚れました。」

「お惚れなすつて……貴郎が……私!!(?)……御冗談もんでございましようね。では、何でございますか、私を妻に……と被仰るのでございますの。」

女は美しき眉を顰める。

「否や、決してさういふ譯では、……實はその何です、貴女の美術を敬したのがそも〳〵の思の種て、いつしか戀となりにけりと、まあ、いふやうな次第て。實に私は貴女のために日夜懊惱して居るので……」

男は口を噤んでその後を言ひ得ない。女は遽かに男を凝視めて、新なる興會油然として沸き來れる如く、一寸笑顔を作つたが、半は嘲り、半は信ぜず、儼然たる城郭は依然として犯し難い、男は熱せる眼を放つて、

「私は貴女に惚れました」

と唯一言。

「眞實とは思はれませんね。」

「私の如き人間は不幸です。自分の感情に背くことが出來ないのですから。」

「自殺をなさらなくつちや、面白くございませんのね。」

「貴女は他人の眞心を、そんな言葉で退ける積りですか。」

「まあお氣をお鎮め遊ばせな。私、なんてございますよ、貴郎のお心をちやあんと讀んで居りますのでございますよ。」

「何と被仰る(?)最少し明瞭言つて下さい。」

「いゝえ、私の方から先づ貴郎のお心を伺ひたいのでございますの。貴郎は當代の大家先生で被居るのでございましやう、その大先生たる貴郎が、私風情の女の何處がお氣に召して、そんなにお迷ひ遊ばしたんだか、それが承りたいのでございますわ。お聞かせ下さいましな、先生。」

「私の年が老けて居るからと云つて、何もそんなに馬鹿になさるもんぢやないてしやう。譯を申し上げたところて、貴女は唯その紅の唇を歪めて、冷笑する位のもんだ。」

苦々しく答へて、葉卷の殘りを銀製の灰壺に投げた。女は僅かに笑つて劇しく體軀を搖動つた。燃え立つ爐煖の火焔は眩きばかり女を照らして、之に映する金髪はまたなく麗しい。白い華奢な指に握られた卷煙草は幽かに烟を吹いて居る。頭は一寸傾いて男を視る眼は艶なり。深い搖椅子に凭りかゝつた姿は、さはらば落ちん玉笹の露にも似たる風情かな。絹衣の裾はゆるく垂れて、寶石の裝飾が履の尖端に光つて居るのが見える。氣高い、健かな、若々しい、人を醉はしむる、得ならぬ芳香は男の方へ吹いて來る。男は激したやうに、ツト立ち

上つて、廣い部屋を唯歩む。洋燈の光は、強い花の香と美人の姿と相合して、男を責める。男は唯酔うた。やがてブル〳〵と慄へた。その兩の手は女とは遠くかけ離れた室の隅の椅子の支柱を攫んだ。

「あの御返事は如何でございますの先生、先程からお待ち申して居るのでございますが。」

女は飽くまで意地が惡い。

「何……何の御返事ですか。貴女は何處までも、自分の美しいのと若いのとを恃んで人を嘲弄するのですな。貴女は今を盛りと咲き誇つてる花の如き得意の時代だから誰でも彼でも冷かに退けるといふお覺悟でせう。併し何時まで貴女はその冷酷な態度を續けるのですか」

「左樣でございますね、まあ戀人の出來ますまでは……」

「何時まで待ても戀人が出來なかつたら如何です。今日の世の中は昔のお伽噺時代とは違ひます。名聲高き今日の藝術家たる貴女はお伽噺の姫君としては餘りに相應しくない。」

女はつんとして、

「併し先生、私はそれが希望でございますわ。私、何時までも戀人を待ちますわ。戀愛を解しない男を良人と致しましやうより、却て獨身の方が結構でございますね。世間の結婚は皆な所謂理屈の結婚でございましやう。藝は身を助けると申しますが、まあ兩親の蔭で、かうして獨り立ちを致しましても餘り困りませんだけ、つまらない結婚を致す必要もございませんし、これだけは眞實に難有い身の上だと喜んで居りますの。」

男も女も暫時無言。稍あつて女は先づ口を開く。

「貴郎は眞實私を可愛く覺し召して？……あの能く〳〵、理屈でお考へ遊ばしたんでございませうね」

「そんな馬鹿な……」

「それては何でございますか、貴郎の戀のお相手としては私が先づ魁といふのでございませうか。」
「こんなに迷つたことは曾てありません……この十日間といふものは、全で自分ながら別人のやうになつて了ひました。全身は唯煮え返るやうて、何事も手に着かない。食事も酒も喉を通らないほどで……」
「左樣てございますか、それはまあお氣の毒でございますこと。併し先生、先生のやうな御大食家にはこんなことも偶には宜しうございましよう。」
男は激しく周章てた。
「冗談を云つちや不可ません。貴女は私の神聖なる感情を汚すといふものだ。」
忽ち女は突つ立ち上つて身を屈めた。餓えたる者の食を求むるが如き、渴望の念はちらとその面影に浮んで、男を眺めたその流眄は燃ゆるやうであつたが、男は唯物思に沈んでさりとも心附かない。
「近頃までの私の生活は、花より花を追うて、浮かれ歩く蝶々の樣な者てあつたのです。金で口說いた女もあれば、品物で口說いた女もある。その手で徃かない女に對しては辯說で口說いた。その他あらゆる秘術を盡して口說いたもので、若い女でも年增でもお轉婆でも、凡そ吾が物とならない女といふものはありません。併しながらその境遇に臨んでは、唯笑ひ唯樂しんで居たものでした。」
「さういふ御經驗家で被居る貴郎が、まだ一度も眞實に女にお惚れ遊ばしたことはお有りなさらないのでございますか。」
と、問うた女の脣は輕く動いて、冷笑の色がほの見える。
「惚れた女？……左樣一度ありました。私が大學の學生であつたとき、許嫁までした一寸愛くるしい女が…………—

「何故その方と御結婚遊ばさなかつたのでございますの。」
「私はその當時まだ二十一二の若盛りでしたから、そんな時代から束縛を受けるのは餘りに殘念だと考へたものです……」
「邪見にも程があるわ。」
と女は口の中に謚いて、
「その婦人は如何なさいまして？」
男女とも再び無言。
「はあ、如何しましたか、近頃は一向に音信を聞きませんが、多分小學校の教師でも爲て居りますかな……もう餘程婆さんに成つて、今ではもう見る影もありますまい。アハヽヽヽ」
女の椅子は劇しく動いて、その兩手は拳を固めて、椅子の支柱の上に横はる。
「先生、貴郎が御關係なすつた婦人達でございますね、御關係なさる以前には矢張り戀しいとか、慕しいとかお思ひなさいましたの？」
「左樣、あの女をと思ひました當初には、隨分熱くなりました。熱くはなりましたが、大熱々の眞最中でも、自分は自分で戯れてるのだといふ意識はありました。」
「婦人の方でも唯もう貴郎と戯れたばかりなのでございませうか」
「十中八九は先づ然うです。一人や二人は心から私になんとかしたのもありました。唯今でもまだ多少は私に未練を殘してる奴も無いではありません。併しそれは要するに昔の話に過ぎない。貴女の音樂を毎夜拜聽してより以來は以前の婦人なんぞは、既う私の眼中に在りません。私は既う羽翼を燒きました、蝶々を巳

めました、既う決して遊びません。私の身體には唯大嵐が吹いて居るのです。嵐が吹くと木の葉が落つる如く、私の記憶は皆去りました。百人を棄てゝ唯一人の貴女を獲た譯です。」

息を凝らして耳傾けて居た女は、殆んど我を忘るゝばかりであつた。椅子は寸分だも動かない。――男は顫へながら女の傍に近いてその前に立ち留つた。男の媚びる眼を感じた女は、全身さながら冷水を浴びせられたかのやう、氣味惡さに戰慄したのである。世にも不可思議なる現象はこの一室の間に起つた。男は當代隨一の藝術批評家である。齡は既に四十を越えて猶ほ倦むことを知らず、一枝の筆能く藝術の秘奥を觀破して、幾百の美術家を月旦した、また、しつゝある恐るべき藝術界の大將軍である。その大批評家先生は、今やこの一女流音樂家の一身に平身低頭して、己れの將來を委ねんとしつゝあるのではないか。女の一言に由つては光榮ある彼が過去も半文錢の價値だもなきものとなるのではないか。

女は襟を正した。

「貴郎はどんなに私にお惚れなすつたんでございますの、先生。」

男は床の上に跪座して女の膝を抱いた。

「どんなに惚れた？　左様、狂者のやうに惚れました。往く所として貴女の姿は私の傍を離れることはないのだ、眠つても醒めても、私は唯貴女を追うて狂して居るのだ。私は既う人間ではないので、私の一身は溶けて了つたのだ。貴女の美しいお顔や、氣高いお姿や、そのまた人を魅する艶なる力や……貴女は自分の力の如何に大なるかを知らないのだ……いつそ一思に私を踏み殺して下さい。」

男は女の足下に愈々低く頭を屈したので、女は熱烈なるその呼吸を我が足に感じた。男はぶる〳〵と顫へて居るのである。女は冷然として眼下に男を睥睨んだ。室の中央に懸つて居る大電氣燈は、批評家先生の禿頭を撫

遠慮に照らして居るので。
「私の美が無くなりましたときは……私が老いましたときは……」
男は始めて身を起しつゝ、愕然として女を仰いて、
「貴女の美が無くなる？　そんな事は決してあるものでない。」
と謂つて一層烈しく、
「よしんばまた左樣な事が來るにしろ、その時こそは貴女が年を取れば私も老人になるのだ。どうか私の妻になつて下さい、えゝ……」
女は劇しく男を突き退けて、飛び上つて十歩ばかり身を開いた。
「先生は人非人です。お歸りなさい。」
「貴女……」
「いゝえお歸りなさい。言葉をかはすも身の汚れです。お歸り下さい。」
と鋭く言ひ放つて、
「先生は自分を欺いて被居るんです。他の婦人と同樣に私を慰弄むお考へなのです。慰弄んだ揚句の果てには私を見棄てるお考へなのです。戀しいとか惚れたとか、巧いことばかり被仰つても皆貴郎の出來心です。先生の戀しいと被仰るのは私の身體でございませう、惚れたと被仰るのも私の身體です。身體の美が衰へれば先生は直ちに私を棄てゝ顧みないお方です。先生、私は貴郎がそんなお方とは夢更存じませんでしたよ。私だつて靈魂といふものを持て居りますではございませんか、私だつて情といふものを持て居るてはございませんか、私だつて智慧といふものを持て居るてはございませんか。貴君は學者ではございませんか、眞實に

私を可愛いと思召すのなら何故一言、智慧なり、情なり、靈魂なりを被仰つて下さいません？どうぞお歸りなすつて下さい、先生の戀愛は肉慾以外には何にも無いてはございませんか……お歸りなさいつてば…………」

男は何をか言はんとして女を引き寄せやうと試みたが、女は滿身の力を籠めて衝き放して、屹然と直立して戸を指さしたので、男は遂に悄然として出て往つた。

女は單身となつた。力なく歩を運んで臥床の傍に來て、兩手て顏を掩うて、夜具の上に突つ臥して、しばしは歔欷をして居たが、やがて肺腑を出る獨り言。

「あゝ眞實に私を愛する男は無いのかねえ!!」

（ゲオルギイ當世九人女の第一）

（をはり）

にッこり集

絳　雲

（その一）

薄雲の搖曳いたやうに霞が庭の木々を纏うて、隣りの瓦屋根に霜の白う布かれたのが見える、いつにない早起にも、幸い空は靑々として寒い、昨日の蕾がもう咲いたかと、手水遣つた手を其儘、手拭を提げて楊子を持ち添え、口から湯氣を吐きながら梅の周圍を覗いて歩くに、二ッ三ッ綻び初めたのが先づ嬉しく、お隣のはと思はず垣根に寄り添うて顏を出すと、背のすらりと樣子の美い、十八九の色の白いのが、顏を洗つたのか著しう鬢の毛を濡らして、是も同じく手拭を提げ、梅の下に茫乎として立つて居たが、急に取繕つて一禮して、目元を染めたと見る間もなく、無心に顏が合うて物は云はず嫣然、そのまゝ白い冷たさうな爪先に庭

下駄のさも重さうに、足首をかへして後姿、パタ〳〵と駈けて家へ入つた、とり殘されて恍然としたが、思ひ出してにッこりして、梅を見上げてあゝ咲いたな

(その二)

廣い歌舞伎座も既に立錐の地を見ぬ、舞臺には金屏風を引廻はして正面に攝津の大椽、銀燭の光まばゆげに從掃木を着けたやうな眉をぴり〳〵と動かしながら見臺に凭る兩手を添えて、身を反らして調子高になる、三味線は野澤吉兵衛、斜に坐つて撥の音爽かに、いづれも當代の名人なれば、聽衆も鳴を靜めて耳を澄まし、只管感に入つた躰

大椽その日の語り物は、本朝二十四孝十種香の段、今や其艶麗な聲は一際あてやかな調子になつて、どうも云はれぬ節廻し、軈て「申し勝頼さま」の條に及ぶと、こゝぞ一代の聞きものと聽衆はいひ合はしたやうに居り直し、呑みさした盃は下に置かれ、口に入れた酢は嚙まずに喉を越して了ふ有樣

「お前の姿を繪にかゝし、見れば見る程美しい、こんな殿様と添ひ臥しの」

に人々の胸は躍り立つて

「身は姬御前の果報ぞと」

に至つては息も出來ず、二人づゝ顏を見合つて一齊ににッこりと、何やら會心の笑を交はした

(その三)

若い人は戀といふものをする、その初戀の優しい方から貰つた玉章を懷にして、若者は朝早う會社へ出たのである

ぶらり〳〵と急がぬ道々、そつと懷中を覗いて見てはにつこりする、落しては大變だと時々手を入れて押へて見てはにつこりする、見つともない、往來で獨り笑ひなんぞするもんぢやない、人が笑ふぢやないかと自分で自分を叱り〳〵、思ひ出しては又につこり、笑つちやいけない、止しなといふに又してもにつこり、いやだとぢれて肩を一と搖りすると下腹の方から笑つて來る、堪らなくなつて一町ばかり駈け出して、人通りの少い橫町へ拔けた

え丶矢張りお在んなさるよと胸を擦つた手を直に懐に入れておん玉章を犇と抱へ、あの次は何んだつたけな、初めておん目もじの其時より、さうだ何んだか恨みらしいとを書いたつけが、とにつこりする此時リン／＼とベルを鳴らしてホイと後から聲をかけたまゝ行過ぎたのは會社の給仕で、お早うつて振り返つてにつこりした、え丶吃驚させやがつた、畜生、此懐に何があるか知るめえと次第に遠ざかり行く自轉車を目送つて。さて得意げににこ／＼した

南歐雜詠

土井晩翠

○

ポゾリの夏の岸うちて
銀山崩るゝ怒濤の叫び
叫を後に逍　の
わが影『シビルの洞』近く。
断崖高くそばだちて
大洋の水盡くるきわみ
白楊楊柳憂を吐いて
恨を凝す波にのみ

下には直ちに白日消えて
冥府の流ものすごく
フレガートンの焔の波
まじるアヒロンの焔の水
彼には暗流陰府の底ゆ
さながら遅々たる幽鬼の群
歩むに似たるコチタスの水*
*一つに共によるところ
暗黒の巖さかだちて

永遠のうめきひゞく處
詩聖の夢のたどりしは
此南歐の岸のうへ。

水は曉の露滿ふ
今一面の清湖の岸
岸には葡萄の園しげみ
綠に深き夏の色。

「未來」の暗き洞窟を
通じて炬光を望むごとく
人間の命を占ひし
シビルの靈は遠く去りて
詩聖の夢は三千のむかし、
それよりいくたび桑滄の變
七丘榮華の極みのなごり
かなたクューマエの岸のうへ
玉樓金殿ならびたちし
歡樂の鄕不夜の鄕、
五百の山羊を驅り來り
乳にましろき膚浴みし
妖婦笑の聲はいづこぞ

(右ナポリ灣上アベルノー湖邊ホーマアの「オデッセイ」第十卷によめるところ)

○

誰の思のかげとめて
夕の空に暮れのこる
雲のにほひのくれなゐは
月にも惜しき面かげや。

焰を收め火をつゝむ
嶺は夕ぞ靜なる
霞の袖にかきくれて
のこる烟の一筋や。

夢より淡くたなびきて
迷ふ、さながら人の世の
惱み了りて天がける
魂の姿と見るばかり。

風海草の香を吹いて
星は洩れいづ雲の端
「オリワ」の森のしげみより
ひゞくは牧の鈴のねか。

沿ふは汀の波のおと
音は島々彩どれる
潮の上の高御座
靈のみまたく聞しめす。

智慧なく目なく光なく
幻を逐ひ影を懸ふ
塵の身いかに天地の
此夕ぐれを稱ふべき。

さはれ泡沫ましろなる
しばしの夢も海の影
さらば色なき調べなき
わが歌なほも一節か—
雨を、あらしを、夜あらしを、
碎けし舟にたすけ呼ぶ
聲を、うめきを、整へて
調ぶる靈の高き御歌の。

（右カプリの島にて）

（未完）

歌　尾上柴舟選

○　前田夕暮

うつら〳〵夢路辿りて月かげに花散る園の門をくゞりぬ（其一）

ふと仰ぐ額にさしくる白光やはた散る花や肌吹く風や（其二）

と思ふに我れは裸形の子となりぬ風やはらかう髮撫でゝ行く（其三）

妙樂やこゝろたゞよふ調べもてわれみちびくは櫻の精か(其四)

見ればたゞ白き光の羅の如く地をおほひてたゞよふに似る(其五)

樂は今ふとやみにけり風かをると見れば女神我れに添ひます(其六)

白き裳を長う曳きたる女の神は夢さそふ眸に我手をとりぬ(其七)

手をとられ我れは耻ぢけりこは愛しや裸形をおほふ翅のあらぬ(其八)

何處まで行くか花散る霞のみち女神もだしてたゞゑみませり(其九)

小さき神翅ある子はさゝやきぬ「君をかゞやく戀のみ國へ」(其十)

○　潮陽子

かざらんに雪の清きはふさへるよ歌にけだかき水仙の花

冷えて凝りて氷とならむ冬川の水のさゝやき君きくなかれ

朱雀野や今日もまた出て若菜つみわかなつむ子に春の日くれぬ

うひ／＼しく緑をこぼす若菜籠歌人われの集にふさふ名

湖や帆影も見ゆる山も見ゆる岸の柳は書にふさふもの

欄による春三層の海の樓富士よ箱根よあやのいり日よ

美しき神代とかすむ村の戸に白藤かざし立つは誰が子ぞ

○　石黒夕雨

白虹に太古とあけし聖堂の森のみどりの靜かなるかな

世に怖ぢて三年佗居の痩せやうや森の小花もつまれずなりぬ

若草の露ふむ牧の小羊の跫音かすかに朝もやゆるゝ

夕づゝみ蘆の小笛に靈ありやおごるしらべに露もせまり來

にくからぬ朝の小雨の若王寺京のをとめに絹傘かりし

世を捨てて棹とりそめし藻刈舟をとめと朝の小島をめぐる

白絹にとき髮かろし湯の山の百合の小窓のうたゝね姿

朝風やうがひの兄にまゐらする少女かはゆし撫子の花

○　米野町子

君によらばきみにたよらば君あらばなど世の中に波風あらむ

七とせの戀けふすてゝけふすてゝまこと情の世をば知りにし

くまどりは裾野をめぐる森のいろ鴉わかれてゆるら輪をかく

五歩の差のへだて二千里一万里まこと知るけふ人は老いたり

吹け〳〵吹け吹けよ木がらし土をまきて人世の渦にありと知らせよ

おきいてて夜半にまさぐるちごも無しひとりね安し歌夢にいれ

○　村田敏子

古寺の大鐘高から闇をぬうて夜の魔神の息吹とひゞく

神奇しう黄金の征矢を地に射れば色におごらふ凌宵花

春の野に靈光えたりと友はよべどわれにはあらず其思ひ

天の國の光に凝りし聖樂かしろがね小鈴今たから鳴る（銀鈴を讀み侍りて）

かゝるとき人は情にゑむものかわが身の春のたゞにうれしき

新潮のかゞやくしぶき玉といだきうつくし海をとぶや白鳥

○　山田野梅

風もなきそゞろあるきの枯野路や梅は三分の春おもしろき

霜どけに籾がら布きし垣根みち梅咲く寺にふといでにけり

なにとなく春まだ淺き梅が香に遇はで世をふる友思ひやる

父まさてあなづらはしき生涯よ母はをみなのなみだにもろき

○　久保田桂湖

亡き母のみ言ときゝて森かげの泉のこゑにあはずわがうた

世は我れに我れは此世につれなくてうたにすがるよ聖き神の手

君をほぐこだまのそれは義につよき祖先の靈のみ聲なるらし

悲愁の鐘の音冷えて地に落ちし暗にもやえむわが歌のくに

○　村田愛美

あやまちてサタンのみ手にとらはれぬ神すくひませ人まだ若し

道もせに散り敷く花をえもふまで笛吹く人の影のやさしさ

圓滿（まどか）なる希望のかげのうすれてはあゝわがうたのわれにふさはぬ

君こひし弟妹（はらから）こひし友こひしこの世のおもひたゞに戀しき

○　津野英子

平和（やはらぎ）は敵ととる手に結ばれて旅順のみなとたゞ春のかぜ

ふさふもの皆ひややけき世の冬に神のたまひし水仙のはな

うす紅に霞みてあくる湖のおも夢にえしうたすゑ思ひいてぬ

○　林漁村

うなだれてたどりこし野の露一里ゆふべの鐘に二

人はわかる

春くればそゞろ興ある朝戸出や花咲く野邊に人の名よびし

○　道元翠溪

寂しくは紅筆とりて我名かけかきます君の頰にゑみあらむ

○　塚田花風

御墓守る草もえざる岡の上やああ春かぜの胸いたましむ

經終へてあしたの鐘を高うつ若き御僧に花吹雪する

○　若山牧水

春の日や小鳥の城とそびえたる森の古木の花咲きにけり

山守のむすめ朝寢（あさい）の花の戸にうぐひす來鳴く春の雨かな

日に透くやみどり裳をひく山姫の冠眞珠と朝の雪ふる

山ゆけば野ゆけば沖の島ゆけば天地いまと春の風吹く

しめりおびてうつむく見ればよき人にふまれても見む春の小草か

うぐひすの背寢のすがたやさしみて夢さへねたむ春の灯のかげ

み島戀ひて春の江を漕ぐ朝の櫓にからむよ花の藻の濃むらさき

▲歌募集　三月十五日限り、東京本郷區西片町十番地ほの部尾上柴舟宛の事

社　繞石選

初午や鍛の社に紙の旗　五遷

餌をあさる鳩に日永き社かな　同

椿咲く疱瘡神の社かな　同

弓をひく社の裏や桃の花　同

御幸ある奈良の社の櫻かな　同

櫻散る夜の社や村芝居　白江

落椿末社の屋根のくづれたる　麥舟
東風吹くや社に古き銀杏の樹　石羊
御社の石の鳥居や鳥交る　無名
朧夜や社の御戸に紙結ぶ　樵樵
囀りや社の森の大銀杏　一氏
老梅のあまた垣して社かな　行々子
花ちらほら燈籠多き社かな　同
野社の鳥居古びて蕗の臺　青龍
亀浮いて社の池の長閑なり　同
其中に小さき社や竹の垣　夕村
春闌や社領の藪の細き道　同
汐引いて磯遠くなりし社かな　同
かゞり焚く末社〳〵や花吹雪　同

選者吟

八重霞出雲大社を遠く見る

四月分課題　佛（春季）　三月十八日限
五月分課題　神（夏季）　四月十八日限
應募俳句は東京市本郷區駒込曙町十一番地大谷正信宛の事



評論

女子大學

（々生諸姉の反省を促す）

紅鹿子

一

○敢て女子大學無用論を唱ふるのでない、そこはかとなく女子大學に就いての所感を扱澁けて見るまでの事、果して要領を得るや否やは、書いて了はねば未だ自分でも知らぬのである

○先づ成瀬仁藏氏その人から見やう、成瀬仁藏とは何者であるか、申すまでもない日本女子大學校の校長てその創立者たる榮譽を有する人である、吾人は實に此人の半面を覗き、其成功を見て、少からず敬ひ且つ感服せざるを得ぬ、三十幾万圓といふ巨額の金は誰が

集めた、全國に於ける名門貴顯富豪をして、或は金を出さしめ、或は力を出さしめ、奔走せしめ、名を貸さしめたのは抑も誰ぞ、巍々たる校室、一千餘名の生徒、十万圓の基本金、財團法人の組織、これらは實に成瀨校長の怪腕によつて成り立つた結果であつて、人は何と云はうが、吾人は之を大成功と稱へるに躊躇しない

○然うだ、堅忍不拔の精神といふ一點には稽首禮拜するまでに之を崇めやう、大成功といふ一點には膝を折つて感嘆しやう、併しながら、彼れは果して女子大學の校長として、教育家として、成功すべき人であらうか、其創立者としては遺憾なく成功したが……即ち形だけは拵へたが、其精神を拵へ得る人であらうか、聊かこの答には躊ろぐのである

○何故といふな、彼れは福澤諭吉の如き實踐躬行の人でない、新島襄の如き崇高なる品性のあるのでない、勿論學者でもない、宗教上の信念もない、到底品性の陶冶などの出來得る人格でない事は、世論一般の許すところである

○其證據には、形を拵へたといふ事である、三十幾万圓を集め得たといふ事である、皮肉に云へば、金の前だの名の前だの、權力の前だのに蛙のやうに平蜘蛛のやうに、意氣地なく平伏つたといふ事である、若し人格の高いものなら、決して彼の如き事は演じられないと共に、又決して女子大學も建たないのである、凜烈な氣性のある者には、たとへ目的は手數の善惡を問はぬとしても、如何にしてもこれだけの藝は演れないのである

○更に私行に至つても、感服し得ない處が少くないさうな、吾人は事珍らしげに私行はアバかぬ、けれども世間では種々の風説を、共に獨身で共に女學校の校長であるといふ點から、彼の巖本善治氏と此成瀨仁藏氏との身の上に就いて用捨なく相傳へるのである、獨身生活を非難するのでない、全くその風説が事實であると斷言もしない、よろしい吾人は全然風説を信ぜぬであらう、吾人が直接に面語した成瀨仁藏氏は、謹嚴眞率な人物で、此人にして彼の如き噂があらうとは容易に信じ難いのである、但し火のない處に煙は立たぬと人は一概に云つて了ふ、それも吾人は取合はぬとしやう、而も、苟も女學校の校長たるものが、かゝる風説を立てさして可いものでない、よしんばそれを非事實としたにしろ、私行の正しからぬことは吾人をして

推測せしむるに都合の好い傾を有するてはないか

○然らば彼れは教育者としての資格はない、特に今や漸く亂れんとする女學生を率ゐて、その品性を高めやうなどとは、元々出來ぬ相談といはねばならぬ、成瀬仁藏氏は女子大學の建築者である、今日迄は無くてならぬ人物であつた、而も今後は彼れの出づべき舞臺でない、今後若し女子大學の腐敗することがあらば、それは成瀬校長が腐敗さすのであると云はれても仕様がない、今日を限り宜しく其職を去つて之を他の然るべき教育者に任せ、以つて個人としてその功を完くし、以つて女子教育をして益々完全に發達せしむべきてある、若し今日迄の功を以つての故に其職に居るといひ、已れまた其實を最後まで竭し得ると思惟するならば、己れを知らざる甚しきもので、且つは彼が女子大學を建てたのは女子大學の校長といはれん爲めに建てたのて、畢竟自己のヴニチーを滿足せしめん爲めに此事業を思ひ立つたと云はざるを得ぬ、吾人は決して成瀬仁藏氏と恩怨の關係を有するものでない、只眞直に所見を白狀に及ぶので、願はくば手に胸を當てるか、胸に手を當てるか、靜かに再思熟考を乞ふのてある

二

○さて女子大學々生の事は後にして、女子大學なるものを見やうなれば、成程前にも云つた如く校舍も立派なり、設備も完全して居るし、大學と云つて餘り耻かしくもない(是も成瀬校長の力也)

○けれども何故に大學なんどゝ云へる厚顏しい名を附けたか、それが第一合點し得られぬ、或は帝國大學の向ふを張つて命名したのか知らぬが、其教授するところは決して大學と呼ぶ程饒山らしいものでない、校長の意見なるものが既に大學的てないてはないか、「家政科だとか、國文科だとか、英文科だとか、科は分つて居ますが、他の科目は凡て共通て、その上國文なら國文、家政なら家政といふ主なる學科の爲めに學び得ない科目があれば、之を他の時間に於て教授する、つまり博く學ばせる、偏せないで何でも知らないものはないやうな方針をとります」それならば敢て專門な學科を置く必要はない、よし置いたところが、僅かの時間内に於て千手觀音のやうな眞似が出來るか、男子でさへも難ずるのを、況んや女子に於てをやてある、專門は深きを貴ぶ、淺くして博いのを可しとすれば、大學は茲に一變化を來さねばならぬ、一體校長は萬能主義て、人として、良妻賢母として、國民として、社會

の人として、教師にもなれる、商賣も出來る、百姓も新聞記者も、科學者なり醫者なり、何んでも來いの婦人を養成しやうと考へて居る、而して是れ即ち大學の大學たる所以也と思惟して居る、僅々三年や四年でかゝる重寶なる人物か養成されると思ふのであるまい、云はゞ意見の定まらぬが爲めに、あの說もよし此の說もよしと迷ひ迷うた揚句、かゝる次第に及んだのである、從つて其學問は悉く淺い、卒業した曉に、さて何が出來ると專門的に聞かれたら、依然として何も解らぬ。が吾人は女子の教育として面白い人間を作るには却つて至極賛成である、けれども大學の名は何を以つて命ける？

○吾人に云はすれば、大學とは兎に角今日最高なる學問所といふ意味て、至つて聞えが好い、其名が好ましい、女子の虛榮心を挑發するには實に適當な好ましい名てある、校長が學校を成立せしむるに巧妙な事は此名の一事でも明瞭て、女子大學といへる名の發表せらるゝや、全國の若い女子をして、絕え得ぬまでに心臟の鼓動を激しからしめた、瞬く內に一千名といふ夥しい紅裙連のヴニチーに滿ち充てるか、(力を入れて)雲霞の如くに馳せ集まつた、女子收容所として見れば望外の大當りといはねばならぬ

○要するに女子大學なる名は其實なきのみかは、さらぬだに虛榮心の盛んな女子をして一層甚しからしめ、かの高田の高臺から全都を睥睨して、我れこそ女子大學の學生なれと威張らしめ、女子としての柔順可憐な美德を沒却せしむるのである

三

○次に吾人の大に感じたのは、此學校は全然貴族學校で、平民をも華族らしく、田吾作の娘をも令孃らしく華美に驕奢に生長せしめやうとする事である、故に生徒をしてなさしめることが凡て財に不足のない者のなすべき事て、其日の生活に追はれるやうな境遇に居たら、此學校の卒業生は生きては居れぬ

○近い例が、其日常三度の食事に於ける料理の教授を見よだ、鯛だの鯉だの、刺身だとか、燒物だとか、朝夕に佳肴珍物を交へて居る、たしかに中產以上、乃至富豪の食膳としか見えぬ(二月の家庭週報に出てたる獻立)

○特に此學校の機關たる家庭週報を見れば、如何に其貴族崇拜熱の高いかゞ知れる、到る處目に餘るのは何々男爵、何々侯爵、正何位、何大臣、森村三井岩崎さては何々の文字、いくら貴族富豪に頭を下げて出來

た學校とはいひながら、それの奴隷のやうな氣分にならずともと吾人頸の骨の頑いものは憤慨に堪ねてはないか、此心を以つて品性の陶冶、まことに恐ろしい陶冶てある、彼等は貴族富豪を語るを以つて、而してそれの眞似をするを以つて、一種の榮譽と心得て居る。即ち是れヴニチーの好例證てある、然り校長がヴニチーを以つて學校を建て、學校がヴニチーの校是をとり、生徒がヴニチーに驅られて入校する、三拍子揃つて女子大學は盛んてある

四

○女子大學を卒業すれば、とん／＼拍子に落第なしと見込んてからが、齢すでに二十の上を二ツ三ツ、多くは二十四、五六、それに研究科(研究科が可笑しい)へ三年も居れば三十に垂んとする、男子てさへも修業年限短縮論があつて、數年以來短縮し來つて居る、それに何ぞや二十を過ぎて(女ともあらうものが)尚ほ學校にまごつくとは、思ひ切つた覺悟てはないか

○日本の女子は早婚で可けない、外國を見ろ／＼とは狂的ハイカラの叫ぶ事て、人生を知らざる愚論てある、西洋ても十九歳前後を以つて女子の結婚期の最適當と認めて居る、習慣上晩婚てある國の事は論にならぬ、日本は日本の習慣に從ふ、それに女子十八九歳になれば、生理上身體は熟して來る、從つて物の色を好んて來る、自然の理法にして挽めるを得ぬ、若し之を制抑しやうとすれば、其結果はヒステリーてある、二十を過ぎて獨身て置くのは、其人をして邪路に踏み込ましむる第一歩て、現今女學生の風儀を云々するのは、此成熟後學生として生活せしむるのが重な原因て、晩婚が早婚よりも一層甚しい害のある事は、爭はれぬ事實てある

○十日の菊は既に晩い、女は人生の花である、唯美の一事を以つて男子の愛寵を蒙る榮を有する、如何に物好きなハイカラても、十八の美人と三十の年増とを並べて何れをとると云はゞ、首を傾くるに及ばす、直に十八に手を出すてあらう、人情實にかくの如し、女子大學の學生が、此美しい娘盛りを仇に暮して、徒らに十日の菊となるを甘んずるのは、吾人は其人々の最後を思うて坐ろに暗涙を呑むを禁じ能はぬ

○鬼も十八蛇も二十、女學生の過半は醜いと云つて差支ないが、それも十八十九で結婚しやうとすれば、人はその若い初々しいのを賞で丶、結局昔の小皺の寄つた花よりも貰つてくれるに近い、醜うして年をとる

何人が己の妻にと望まうぞ、「私は獨身主義ですわ、ハスバンドなんて要らないことよ」とは、口でこそ云へ其胸を斷ち割つて見れば、只ワッとばかり泣き伏すのである、その煩悩、その懊悶、醜婦、年增の獨身者を思へば決して吾人心地よくない

○繰り返して云ふやうだが、實際女子大學にある一千餘名の女子は、大學なる名に憧れて集つたのである、此ヷニチーが身を過まる第一の階級である、女子大學生の名を便りに男子の注目を惹かう、忌憚なく云へば惚れて貰はうとの野心がある、その野心が抑もの誤解である、女は偉人英雄を崇拜して、「まア豪いのねえ」「學者ですつて！」「財産家よ」「今に大臣になるつてことよ」「あんな醜もない顏してゝも腕があるのね」「えゝ……わたくし、ハスバンドには……あれッ」遂に戀に落ちて了ふのであるが、男はさうは行かぬ、「成程えらい女だ、學問もあるし、財産もあるし、何んでも出來る」「でもアノ面相ぢやー」「あの年ぢやー」で話にならぬ、それを女は自分の心を以つて男を測り、豪く見せかけて、即ち威しかけて男を靡けやうと苦心する悉く原理に背悖した事を爲しつゝあるのだ

○又女子大學生の中には男子の前も憚らず、大議論大熱を吹くのが多く見受られる、その當人に取つては實に滿足の至りで、之が爲めに男子をして崇拜の極、遂に己を愛するに至らしむるものと信じて居る、彼等は既に恥羞の念を沒了した、云はゞ女性でなくて男性である、男性に男性が惚れて之れを妻にしやうとは、三歳の兒童も尙ほ且つ之れを知つてるてはないか

○強いて醜い例を用ゐぬでも可い、花顏いつしかうつろひぬれば、昔の我を忍び、元の十八にして返せとて、成瀨校長に縋り付いて歎き悲めども更に其甲斐あるべからず、かくてあるべきにあらねばとて小百姓小商人の妻には、これだけの學問があつて、と直に驕慢の心が起る、せめて學士位の處ならと半分は相談が出來上つても相手の半分が承知しない、仕方がないから氣の利いたのは獨身生活と洒落れる、氣の利かないのは墮落する、否その獨身が甚だ怪しい主義に傾くのである

○即ちヷニチー（此字がいやに目に付くが）に驅られて浮々と學校に入つて、その目的が外づれて戀を得ず、悶え〳〵てその苦しみを押包む心のうちは、何んなに辛い思ひであらう、人間と生れ、否、生あるものと生れて、一生の配偶を得ずして終るほど不幸なものはな

いのである、吾人は實に女子大學の爲めにその將來をトして甚だ氣の毒の感に堪へぬのである

○女子大學に就いては書きたいことが尙だ多い、實は吾人は女子大學の一ツや二ツは日本にあつても可いと思ふので、從つて日本女子大學校の存在も喜ぶ方の論者である、而も以上列擧した如く、學校の方針から生徒の目的が甚だ怪しい方に傾くので、書き出して見ると案外女子大學無用論になつた、米國の如きは近來獨身の婦人がます〳〵增加して行くが、それは決して好ましい現象でない、敢て女子大學の學生に限らず、凡ての女子生が次第に米風を崇拜して、之に倣ひつゝあるやうなのは、頗る寒心すべき事であると思ふ

家庭の娯樂機關

樗陰生

人生は或意味に於て一種の戰鬪なり。世は概ね冷酷にして我志と背き人は多く無情にして我望と違ふ。此間にありて、我が生存を繼け、わが理想を行はんとす。其苦悶懊惱決して少々ならざるなり。是に於て其疲れたる體を胖かにし、其頹ひたる心を癒うするの法を講ぜざるべからず是れ吾人が玆に家庭の娯樂機關を論ぜんとする所以なり。

家庭は人生の避難所たらざるべからず。吾人敢てたらざるべからずといふ。何となれば我國今日の家庭は、未だ其理想的の城を去ること極めて遠く、動もすれば却て一種の法庭又は牢獄に類するが如きもの決して珍らしからざればなり。一日の社會的生活を終りて玆に家庭の人となる恰かも劍戟亂れ砲彈飛ぶ戰場を退きて、壁壘固く爐火暖かなる陣營に歸りたるが如く、大濤崩れ巨濤逆卷く航海を遂げて、魚介皆眠り、細波汀に呼く港灣に入りたるの感あらしむべし。然るに見よ。門前まで笑顏なりし男が、家の閾を跨ぐと共に忽に澁面となり、他人と向ひて眉を開きし人が、家人に對すれば俄かに目を逆立つるが如き、世間其例に乏しからざることを。更らに見よ。其親を頑固なりとし、其家を面白からずといひて內を外に遊びあるくもの、如き世上往々耳にするの事實なることを。此の如きは全く家庭其物の不快より產出せる惡顯象にして、家庭其物の不快なる一大原因は、適當なる娯樂機關の缺如たるに外ならざるなり。

娯樂は人生の慰藉者なり。之あるが爲めに人はよく繁劇なる世務に堪へ、煩雜なる職業に忍び、以て氣力を恢復し、精神を皷舞することを得るなり。是れ種々なる娯樂機關の設立せられ、又益々發達隆盛ならんことを企圖せらるゝ所以なり。

然れども他の一面より之を觀る。世の進歩するにつれて人は愈々繁忙となり、生活の困難益々甚しきを加ふ。かるが故に娯樂の爲に屢々長き時を費し、度々高き價を拂ふが如きは容易になし能はざるに至る傾向なきにしもあらず。依て最も簡易にして最も經濟的なる娯樂機關の須要缺くべからざるを見るなり。

終日何の用事もなく、茶の湯、生花を以ても尙其閑を消するに困むが如き彼の上流社會の人は、吾人の今論ずる所にあらず。彼のトーマス、フードが歌へる『縫衣縫』の如く、脊草を踏んで白日を仰ぐさへ糊口に累を及ぼすといふ日夜寸暇もなき下流社會も亦吾人の今ま論ずる所にあらず。只吾人は普通一定の職業あり、普通一定の閑暇ある中流社會の家庭に向て適當なる娯樂機關の設備を促がし、其閑暇を利用し、其職業を裨益し、以て人生の幸福を增進せんことを希望するものにして是れやがて吾人立論の本旨とする所なり。

今中流社會の家庭に於ける娯樂を分ちて大躰二部となし(一)を躰育的娯樂と名け、(二)を美術的娯樂と稱す。

(一)の方面に於ける機關は、我國の最も缺如たる所にして到底之を泰西の新發明に仰がざるべからざるなり。從來行はれたる手毬、追羽子、及び揚弓等の如き、此方面に於ける一種の機關と看做すべしと雖も、其範圍極めて狹少にして、未だ老弱男女相集りて共樂を全じうすること能はず、近來漸く流行し初めたるピンポンの如き最も適當なるものといふべき也。

(二)の方面に於ける機關は又別れて(イ)音樂、(ロ)讀書の二つとなる音樂は今日ピアノ又はヴアイオリン等を用ふるものあれども寧ろ在來の琴、特に三味線を以て理解し易くして趣味饒かなるものとせん。然れども琴、三味線の如き習ふに難くして熟するに遲しとならば、最も簡易なるオルガン、手風琴、吹風琴のめき又妨げざるなり。讀書も娯樂を目的とするものなるを以て必ずしも修身道德を旨とせず、家庭の風紀を紊り、子弟の品位を損せざる限り、趣味ある小說物語類をとりて之を讀ましむべし、若し父母兄弟一燈を圍みて一書を讀むか如き最も其可なるを見る

夫れ家庭は人生の避難所たるべくして、娯樂は人生の慰藉者なり。此家庭に於て此娯樂機關あり例へば極樂に於て佛如來と逢へるが如し。人生の至樂之に優るものあらざるなり。家庭に此至樂あり、終日社會的戰鬪に從事して胸中綽々の餘裕あり、體胖かにして心廣く、身健かにして壽永きことを得べきなり。

吾人素と娯樂機關に就て專問的智識に乏し。依て其述ぶる所恐らく疎雜の譏を免れざるべしと信ず。江湖博識の士、吾人の意のある所を諒とし、埀敎の勞をとられなば幸之に過ぎざる也。

何等の醜態ぞ

二月廿二日の萬朝報机の塵に曰く、「陸軍豫備病院の澁谷分院は赤十字社病院で將校ばかり置てある、處が玆の看護婦の一人腹が膨れ出したので、醫員が驚いて人の妻かと問へば獨身だ、彌よ以て捨置けぬといふので名を體格檢査に托して健康診斷を行ふた處、總計十二人の姙婦(悉く未婚の處女だ)を發見したさうだ」、事實か、非か、吾人未だ容易に信じ難きも、世に神聖視されつゝある赤十字社の看護婦にして此醜聞ありとは、他は類推すべきのみ、豈に苦々しき限にあらずや

野蠻的根性

敢て他人の御厄介にならずとも、自ら進んで爲すべき筈の彼の清潔施行が、尙警察及區吏に强ひられて始めて之を行ふが如き、是れも可なり、而も警官區吏を僞欺して清潔法を行はざるものあるに至つては、實に野蠻的根性の極なり、而して此根性が中流以上の者に多くありとは、更に驚くべき事にあらずや

電車の通行税と貧民

も彼の通行税が往復切符及び回數切符の設けによりて單に一時に多額を出金し能はざる貧民の上にのみ重きを思うて、通行税なるもの、精神に違背せるを歎くもの也、中流以上の資産あるものに取つては、一回四錢の出金は何等の苦痛にあらず、されど貧民に取つては然らざる也、電車に上中下の階級なき間は到底富者に重く、貧者に輕き制は設けらるべしとも思はず、然らば即ち貧富平等の制になすべきのみ、吾人は常に電車中に於て立派なる紳士が往復切符を買ひ、回數乗車券を差出すを見て、寧ろ其厚顔しきを覺ふるもの也

苦々しき德敎の墮落

哲學館主井上圓了氏が北卒業生四名を相手取りて私書僞造の訴訟をなし、檢事の說諭を以て事落着に及びたりとの事實に對し、哲學館幹事の取消文出て、又此取消文に對する同志會の辯明ありて、今に至るも兩者の曲直を判ずる能はざらしむ。其曲直は孰れにもせよかくの如き事實の起りたるは實に苦々しき德敎の墮落といはざるべからず。然れども記せよ、此事件は單に現敎育界の一端を表示せる一徵光に過ぎざることを。彼の徒らに敎育の改革を叫び、課目の變更を喜ぶものの如き、此根本的事實を奈何とか見る。

文藝時觀

二月の文壇

孤村主人

貳月と云ふ月は世俗にも二八月と稱へて、商品の捌けない不景氣な月としてある、まして國に戰爭のある今、平生に一層輪懸けた景況であつたらう、文界も然うであつた。見る可き創作は殆ど無いと云つて可い位ゐ、其の代りに飜譯には立派な物が顯はれて久々で飜譯小說讀書家の咽喉を鳴らさせた。其れは云ふ迄も無く太陽に掲載された二葉亭四迷氏の猶太人の浮世と題するゴルギーの作品だ。原作者が歐洲での大家で始めから解り切つた事であるが、然し之丈け原作者の手腕を明白に顯はすには、矢張二葉亭氏を待たずば見られない。ゴルギイを譯したのは千葉紫艸君、其れから馬場孤蝶君など、ちよい〱譯されるが、其れと比較して奈何であらう、自分は深く譯者に謝す。我國の小說飜譯の大家は氏と森鷗外氏で、東西の大關と云ふ資格がある。些と筆の末で云つて置くが新小說に苅心との號て出すのは之も四迷氏苅心とはカルシンと讀むので、露西亞のカルシンと云ふ人の作品を譯す時に憑ふ書くと云ふ事だ。然し苅心とは心を苅る――心の長く延びない、結局心ののんびりとせず氣短に書いて、好譯が出來ない時にも憑ふ署名すると云ふ事だ。

◎新小說の卷頭は、之も久々顏を出した嵯峨の屋おむろ氏の飜譯だ。二葉亭氏と比較して奈何恁う云ふのは、吾人は此の作家の事を聞知つて居る故、此處に云ふのを好まない。併し惡く云ふのぢやない。氏が近頃世

に公にせられた讀評の中では一番見勝つて居る。

◎文藝倶部には三篇小說が掲載されて居る、小栗風葉氏新夫婦、山田美妙齋氏の勢至丸、泉斜汀君のヒヤニストだ。先づ小栗君の作品から評してかゝらう。或人は此の作を讀んだ後、面白くはあつたが駄作だらうなと云つた。僕は半分此の言に贊成する。と云ふのは、面白いと云ふ言葉と駄作と云ふ事と並行せぬからだ。勿論面白いと云ふ言葉は極めてくだけた、世俗の所謂面白いと云ふ言葉で、駄作と云ふのは文學の見地から發した言葉だ。て、僕の半分贊成するとは面白くもないが然ぅ云つた程の駄作でも無いと云ふ事だ。一體小栗君の作家としての長所は作の組立の上にある。其れは此の篇にも能く顯はれて居る。柳浪君や天外君が作の組立の上に非常に變化を求め、海岸を出せば直ぐ次には山の場を見せて居るが、其れでも小栗君に比すると多少自然に近い。小栗君は組立の上に巧を弄する事は遙に二氏以上だ。世間の眼の肥えた讀者や、評家は此處を捕へてやれ詩想が無いの、何のと攻擊するが、僕をして云はしむれば小栗君が前途に發展する餘地は此處に存して居ると思ふ。隨つて恐ろしい處だと思ふ。其の理由は知る人ぞ知るで、餘り多くを云ふまい。時代は證明するだらう、兎に角今後長く作生命を保つ事が出來やう。いや批評が飛んだ方へ外れたが、此の作の主人公保科眉樹と云ふ人格は、此の前に氏が明星へ出した作品の主人公と同一同傾向だ。自己の野心の前には一切のもの總て抛ち、一切のもの總て捧げ、後で悔ゆる事となる、讀んで行く中ゾラの大藏大臣に似て居る樣に感ぜられた。卷中の重なる役者の露子の樣な性格の女が果して日本にあるであらうか、然して役者を買つたとばかりて、他に戀があるのやら無いのやら、戀が無いのにも關はらず男を嫌ふのか其れにしては、其の始め新聞の雜報を借りて讀者に母親に役者を取持つて貰ふたと承知さすのは奈何云ふ了見か、母親の小夜子はあれでもいゝとして、西森健之助と云ふ人格は一體奈何した事だ、愬ふ吟味して來ると駄作とも叫びたくなつて來るが、豈し顏を出した文子の可憐な性情で打消されて了ふ。若し主人公の煩悶を今少し突込んで書いたら少し評判されたかも知れない。

◎美妙齋氏の作物に接するのも久々だ。勢至丸と云ふ親鸞上人の前半生を描いたもの、今の若い作者には何としても描けない描寫や文字があつて流石に老練なと首肯せしむる。個所が處々ある。終の方へ往つては然うでも無かつたが、上半の地の文が、同じ事を幾度も繰回す――句に句を重ねる書方、例の一二を引くと。

動いて居た、動きながら還つて居た。

とにかく不穩の態度である。其の樣子が不穩な態度を執つて。

突如决した……突如决した。實行した。

然うかと思ふと又不思議な。

如何にも可しとみづから已に令下した。◎手は心得る迄も無くすぐ伸びた。

手はふるへた、何てふるへた……

何をしても妙だ。何て妙だとも解らない程妙な文書の書振りて閉口した。氏自身では頗る得意かも知れないが、讀者には頗る妙で無い。改良して頂きたい。

◎斜汀君のヒヤニストを讀んだが何とも評し樣が無いと云いたい位だ。一體此の人は小說を何と心得て居るのだ。變な江戶ッ子を振廻して見たり。かと思ふと今時天保錢と同樣通用しない甚に又――なんてな言葉を入れて見たり、之れでは世間から罵られるのも尤もだと思ふ。其れから阿兄の樣に天才があるなら、そりや感情にのみ偏してもいゝが、天才が無いものがいくら兄弟だと云づて同じ往方を何になる。早く眼を覺まし

て眞直ぐな道を踏み給へ。れえ、廣く社會を見、深く人を觀察しな、然うしなけりや君の上に滅亡が來るよ。盛春時代の感情が然ういつ迄も續くものか。

◎新聞小說をずつと見渡すと、每日には橋本靑雨。二六に江見水蔭。三、宅靑軒。日々に淚六。中央に柳浪、萬朝報に德田秋聲。讀賣に楓村居士日本に牛白道人、朝日に仰天子、此の中に傑作があるとは思はれぬ。比較的眞面目に書い居るのが萬朝の秋聲君の作だらう。小華族と題するので。何かしら新らしい處を見附け出さうとして居る傾向が著しく眼に付く。一躰にくすんだ書方をするのが此の作者の風だが、今度は心附いたと見えて、可なり華やかに書いて、性格を顯はすのも、いつもの様にくどく無く、淡泊に書いて退けて居る蓋し進步と云つて可からう。孰れ纏つて發行されやうから其の時改めて評しやう。

◎今度明治座で曾て嚴谷小波氏が文藝俱樂部に奕民傳と題して掲載したシルレルのテルをシルレルの百年祭と云ふ名義の下に、例の蓮升が演ずると云ふ。噂に聽くと、彼ればかりで無く序幕を一場加えたと云ふ事だ、蓮升が果して此のシルレルの傑作、獨逸の忠臣藏を果して演じ了すてあらうか危險いものだ。此の間の松井松葉君のエルナニにしても然うで、世間は蓮升の演じたのを見て一概に松井君の譯も拙ないにして了つたが、之は餘程注意して評されば誤りがあるであらうと思ふ、あゝ其れにつけても眞に文藝を解した高尙な役者が欲しいものだ。

◎明星は三月は臨時に厚くして出すさうだ、二月に掲載された、作品の勝れたのは、卷頭の泣菫君の霜月の一夕。洛東岡崎神社の前にたゝずみての註があつて、

比叡山、照のあかりは　　み空の背にかへりぬ。

と、起句先づ艷麗、詩全躰に渺漂とした處があつて泣菫君には珍らしい唱ひ方だ。面白く誦ずる事が出來た。其の次は平野萬里君のだらう、蔵幹君のは同氏の傑作とは思はれない。

◎白百合には前田林外君の白鵠に、同氏の佳作であらう。上田敏氏の花くらべ、花の敎。花くらべの終句の

あゝ花はなし、しよんがいな。

など輕妙と思はれた。吉田白甲氏のベエトオベン詣で面白く讀む。

お笑ひぐさ

道聽子

▲自稱ハイカラの松居松葉といふが、曾て江見水蔭などと盛んに吉原あたりへ浮れ込んだ事がある、松葉その夜の出で立ちは、聞くも恐ろしい五ツ紋所の黑羽織に五ツ紋の黑衣裳、上下いづれも紅絹の裏、而も先生大の得意で、水蔭お馴染の某樓へとん／＼と上つた、(水蔭の事はヌキにして) 松葉先生は此樓へは御初會だけに至極眞面目に氣取り澄まして、例の紅い裏などこれ見よがしにホラ／＼とやる。先づ役者とでも鑑定して貰ひたかつたので相方をつかまへて「おい己は何んと見えるね」と聞いた、すると水蔭先生の相方が引き取つて「さうですね」といふから其次は役者と來るかと待ち受けると、豈圖らんや「まあさうねえ落語家さまですか、成程さうでしやう」と水蔭先生に聞いた、松葉先生此時の顔の色つたらなかつた、頭を抱へて「酒が惡いから頭へ上つていかん、君寢やうぢやないか」。それから寢床へ入つてから先生頻りにその恥辱を雪がうと思つて相方に取り付いて「全く己は落語家以上に見えんかなア」

▲▲▲▲

と五月蠅くいふ、相方ら困つて「よく見りや役者とても見えますよ」と慰めてくれたので、やう／＼先生も安心したといふ、これは古い話ぢやが、今日でも先生は不相變奇妙な男で、無理にハイカラがりたがる風がある、近來露語を習ひ出したから何うするんだと聞くと、英獨佛は人が知つてるからハイカれん、露語でなくちや巾が利かんからといふ、勉強するのも全くハイカラ風を吹かす爲めと聞いては世は誠に様々なものだ。

▲ハイカラ風をしたがると云へば田口掬汀といふ男もさうだ、此人去年の九月に外國語學校の佛語專修科へ入つた、熱心は熱心だが未だリーダーの一も讀めぬ、而も先生あるフランスの小說を飜譯して大に佛語の得意なるを示した、いづくんぞ知らんて、それは皆な〇〇氏に譯して貰つて自分は只筆を取つたといふに過ぎぬのである、これも多分ハイカラがる爲めに佛蘭西語をやつてるのだらうと全級生の噂に上つた。

▲與謝野鐵幹は聞えた新躰詩人て、且つ聞えた艶聞家である、此人も亦外國語學校で掬汀等と全じ級に同時に入つた、處が同級生がそれを鐵幹と知つてから頻りに傍で惡口をいつて冷かす「鐵幹といふ詩人があるだらう、あれは君もう妻君が十遍目だぜ、詩人といふものはナント有り難いもんではないか」「尤も壁と女房は新らしいのが善いとよ」「お古にされる奴こそさん／＼さ」「何にあれは色男がるのさ、あれの顔は見た事があるが、女の惚れる顔ぢやない、新躰詩が稍々旨いから思ひ付くのかも知らんが」これには鐵幹先生も避易して一ヶ月ばかりで遂に教場に姿が見えなくなつた。

▲三宅青軒といふ男は中々面白い男て、自惚れの强いことは又實に呆れ返へるの外がない位、その文藝俱樂部を編輯して居た頃、思へらく、文藝俱樂部の賣れるのは全く己の爲めだ、文藝俱樂部が賣れるに非ずして青軒の名て人が買ふのだ、われ若し一雜誌を發行せば其勢力亦おさ／＼文藝俱樂部に劣らざらん、と、そこて去つて文藝とか云つた雜誌を出した、初號の賣れなかつたのは人が知らなかつた譯だ、次は何う、次は慥うと、人が知らなかつたのか何うか、兎に角やり切れないて手を燒いて了つた、仕方がない、もう飯が食へぬ、やう／＼二六の四面へ講談ものを一回二圓て請負つて書いて居る、收入は只つた是れッ切りだ、今は土手の道哲とかいふのを書いてるが素人受のする面白いものだ、が先生相變らず「二六の賣れるのは全くあれだけですよ」と胸のうちで云つて居るさうな。

▲泉鏡花は色男である、彼れの小說を讀んてゾッ魂惚れ込んだのが二六に居た竹内まさといふ女記者、此女一躰が惚れ性て、二六の編輯局ても只その色目を遣つて八方の御機嫌をとつて居た位、曾て伊藤銀月に艶書をつけてハネ付けられたといふ程の厚顔しいのである、鏡花に思ひ込んてから夜も日も鏡花さん／＼て一時二六の編輯局て惚氣を聞かすを以つて、餘の記者を避易さした、中にも鬼太郎とかいふ先生が、多少思し召される處があつたのであるが、鏡花熱に浮かされてるのを見て、男らしく思ひ切り、私が鏡花をお世話しませうと戯談半分にからかつた、處がまさ子女史渡しに舟と恐悦がり、是非／＼とて其後は五月蠅くつき纒ひ、半分全く色狂ひの躰たらくに、鬼先生もほと／＼持て餘し、遂に之を水蔭に振つた、何分その件につきましては水蔭がお取持を仕らうとの事、鏡花へも既に水蔭から略通じてあるから、直接水蔭にお逢ひなす

つて、お依賴の事になさりませと誤魔化した、鏡花もその噂を聞いたてあらうが、これは又牛込に好いつ好かれの藝者があて、中々おまさづれには目もくれぬ、それはおまさづれは一向御存じないから、早速水蔭の處へ出懸けたのだ、水蔭先生その時の女の有樣を形容して曰く、ふいと見ると、どうも鏡花の小說に現はれさうな、お白粉をこツてりと塗つて、衣裳も悉く鏡花的、なまめかしい顏の、生え際の恐ろしく濃い、見るからに淫氣紛々たる、流石の水蔭も鼻を外向けて眉に皺を寄せたといふ、こゝても水蔭に旨く誤魔化されて、とう／＼此戀は不成立に終つたのであるが、浮氣なものは冷めるのも早く、早速他の男に關係して、淫風中々盛んてあつた、二六ても置かなくなつて、姿はいつしか田舍の方へ出かせぎか何かしらず、依然として色目の御馳走を誰かれなしに引つかけて居るさうな、此頃或人の話によれば伊藤銀月と結婚するといふ事だが、それは誠に的にならぬ噂らしい

▲▲▲▲▲
文士初對面錄（その七）

天中天

▲内田魯庵氏（ノ二）　『批評てすか、私の批評は批評になつて居ません、併し云ひたいとは澤山ありますれ、けれども批評は實に損な話て、自分の思ふ存分にやらうとすれば、――故緣丽ても私てもてすが――怡まれるし、それかといつて友人と他人とを區別して論じた日には素より批評にはならんが、一向讀者も面白くないと共に己れも亦快くない、それて私も近頃は少し控へて居るんてす、正直に君の前だから云ふんてすが、〇〇や△△に就いても、私は之を愛讀して昨今まて机の上に並べて置いた位てあるが、實は少し論じて見たいこともあるのてすよ』聞いて居ると實に氏の話は厭く事を知らぬ面白味がある、薄暗い時分からランプの點せられて二三時間、餘り尻が長いので惜しくも自分は辭したのてあつた



當世美術家氣質

八面生

河村清雄

卑俗の美術家の中で、この人などは最も飄逸にして最も貪慾に遠く、何となく美術家らしい風骨を備へてゐる。近年名聲衰へ、技倆も振はぬけれど、奇才は依然として存じてゐれば、其れを發揮せずして終るのは惜しい氣がする。先生の懶怠放縦なる、常々注文者を怒らせて、不信用を來たしたが、其の書きたくなければ書かぬといふ態度は天才的の所。潤筆料はどん／＼前借りしては酒を飲み、催促に來ても居留守を使つて會はぬ。一體人に遇ふことが嫌ひてあるが、氣か向くと人の手を取つて快談する。一たび興來れば、其の談話に熱情の燃えて、聽者をして恍惚たらしむるは、今日の書家中雅邦翁と河村先生と位て、凡々たる書家とは等

を異にしてゐる。先生年歯既に五十を越ゆれども容貌甚だ若々しく、四十前後に見える。妻君はなけれども常に美人を愛し玉ひ、此迄も艶福が多かつたさうな。

黒田清輝

河村先生の衰運に赴くに反し、洋畫界で殆んど最上權を有するはこの人。華族ではあり、金はあり、白馬會の首領であれば、これに媚を呈する者甚だ多く、一たび忌諱に觸れなば立身の出來ぬ程の有樣。河村先生のやうに洒脱でも磊落でもなけれど、其の代り勉强家にて、外の者なら金に餘裕があると、惰けて何もせぬのだが、この人は常に彩筆を放たず、研究心のあるのは感心、自から日本一の洋畫家と目されてゐるが、佛國の某美術大家嘗て本野公使に語つて曰はく「日本の畫家の中でも黒田だけは勉强したら、少しは畫けるやうになるだらう」と、洋畫の幼稚なることを以て知るべし されど黒田先生は非常の抱負あり「日本でも二十年も立たば、西洋にも劣らぬやうになる」といつてゐる。一部の人は先生を腹黒い人のやうにいへど、それは酷評で、只時々華族樣一流の我儘から後進に同情のない仕打をするから誤解されたのであらう。

荒木寛畝

地球は平たい者と思つてゐる程の舊式の頭腦で、孔雀よりの外は、碌な者は畫けぬ位の無能な畫家で、この人を美術學校の敎師にするのは、譯の分らぬ話で。しかし非常の自負心ありて、陳腐の畫論を滔々と述べて面會者を迷惑させること甚だしい。根性の卑しさは、流石の畫家の中でも珍らしい。其の子十畝亦親爺に劣らぬ氣焔家。今年は雅邦玉章兩老人に負けてゐては、力味出して、五號館で展覽會を開く計畫を立てたが、門下生に一人として腕のある者がなければ、とても二葉會や天眞社と幷びて立つ氣遣ひはあるまい。先づ松本楓湖の展覽會といゝ相撲であらうとの噂。

久保田米僊

一種特得の畫風で、一時評判であつたが、今は盲目となつて才を振ふを得ざるに至つたのは殘念である。この人畫家の中でも第一の通人にて、演劇に通じ、音曲に通じ、故實に通ず。隨分狹斜の巷に出入し、艶福も多く、あまりの多藝に大抵の老妓も舌を捲いて恐れ入るさうだ。子息米齋金僊父に似て通人たること、何十畝が寛畝に似て小理屈家たると同じく、殊に金僊氏に至りては、容貌秀麗玉を延べたる如く、幾多の婦女子を魅したること、畫家中第一人といふべし。しかし丹

青の技術は少しも進まず、とても父に及ぶべき望みはなさゝうである。

從軍餘話　○○生

▲所謂「某佛國記者」

諸君は多分御存知であらう、鴨綠江の戰に參加した負傷將校の談話の中に「佛國の某記者の如きは迚ても日本軍は鴨綠江を渡れまい、渡るとしても多數の犧牲を拂はねばならぬ云々然るに我軍は僅か一夜にして彼地に達し九連城を陷れ云々」と凡ての歸還將校か門司や佐世保に居る新聞記者に語つた實戰話の中には必らず「佛國の某記者の如きは云々」と云ふ數語を判で押した樣に語つて居る、そして通信員は殊更に其數行を二號活字にしてクヲーテーションを付けて之れ見よがしに書き立てたことを、之に就て一條の物語がある。

近頃戰地から歸へられて某先生が頻りに筆は劒よりも大なり抔と大布呂敷を擴けて御座るか、或はさうかも知れないと云ふのは僕が從軍中府下の某新聞に通信をして居た、其通信の原稿を檢閲を經る爲めに軍司令部の某參謀將校に見せた、すると其中に「佛國ゴロア新聞のトーマ氏は、日本軍の鴨綠江渡河は不可能であると主張し、英國セントラル、ニユースのカートン氏は何アに譯なく渡ると言ひ張つたが、互に渡る渡れぬと議論の末が五百圓の賭となつた云々」と云ふ記事かある檢閲將校は二三度讀直して僕に向つて「之りや君眞實か」「實際です然も僕は其隣室で友人と二人で聞いて憤慨しましたよ」、其時檢閲官は不快な顏をして「矢張り佛國かなア」と言つたきり、僕の前では何事も言はなかつたか、扨て翌日回報（之れは參謀官から各隊の將校への報告等で、毎日二度位はやる）の時に此記事に尾を附けて話したから溜まらない、血氣な少壯士官の如きは血は激し肉は躍ると云ふ風で慨然として歸隊の後、一層大袈裟に部下に話したから、「ウヌ失敬千萬な赤髯め、渡るか渡れぬか、今に見ろ」と全軍の士氣大に振ふた、何も之か動機となつて、たつた一夜の中に渡河したと云ふ大勇氣か出た譯でも無論なからうが、兎に角僕の不器用な筆尖か聊かたりといふ我軍に貢献する所あつたのは（それも妙な所で）實に嬉しかつた、

▲日本の軍人が虛を言つた、

甜水店滯陣中の事であつた某師團司令部へ受取る物

があつて吾等兩三名が出掛けた、所が夫は已に軍司令部の方へ廻してあるとの事に三四里の途を馬で飛ばしてさて聞いて見るとイヤ左樣な物は廻つてこない、確かに廻したとの話で御座りましたと幾度繰返して見ても一向に埒が明かない、來ないものは來ないのだといはれた時に英國の某通信員は憤然として扨ては前の廻したと云つた將校が虛を言つたのか、苟も軍人が虛を言ふ、若し我英國軍人であつたならば……抔と力む程の事でもない樣に僕等は思つたが、英國の記者は殊に斯ふ云ふ風であつた。

▲馬を盜んで來い

某國の通信員態々東京から買つていつた馬が義州に滯在中足部と背部に擦り傷を拵らへて乘り物にならない、酷く萎氣て居たが、從僕を招いて窃かに命じて曰く「馬を一匹買いたいが、迚ても買う事は出來ぬ、さうかと言つて馬なしでは此先滿洲へ踏み込めない、どふだお前軍馬を一匹徵發して來ないか、褒美は何程でもやる、何アに毛を刈つて仕舞へば見分の付くものてない、夜分にでも出掛て行つて盜んで來い」命ぜられた從僕も苦い顏をしたが、通辨をして遣つた僕も驚いた。

鬼面魔語

醉美生

▲最も無邪氣淡白なるべき筈の角力協會に於て、最も卑劣執拗なる紛擾の絕えざるは實に角力道の一大耻辱なり、協會たるもの少しく反省する所あつて可なり。

▲乙女が男子の顏を見て其色を染むるは、是れ中性より女性に移らんとするの徵候なり。

▲自ら哀んで自ら樂むの味を解せざるものは眞に尺八の音を聞きわくること能はず。

▲漱石夏目金之助氏の作は我國未だ嘗て其儔を見ざる妙文といふべし、俳想と洋想と巧みに調和して趣味紙上に溢れ、字句又洗煉にして些の增減を許さず、「倫敦塔」の如き、「吾輩は猫である」の如き又其猫の續篇の如き皆我文壇の珍にして、予は之を以て新春文壇の白眉となす。

▲俳優に惚るゝ女は愛美心より來るもの多く力士に惚るゝ女は名譽心より起るもの多し。

▲和田垣博士中世の暗黑期を以て海鼠的時代と稱し、數多の俳句を以て之を說明し、其鼻目形體明かならざるが如きも而かも一種の主張あり、一種の活動あることを論じて和田垣的論法の奇抜なるに驚かしむ、講義了るや一生徒直ちに先生の後に進み黑板(ボールト)に一句を認む。「和田垣の姿其まゝ海鼠かな」と物好なる學生もあるものかな。流石の先生も此奇抜なる觀察に對して呆然として一語なかりし。

▲小說を舞臺に上すこと昨年來の流行にして今年に至つても尙ほ止ま

ず、東京座は又驚風戀風を出すことゝなりぬ。審美眼全くなく只好奇心に驅られて劇を見んとするの時代は實に禍なるかな。

▲たゞ之れがために利するもの三あり、文士之れがために小說の賣高を增し、俳優之れがために俗客の入場を加へ、繪葉書屋之が爲めに人知らぬ奇利を博す。

▲韓國皇帝は親ら万機を裁決せんことを欲し、巡査の任免に至るまで干涉すること珍らしからざりき、是に於て韓國に勅任巡査の不思議なる現象あり。

▲希臘文明の衰へたるは、學問したる婦人等が結婚することを拒み結婚するものは多く無學社會の婦人に限りしを以て其子孫皆愚昧となれるによるといふものあり。我國の女子教育の如き此等の點に考慮するところあるを要す。

▲「感ずる人は苦み、考ふる人は樂む」といふことあり、こは一は主觀的主我的に流れ易く一は客觀的超絕的に趨き易きよりいへるものにして一理あるの言なりと雖も、又一面より觀ずれば兩者各々特別の苦樂ありて他の窺ひ知ることを許さゞるものあり。

▲今日の學生社會の風俗を紊る原因は確かに貸本屋にあり、見よ貸本屋が下宿屋を巡りて墮落書生に春畫を貸し、學生又之によりて終に魔窟に誘引せらるゝの狀を、裸體畫に腰布を纏ましめたる神經的警視廳は、何が故に貸本屋取締を嚴重にせざる。

▲文學的智識なきものは概れ偏頗なる議論に傾き易く、よく物の大體を捉へて巧みに人に理解せしむること能はず、彼の法科大學教授の沒趣味にして晦澁なる議論をなすは全く之が爲にして、岡田博士の獨り異彩ある講義をなし得るは全く昔硯友派に居りし時のお蔭なりといふべし。

社會

淺草公園（中）

二葉生

碁會所と其營業

魔窟の大立物たる銘酒店と肩を竝べ、兩々相對峙して紅紛を爭ひ魔力を闘はしつゝあるは、淺草公園をして卑褻の地たらしむる碁會所である。碁會所なるものは、創業以來僅々十七八年にしか成らぬのだ。抑も此の營業の淺草公園に起りたるは、銘酒店、揚弓店、大弓店、等の如き營業を開きゐるものが、度々の犯罪の爲めに其營業を禁止され、再び魔力を逞ふして怪腕をふるひ、利慾の亡者となつて宇宙に彷徨することの出來ざる處から、從來隱居仕事などに爲しつゝありし、彼の圍碁仙集などの看板より思ひ付き一面の碁盤と不足の石とを申譯に座敷へ備へ、こゝに媚きたる女を置

きたるが最初てある。

而して圍碁仙集即ち俗に碁會所と稱するものに、紅粉を粧ひたる女を置いて圍碁の相手をさせると云ふを看板に、開業をしたのが淺草公園てはない。神田猿樂町と錦町一丁目とに二軒出來たが、何れが元祖やら本家から取調べることが出來ない。それは明治十八年の春から夏ごろへかけての事てあつた。當時の神田には隨分魔窟が澤山あつた頃て、漸次この營業が增加して來たのてある。處て淺草公園に始めて出來た年度は明かに調查することと困難てあるのだ、何故といふに公園とは云ふやうなもの丶、實は公園外てある新畑町の素人家へ『圍碁集會所』の看板をあげ、引札を公園内の銘酒店、揚弓店、大弓店は云ふに及ばす、飲食店に至るまでに撒布し、且つ諸興行物や辻便所等へ張札をした。其口上文が左の通りてあつた、

口　上

此度妾等多人申し合せ圍碁集會所相開き申し候間永當〳〵御遊來の程願上候最も公園の御遊び所として手前方ほど御輕便に御愉快なる御場所は乍憚有之間敷と存じ候百聞一見にしかずと申す事も御座候得ば一度は是非〳〵御立寄被下候て實否御試しのほど願ひ上げ候以上

淺草新畑町(此間不明)番地

月　日　つ　る　(十八歲)

か　や　(二十歲)

廣告者が自己の年齡を記して引札するも妙で、其目的の奈邊にありしや明瞭なるものであらう。それが段々と惡魔の手に依りて蔓延するに至つたので、現今の碁會所なるものは概して銘酒をすら開業して居られぬまでに、風俗壞亂的營業を專一として禁止され、法律の目をくゞつて他人の名義の下に潛みなどして、この營業を爲しゐるのであるから、詳細の說明を要するまでも無い、で、銘酒店より一層罪惡のバチルスも黴菌も多く、籠つて居るものと言へば言盡して居るのである。

揚弓店の今昔

觀音樣のお堂の後に諸興行物のあつた當時より、今の五區て即ち『弁び』と稱する處に軒を弁べて數十軒あつて、隨分亂暴な眞似をして客を引いたものである。けれども其頃は近時の如く甚だしい程度にまでは墮落せず、野卑なる意味に解するのてはあるが、彼等營業者の女どもを、破れ傘と言囃した位てあるから、未しも營業そのものに重きを置きて、營業以外の營業には重きを置かず、所謂世辭てまるめて、愛嬌てこねて、客の懐中をはたかすを手腕があると同業間て言ひ、世

辭てなく愛嬌てなくある態度て以て金を捲揚るは卑しき所爲と蔭口をきいた程である。が、其頃の彼等は皆眞面目てあつたかと云ふに、それは保證の出來ざること萬々なれども、財を得る爲めに肉身を殺ぐもの少數てあつたのだ。

今日は殆んと五一三六、彼等の如き客商業は皆黴菌製造技手ならぬはなしてある。が、幾分かまだ銘酒店、碁會所等に比して誇るに足る面影の殘るも笑止しい。併し其營業を眞面目に守らぬ證據は、商業道具の弓箭の設備が不完全なのでも知れる、何れの店でも弓弦の筈かけの清潔に卷れたるはなく、蝶結の完全に結ばれたるはなく、箭の完全ならぬのみか、箭羽の揃ふたのは一本もない始末で分る。自然の趨勢で銘酒店に蹴散されて揚弓店は時に、跡を斷んとするまで衰運に趣むいて居る。而して其營業振りはと云へは同じくゝゝならざるを得ない。が、この方に主婦なり出方即ち雇女なりが多くは、一人なり二人なりの小金庫をひかへてゐるから、兎角にお茶を濁して居られるのてある。それで主婦なる者には銘酒店のそれに於ける如き亭主、または黒幕のあるは勿論のことであつて、魔力に引寄せらるゝ亡者即ち客に對する所業は敢へて大差がないのである。

大弓店と空氣銃附類似の營業

大弓店や空氣銃などは、比較的甚だしからぬのてある。何故ならばお囮となる處の化粧者が、銘酒店、碁會所、揚弓店の如く吟味してないから、從つて營業振にも幾分か變はつた處がある。けれども煎じ詰めると、表看板の營業で到底も稼業が立派に立つて往くものでない、裏門にかける招牌で客を釣るにあらねば、鼻の下が乾揚がるは知れたことで、內職の魂膽にうき身を窶してゐるは彼等社會の常である。その內職と云へは皆大同小異であつて、改めて諄々と書く必要もあるまい。殊に夜の十二時すぎからが彼等の怪腕を弄する時て、魔窟の魔窟たる光景は、こゝにあるのだ。それから又、それ等と同じ轍路を歩む營業者も皆それてあつて、生眞面目な擧動を示して居ても油斷のならぬは、彼等の行爲と彼等を使役するものゝ所業である。

書生俳優と魔窟

書生俳優の墮落が近者ほど甚しいものはなく、相當の地位を得たるものは、其地位を得たるものだけ夫れだけに、墮落もまた極點に達し、舊俳優のそれよりも一層苦々しき振舞が多いが、彼等が淺草公園の魔窟と

の關係は何うであるか、イヤハヤ實に驚くに堪へたるものあり、彼等は魔窟の女の爲めに奴隷視され恬として恥ぢざるは、如何に男子の屑とは云へ、昔日の河原乞食にも劣れる言ひ甲斐なき人間である。否、到底人間として見るべきではないが、五輪五躰を備へ四ッ這になつて歩きもせねば、矢張り人間の籍にあるものとして目せねばなるまい。人間として目するからは同胞に斯くの如きものがあるかと寧ろ憐むに堪へぬ。

書生俳優が出入する魔窟とは、即ち銘酒店、碁會所、揚弓店又はそれ等に類似の商業者の家である。而して彼等は出入する處で歡迎されつゝあるかと云ふに、決して歡迎される處の始末でなく、寧ろ鼻摘みで蚰蜒扱ひであるのだ。それに彼等を出入させて、時には客の喰餘りの食物を與へ、爛冷しの一杯も呑してやるは何んの爲めか、勝手元で水の一手桶も汲ましたり、質屋使ひをさせる奴隷に使役する爲めか、否らざれば男妾的の自己の手許へ引付けおく爲めであるか。いな／＼彼等を手懷るは水を汲す爲めでもなく、質屋使ひをさする爲めでもなく、男妾にするなどゝは猶更思ひも寄らぬことで、魔窟の女どもと書生俳優の下ッ端との間には、出會頭の安直戀愛があるらしく考へらるゝけれど、聞くと見るとは大違ひにて、利慾にのみ心を奪ばれゐる女どもだから、假令容貌が少しく秀麗であつた位では、生命を愛の犧牲に供する如き戀に忠實なるものは一人もない。故に書生俳優と魔窟の女との肉躰上の關係は冷淡なものである。

俳優の鑑札を受けて居るだけに、近在を巡業したり府下でも場末の芝居などへ出ると、偶には浮氣娘の引かゝる事がある。さうすると咬へ出して常に彼等の出入する魔窟へ預ける。是れを預かるが一大目的であるのだ、假令一ケ年間コロッチャラさせて置いても、その中に澁皮の剝た素人女一人引張りこますれば、差引勘定は立派につくもので、それが永い間ではない一ケ月も稼がせは宜いのである。魔窟を往來して歩くものとポット飛込んで來たものとは、どんな駈出しの屑屋に鑑定せても間違ひのないて、何處の店へ今度『うぶい奴が引かゝつてるぜ』など乍ち評判になつて、十日經過ぬうちに晝夜繁昌するが例である。其間に否應いはせず虐待して、書生俳優を居候的においた塡補をするのだ、斯かる目的があればこそ出入をさせるので、人間萬事慾の世の中である。況してこの社會ほど利慾に鋭い計算を持つてゐるものはない。

興行物の小歷史

漸次說き來たるごとく、此の公園は魔窟であるが、筆を興行物の方へ轉じて、其方面より觀察せんとするは、淺草公園の近時に於ける興行物の小歷史を明かにして置く必要がある。て、聊か興行物のことに就て述べ、それが如何に魔窟の一分子であるかを、讀者の前にさらけ出さうと思ふ。先づ興行物の定小屋を類別すると三種となる、第一は彼等の所謂『あふり』と稱ふもので、垂幕を開けたり閉めたりしてドンチヤン囃子たて客を招く興行である。即ち彼の玉乘、浪花踊、丸一の太神樂などであつて、隨分昔からある舊式なものである、第二が理化學の應用などゝ聲言する稍新式に屬するもので、第三が珍世界、水族館、木馬の類である。その外に猶花屋敷もある凌雲閣もあるが、これは毛色の變つた部類に屬してゐるのだ。

維新前は暫く措き、維新後の興行物はお堂の西、今の巡査派出所のある邊よりお堂の後へかけ、山雀の太夫、熊の踊、生人形などが勢力を占めて居た。然るに明治十七年の一月より奥山の興行物は六區へ移轉させられた處、その當時は更に客足がつかぬので、小屋主の青木瀧次郎、大熊桑太郎、蟻川儀八、松本桑太郎等の面は十三四名は非常に困難をしてゐる最中、七月十三日の眞盡間小林伊兵衛の小屋より出火し、六區の興行物は殘らず灰燼に歸し、再び燒野原になつて了つた。そこで種々回復策を講じ、役茶屋といつて各興行場へ茶を入れてゐた箸屋の爺さんとて、三度までも遠島の處刑をうけた頑丈ものや、擊劍會の野見鋥次郎、玉乘の青木瀧次郎などいふ、何れも七十以上の利かぬ氣の爺さんどもが、熱心に作戰計畫をする、一方よりは馬道の大瀧勝三郎その番頭の青江俊藏等が切つて廻し、また別に出來てゐる役當——先づ木戸番の元締とも云ふべきもので、毎日三十六人といふ木戸番を差支へなく各興行場へ割當てる、非常な面倒なものであつて到底新門のごとき大親分株でなければ、統御し往かれるものでないのだ——などが大熱心で景氣を添へ、興行物を六區に於て今日の如く隆盛ならしめたのである。

太夫元、太夫、出方

太夫元と云へば興行師である。太夫とは舞臺に立ちて演藝をするもので、出方とは演藝者の補助をするもの、又は場内に菓子を賣り火鉢を運び茶を鬻くものを一括して稱するのである。それ等はこゝでは單に出方

と一括して置くが、何れもその執るところの事務によつて名稱もあるのだ。けれども一々これを詳記するには五頁や六頁の紙幅を塡むるも猶足らざるのであるから、概略を記し置くことにする。

太夫元が太夫及び出方に對する態度は、非常な特別智識があるものでなければ、到底想像にだも及ばざるものあり、壓制と威權とで是非の分別などを口にすることは出來ぬ。彼等の身元を洗つて見れば、皆意外なものばかり、眞面目に話などの出來得るものはなく、只だ大口とベランメイ的遣方である。で、實に太夫等に對する平生の如きも、只だ感情に支配されるのみて、太夫でも出方でも自己の意志に違ふものは、虐待至らざるなき始末である。あんなに酷く扱はれながら何うして、あの太夫元の手に附いて涙を呑んでゐるかと從はしめることは往々ある。殊に魔窟の魔窟たる所以とも云ふべきは、太夫元で自己の使役する太夫ども、就中女性に對する所業の如き、呆然として何とも言ひ現はしやうのない有樣である。宛然太夫元なるものは魔王で小魔の血を吸ひ、肉を喰ひ、肉を鬻がせるなどは普通の事である。以上は多く云ふを好まぬ、また言はずもがなだ。

太夫は如何、これまた驚くばかりの墮落である。男子と言ず女子と言ず、技藝そのものにては中々に小遣錢もつかへぬほど、殘酷に扱はれてゐる。世間では遊女を以て人身賣買だの奴隷制度だのと、喧傳するけれとも一言興行物の太夫に及ばぬは不思議である。遊女等よりも太夫等の境涯こそ、尤とも甚しき人身賣買である、奴隷制度の現代に實施されつゝあるのである。是等は多く舊式の興行物に屬する側であつて、稍新式に屬するものになると幾多趣きも變り、太夫元と太夫との調和が收入の步合などで繫がれてゐるのもある。が、多く太夫は骨敗なもので、到底頭のあがる時はないのだ。故に罪惡を犯して買喰する料を造り、又欝々たる平生の氣晴しをする軍資の調達に汲々するのである。それが何れも人間の弱點に切込んで男は女、女は男を誑かして財を得るを手柄として居る、其心の淺慮さ實に哀れなもので、彼等の念頭たゞその事より外何もないのである。以て彼等の平生如何を窺ふに十分であらうと思ふ。

出方は如何、これまた同じ境涯にあると云へば足るのだ。で、彼等の間に常に絕えざるものは、最も忌はしき姦通沙汰である。亭主が女房を捨てること腐た牡

丹餅を捨つるより心易ければ、女房が亭主を袖にして顧みざること蜜柑の皮を捨つるに異ならぬ趣むきがある。常識あるもの丶眼から視るときは實に驚かざるを得ざれど、彼等はそれが平生のことなれば意に介せず捨つるものも拾らるゝものも合せものは離れものと悟道に入り、今日の愛情は明日の怨敵となるのである。

眼中只金あるのみ

如上の始末であるから、興行物太夫なるものは最も甚しき人身賣買で、奴隷制度の極點であるが、その太夫等が嚴重なる太夫元即ち親方の眼を掠め、風俗壞亂的行爲を如何にして成しつゝあるか、實に疑はしき限りである。一寸考へたところで到底然る事の爲し得べき餘裕のある筈がない、けれどもそれがあるは不思議と云はねばならぬ。そこが地獄の沙汰も金次第で、彼等は只利慾にのみ眼は眩みて、假令いかなる事をしても金にさへなれば眼を眠つてゐるので、自由の眞似も出來るのである

世間は廣いもので物數寄な人間も多い、興行物の女太夫を料理店または待合へ招く野心家がある、表面から呼びにやれば先づ跳ねられるが、手蔓を求めて招けば喜んで來る、來るからは彼等は小遣を得んとする目的であるから。默々の間に秘密契約を締結されるが當然であらう。而して契約によつて得るところの收入の半額は、有無を言せず太夫元の收入に歸するのだ、故に外出を禁じあるものでも客の招きには應じさせる、若し客にして太夫なるもの丶意の如く、契約の締結されざるときは、歸るに土産なく、翌日よりの八つ當り怖しければ、強ても籠絡せんとするが彼等の苦心慘憺たる處であるのだ。それが成熟した年齢者に於ては幾分かは觀過すべきとしても、未成熟者に向つてそれを強ふるに至つては、口を開くべき言葉を持たぬのである。咄!!咄!!!

男太夫の方は割合に此の點は少ない、それは當然の結果で少なくなければ成らないのである。

夜の商賣

飛燕客

競り賣

競つたり賣つたり儲かる商賣ありと、古の經書に見え

たり、さればにやさる程に、利を見て爲ざるは勇なきなりと、天下百家の書に通曉せる今時の人たち、安んぞぬれ手で粟の福の神と喧嘩して、九百九病の大親玉の、貧と縁者になるの愚をなさんや、ローズ物や店晒し、とても大日如來の御覽の前では、何と云ひくるめても、お目が第一曇らぬ鏡、相手あつての商賣なれば、何とかの辨何とかの智を以てしても、相手なしの商賣の出來ないのは、雨へ戰爭の出來ぬと同じ理、お月樣は優しい方、白い兎にお餅をつかせて、おいしさうにめし上つて居なさる間は、下界の人間へお小言はお被仰らずと、うまく見込んで扨てこそ專一の商賣、孫子の所謂一が道、二が天で三が地、四が將で五が法と、五事を以て懐工合を計し、第一番に道傍に店を出し、第二にお天氣の都合を考ひ、第三人の集りさうな地を相して、茲に第四第五の商法を始む、蓋し將法と商法と國音相通ずるなんどは、考へたりと云ふべし、されば其商法の樣子を見るに、時に笑つて人を笑はし時に怒鳴つて人を驚かし、或は賣りさうにして賣らず、賣らずと見せて賣り、千變萬化地雷火破裂彈、虚に乘じ實に應じ、恰も龍の如く恰も虎の如く、火の如く風の如く、欠伸の如く屁の如し、正にこれ兵の奥蘊を極むるもの、なま半可の人間の企て及ぶ處にあらず、何が扨て夫々用のある人々をして、知らず／＼己が店の周圍に集まらしめ、買ふ氣も何んにもない人々を相手にして、識らず／＼財布を出させ、買はせて置いて安いと云はせ、安いと云はせて儲けるが如き、到底馬鹿には出來ぬ商賣なり、この呼吸を以てせば、世人のやかましく云ふ外交なるもの、も少しうまく行きさうに思はるれど、この商人たち、敢て外務大臣たらんとする程の野心も見えぬは、以て小成に安んずるものか、將た又市井に潜んで臍を曲げるものか、されど世間を見渡し申す處、實際ありもせぬ智惠をありさうに見せかけ、チヨコ才を天才と自畫自讃して、ドン栗の丈競べ、猿猴の月を取らんとするは下へ向つての事なれど、栗拾ひ上を見る慾のあぶなさを忘れ、巣立ちも出來ぬ小雀の僻に、一角大鴻と競爭が出來るつもり、踏臺をして丈けの高さを誇るが如き、身の上知らず多い中に、とても市井の臍を曲げると云ふやうな、そんな話せさうな奴は居さうもなければ、矢張り彼等も十包一とからげ、腑甲斐のない代物なるべし、而かも其一擧手一投足、彼が小高い臺上に立つて、懸河の辨を振ふ間は、孫子の兵法に適中せるは何故ぞ、

そも彼の商人の賣物と云ッパ、シャッに手袋靴下ズボン下、タント這入りまする墓口から手に取つて御覽うじましのメリヤス類、ハンチケからタヲルから、シャボンから香水まで、西洋小間物の雜物山の如く積み上げて、右手のかたに競の字を表したる高張提灯を押し立て、悠々迫らざるの態度に緩急相應ずるの術を以てし、兵の妙を盡して商の實を行ふ、笑つたり怒鳴つたり訴へたり、罵つたり而かも周圍の人々をして益多く群らしむ、孫子の所謂、怒而撓之、卑而驕之、佚而勞之、親而離之、をうまく應用したるものか、賣ると見せて賣らず、賣らずと見せて賣るか如きは、所謂攻其無備出其不意なり、又一度氣合を誤る時は、口を酸くして饒舌り乍ら終に三文の德も取らず、空しく疲れもうけの骨折損となる、餘り饒舌れば饒舌り過ぎて虻蜂取らずなり、所謂勝久則鈍兵挫銳こゝの處をのみ込んで、うまい處で手を打つて了ふ、所謂聞拙速、未覩巧之久也の理を知ればなり、故に彼等の仲間中にて、巧者なる奴は、一夜に十圓内外の商賣を爲すと云ふに至りては、豈に感心せざるを得んや、而かもいくら怒鳴つても賣れなければ、元の籠へしまつて了ふ分なれば損はしないに相違なけれど、夫ては鼻の下は奈何して下さる、喉の佛様はみいらになるべし、損はせんと士臺をきめて、ウンと儲ける工風をなす、所謂以正合以奇勝とは之れなるべし。

然し乍ら其始め、未だこの連中が出來た當時は、女房も疊も新らし好きの東京者、面白半分のわい〱が案外多く買物もしたが、近來てはお客の方も、中々人が惡るくなつて、商人が品物を取り出して、まだウンともスンとも云はない内から、お客の方で「さアこれはいくら。」とまぜて了ふので商人益兵法の應用がむづかしくなつて、ブマな奴等は、この寒ンから風に吹き晒されて、一晩かゝつて、二三圓の商賣もヵいとの事、さりとは澆季の世をかこつなるべし、

茲に御當所は芝區琴平樣の御緣日。毎度御贔負預りまする者、仇名をしやもと云ふが、所謂圓轉滑脫の妙を得て、風と見たらば柳て受け、雨と見たなら木立に避ける、露が尾花の風情もあれば、ちんがくさめの可笑味を添へ、言語風采誠に斯道の珍とするに足る、

「さアこれはいくら、

「五十圓!

「高い〱、そんな高價な物ぢやない、高がメリヤスのシャッだ、店賣て八十五錢がつい通りだ、それを斯

う賣るのだ、さアいくら、
「十錢！
「へえありがたう、始めが十錢、さあ唯の一貫、
「五十錢で小便！
「困るなどうも、小便て自分から云ふ奴があるものか小便てなくいくら、
「きず物や店晒ではない、お手に取つて……
「夫れはこつちで云ふことだ、馬鹿々々しい、もうやめだ、買はなければ賣らない
とどん／＼と籠へ入れて了ふ、茲がうまい處にて、すねて見せたなり、所謂恕而撓之なり
「買うよ／＼
「買うのならもつと眞面目につけて下さいよ、もう己も損を承知で、一番景氣よく、さあいくら、たゞの十錢！
「二十錢！
「よろしい二十錢、もう一と聲、
「三十錢！
「三十錢！さあ三十錢、
まだ中々賣りさうもない、而かも其上の聲を聞かざる稍少時、
「三十錢！やつて了へ！
と手をたゝく、之れ出其不意なり
愚按ずるに、八十五錢がつい通りと稱するものを以て、僅々三十錢位の價を以て、どん／＼ぶつ拂いて了ふが如きは、實にめちやのやり方にして、其損少なからざるべきが如きも、其賣店にて八十五錢と稱するものも、原價は大抵五六十錢のものなり、今店にて五六十錢のものを出し、八十五錢はつい通りと假稱す、二十錢に賣ると雖とも決して損することとなし、彼等は薄利にて數でこなすなり、世人この理を知らず、知ると雖もと學ばずして、徒らに一手千金をにぎらんとのみ希ふ、馬鹿なる哉、而かも其馬鹿にして其馬鹿を思はず、百萬の財を一日の中に儲けたと夢みて風邪を引き、下宿屋へ二頭立の馬車で迎ひに來つて曰く、姫君樣一方ならぬ御戀慕につき、曲げて養子になつてくれと云はれたと夢みて、熱病に罹るの類、考て見れば呆れた蛆虫共ならずや、斯る蛆蟲の多い世の中、穢いのは知れた事なり、穢きに馴れて洗濯に精を出さず、半風子の多きをし悲むも亦愚なり、
閑說休題この競賣商人、如何に店晒ばかりを賣るとした處、其資本決して少なからざるべしと思ふべけれど、

恰もおてん屋が親方から屋臺を借るが如く、之れにも亦元締なるものあつて、品物如何程にても供給し、其利益は分割なりとは、萬事重資浮世なる哉、如此んば終には政治家の元締を生じ、美術家の元締を生じ、文學家の元締を生じ、工業家の元締を生ずるに至るやも亦知るべからざるなり、嗚呼元締なる哉元締なる哉、

文士初對面録（その八）　天中天

▲綱島梁川氏　は既に初對面でない、幾度も面會した、其度毎に一種の感に打たれる、それは云ふまでもない、かゝる天才を抱いて、重い病に呻吟して居られるとの、氏自身にとつて如何ばかり殘念なことであらう！二疊の坐敷に我慢して、世間を見るは時折の散策、それも物の十町と離れぬ近傍、話相手といつてたまく〳〵の友の訪づれより外には、古聖の面影を書物の上に見るばかり、自分は業に氏の事を書くにさへ暗涙を呑むを禁じ能はぬ、併し一事慰むべきことは、氏が病室に於て見ゆる如き神々しき有樣が、此頃の氏の文章に現はれて、實に悟り切つた垢ぬけのした、(勿論氏の文章は世に定評はあるが)古聖を忍ばしむる趣のあることで、現代かくの如き文を書く人は先づないことであらう、上田敏氏も綱島さんの文はといつて嘆賞される、其他誰でも感嘆して居る位なもの、せめてもの思ひやりはこれである、あゝ天、人に才を與へて置き乍ら、而して予に健康を與へて置きながら……………ではないか。

社會側面觀

▲奇警なる觀察の投書を歡迎す▲二百字以內葉書に限る▲締切は毎月十八日

▲落書は天誅也　大阪　山明

子供の落書の中には甚だ捨てがたきもの多し、子供や邪心無し、見るもの聞くものを取つく無心に之を落書す、予過日某寺の今度新らしく塗りたる屛に一の落書あるを見るに、人の名を明記して人二人を畫く、一見して或卑猥を直寫したるものなるを知る、人憚つて云はざる處、天則ち小兒を以つて之を筆誅せしめ給ふ、予慄然として心頓に寒かりき。

▲佛畫　本鄕　絹糸

京都の畫家鈴木松年が十年の鑑定で五百の羅漢なものするさうだが、どうか予が所謂眼玉やてこちやんの骨董爺を陳列しないやうにして貰いたい、精神の映現を畫き出すのに形骸骨相を以てせされは能はずといふ、其んな技倆の間は未だ駄目た。

▲矛盾　鳥取　倭鐵生

嘗て資本家と貧亡人とが宴會に招かれしが彼等は共に魚を骨迄シャブッたり。　請ふ人の之れを評するを聞け、曰く、彼れは此の如く儉也、依て富む、希くは吾も之れに習はん、而して他曰く此貧者此の如く醜也、故に貧す、請ふ之を排せんと。而して予は斷言すこれ滔々たる世俗に於ける矛盾の定理なりと!!!

▲晴？雨？　青山　外史

僕が邸の車夫に、「今日のお天氣は如何だらう」と聞いたら「どうも

けんのんてすな」と云つた「今日はお友達と日比谷へ行くんだから降られちや困るなア」と云つたら「よくすると晴れますか知れません」と云つた。

▲鷄と子供　　澁谷　迷亭

鷄を追ひとばすと飼はれてゐる家の方へ逃げる、子供を追ひとばすと自家の家の方へ逃げる、之れを見ると鷄と子供とは區別がない。

▲なまけ者　　下谷　研究家

犬が吠へたと云つて非常に怒つて怒鳴り込んだ人があそ、犬は吠るのが職務だ、その職務を盡したからと云つて怒ると云ふのは解らない、後で聞いたらその人は町内でのなまけ者ださうだ。

▲議論と實際　　埼玉　通學士

或る女學校の家政の教師が貧乏て〳〵非常に困つてゐた、或る大學の經濟の教師が高利借に攻められてゐた、田舍の太郎作が左團扇で歌を唄つてゐた。

▲御規則通り　　神田　社會主義

二六新報が發行禁止に逢つて、直ぐに二六新聞に化けた、平民新聞を止めろと命令が下つたかと思ふと、へイ〳〵と云つて同じものが直言で顔を出す、かう考へて見れば、ツマリ其二六新聞だとか平民新聞だとかの名が政府の氣に召さないので、其内容性質は敢てかまはんと云ふのであらう、八助といへる名で盜賊をしても、今度は九兵衛と改名してドロをやれば可いと云つたやうなもんかれ。



變り物待遇論

楞陰

變り物とは何ぞや。其爲す所を見れは奇なり變なり、其行ふ所を察ずれば怪なり、異なり、或時は天馬鬣を振ふて雲間を馳騁するが如く、或時は頑石心なくして打てども響かざるか如し。彼れや到底常識を以て之を律し、常則を以て之を規すべからず。是れ別に變り物待遇の道なかるべからざる所以なり。

天才も一種の變り物なり。狂人も一種の變り物なり。されど此兩者の性格は未だ單純にして、予がいふ所の變り物の如く變化自在、奇怪至極の妙相を呈することを能はす。變り物は其一足を天才の域に投じて他の一足を狂人の境に置く。彼れを遇するに天才を以てするは

餘りに買ひ被りて却て滑稽に墮し、彼れを傷つけ[illegible]人を以てするは餘りに見くびりて寧ろ殘酷に過ぐ。予が彼に附するに變り物てふ最も穩挺なる名稱を以てする即ち之か爲めなり。

途上一人の乞食兒あり、憔悴の顏色、襤褸の衣服、步武蹣跚として小石に躓くも將さに倒れんとするが如し、彼れ滿身の熱血頭上に逆流して直ちに懷中を探り、財囊を倒まにして歸る。夜中孤兒院の幹事なるもの訪問し、辯論滔々として慈善事業の効能を說き巧言令色以て幾何の寄附を求む彼れ冷笑して一厘の錢をも與へず、是れ世の目して變り物とする所なり。

一官長あり、不德の行爲をなして恬として耻づるなく、屬僚皆目を背けて知らざるが眞似す。彼れ一人立て侃々、愕々、而を犯して其破廉耻を罵り、以て大に官長の嫉視する處となる。其日小使にして爛醉をなし、爲めに公務の錯誤を來せしものあり、小使泣て事情を訴ふれども同僚之を憐むものなく、免職懲罰のことを論して煖爐(ストーブ)會議今將さに酣なり。彼れ即ち辯護甚だ勉め、僅かに小使の留職を成就したるも大に同僚の排斥する所となる。是れ亦世の目して變り物とする所なり。然れども是れ變り物の最も平凡なる一二の例のみ。彼[illegible]く、嗜好相同しからざれば親戚故舊の人と雖も[illegible]一枚も出さず。其心動けば生命懸けの難事も笑て之を爲し、其氣に合はざれば脛の毛一筋を損する仕事も決して之を爲さず、彼は利害を打算せず、理義に拘泥せず、意の欲し情の趨く所を慾まにして憚る所なし。彼は滿身我儘の凝塊にして、全心感情の結晶なり。所謂浮世の義理は到底彼の累に堪へずとする所にして、所謂人生の責任は到底彼の懶さに忍びずとする所なり。

世俗が彼を以て大いなる厄介物となし、誹謗至らざるなく嫉忌極まらざるなき又一理なきにあらざるなり。

蓋し文明の進步するにつれて社會の秩序漸く整然となり、アルフアよりヲメガに至るまで一切の事項悉く常識の二字を以て處理せられざるなく、世は漸くかゝる變り物を容るゝの餘地乏しからんとす。然れども常識のみの社會は彼の平調のみの音樂のごとく到底長く厭惡の念を起さゞること能はず、是に於て最高音と最低音を以て諧調を作るが如く。神は天才と狂者とを生じて社會の單調を破り、尚最も微妙なる合奏(コーラス)を作るべく此變り物を生じて、平凡なる社會をして一種特殊なる光彩を放たしめたり、變り物の社會に存する一種の

天惠なりといふ誰か又異論あるべき。

然らば即ち此變り物を待遇するの道如何。彼の所謂天才保護、狂人保護の如く、之を政府又は篤志者の手に委ねて之を庇護矯正するの策を取るべきか。曰く否大に否。斯の如きは實に此變り物をして其特色を滅して自殺せしむるの道なり。彼を待遇する社會全躰の寛大にあり、社會全躰各自の同情にあり、彼を責むるに浮世の義理人生の責任を以てすることなく、彼を用ふるに其特長特質を以てすべし。已に天才を崇めて之を保護するの論あり。已に狂人を憐みて之を保護するの設あり。奈何ぞ此變り物を待遇するに多少の寛大と多少の同情とを以てする能はざることあらんや。

夫れ悍馬濫りに鞭撻を加ふるも決して走らず、頻りに轡啣を施すも決して止まらず。たゞ其情を慫まゝにして應變の術を施す。遙かに駑馬を後へにして、殆んど駿騏と首を比べんとす。彼の變り物を待遇するの道當さに悍馬に對するの心得あるべきなり。人間を噛み殺すといはれたる悍馬鬼鹿毛も小栗判官之を御すれば盤上に四足を並べて柔順小羊の如し。若し變り者を御する小栗判官の如きを得ば、待遇法の上乘と謂つべきなり。

今や人は現社會の風潮にかぶるゝこと餘りに甚しく、一種の天惠たる變り物を目するに全くの厄介物となし、啻に其特長特質を發輝する能はざらしむるのみならず、益々其反抗執拗の氣を昂めて動もすれば人を噛み殺さんず勢を呈せしむ。是れ予が禿筆を咬みて變り物待遇論を草したる所以なり。

四十八癖（下）

茶人

(二十六)爪をかむ癖

爪に火をともすは貧の相なり、されど火をともすと噛むとは甚だ異れり、臍を噛むとは後悔の謂なり、されど臍と爪とは田樂と團子程の相違なり我之れを甞て大道の賣卜先生に聞く曰く、爪を噛は大に其運命を害ふと、果して然らは火とらすの貧ともなり臍を噛むの悔ともなるあらんか、あぶない哉

(二十七)鼻をすゝる癖

しやくり上げて鼻をすゝると云へば、上げたり下げたりするやうにてをかしけれど、可笑しきは水鼻をすゝる姿のみなり、これもお通夜の席ては可笑しとも見えず、要するに貧相な陰氣な癖なり、泣く事を一名ベソをかくとも云へど、ベソとは何處にあるものなるや我未だこれを知らず。

(二十八)[illegible]をする癖

何？東京の人は皆買食だと、屁理窟を云ふなさう云ふ意味ではないわ、お前たちのやうにおでんの立食ひ、飴湯一パイをやりたがる事を云ふのだよ。

(二十九)袖口をいぢる癖

致ておぼこ娘が縁談をもちかけられた時にばかりは限らず、借金の言ひわけの時にも亦屢之れを見る、長屋の嬶連が立話の間之れをやらかすと亂てもとるのかと思はれてむさぐろし。

(三十)頬をふくらす癖

さなきだに牡丹餅なるを、いかにふくらませたればとて何に成るぞ、而かも若い女たち、奈何云ふつもりかよくふくらます、古人句あり曰く

むつとして蛙の顔にお灸かな(？)

(三十一)にきびをつまむ癖

八幡神社の拜殿に控ひます右大臣左大臣のそれならで玄關三疊の城主に舉げられ、稍もうの顰に御苦勞などうれの身、未來の大豪傑をして憐れむべしお鍋の頬口に凹まさる、心外ぢや／＼と机に據つてにきびをしぼる、

(三十二)奇食をする癖

何と云ふ不風流、沒趣味、無文、俗物ぢや、逃げるといふ法があるか何んだとわしが蕎を喰ふ姿は全て鬼だ？恐ろしいと、俗物め、蝸牛のバタ燒きは未だ出來ないのか、早く蚯蚓のだしを作れ！

(三十三)隣の癇氣を頭痛に病む癖

熊さんも熊さんだが、おかめさんもおかめさんだ、毎日あんな夫婦喧嘩は第一外聞がよくない事だ、何倅が喧嘩をしたと、倅は小供だが熊さんは大人だ。

(三十四)手をもむ癖

氣をもむよりはましなれど、さりとはあまり上品な癖でなし、幇間專らこの癖あり、この癖あるもの聲は必ず猫撫で聲なり、

(三十五)眼をしばたゝく癖

婆さんと泣虫とは云ふも管なり、何んでもないにぱち／＼とやる、さりとはせはしない癖なり、まさかに蛙の祟でもあるまじ。

(三十六)肩を聳かす癖

如何に聳かせばとて安んぞよく富士と築波とに比せんや、數年前の書生奈何云ふわけか大低この癖ありたり、自らは餘程の豪傑のつもりなりしが、肩の高きと豪傑とそも何の緣因かある。

(三十七)物にすれる癖

故子規句あり曰く

物にすれて揚屋出る夜の朧かな。

これ等は意氣なすれ方なれども、彼等は一と口に甚助と云ふなるべし

(三十八)つまみ食をする癖

そんじよそこらにありふれたるもの、至つて陳腐なる癖なり、

(三十九)晝寐をする癖

早寐して朝寐をばして起きいてゝ
めしを喰ふたら晝寐をぞする、

(四十)樂書をする癖

この癖、日本人に最も多しとかや、さりとは心外な事なり、白壁にいまはしきもの庶せきまでかきちらしたるを見て、いまいましとや思ひけん、一人の男、矢立の筆に墨したゝかにふくませて、紙太にかくなん記しつ、

此の處樂書無用

(四十一)眼鏡を氣にする癖

宗教界の名士本多氏、壇に立つや縷々數百言、其間常に其眼鏡を氣にする甚だし一句解いては眼鏡をはずし一言說いては眼鏡をかく、某生其煩きを見て試みに其數を算せしに、四十五分間の說教中、眼鏡を取つたりかけたりする數平均凡そ二百度を下らずとは……さてはや。

（四十二）鉛筆をなめる癖

なめれば一寸の間濃くつくからなるべし。而し一度なめると後はつかなくなるものなり、つかないからなめるなり、なめるからつかなくなるなり、かくして常に癖となるなり。

（四十三）法螺を吹く癖

山伏に非らず、辨慶の腰にあるは何物ぞ、されどそは昔話、今は喇叭にお株をゆづりぬ、さらば法螺吹きを喇叭吹きと云ふともよきや洋行歸りの吹手などは猶更の事なり。

（四十四）口をまげる癖

私の知つてゐるお嫁さんが身持ちになつて、酸いものを非常にたべたい丁度梅雨時で青梅がたんとある時だつたので、これ程酸いものはない、喰べたければ喰べろと旦那樣も串戯者、八百屋から五合買つてあてがつた處、天下晴れて喰はれるのだから妻君大悅び、喰つた／＼、とう／＼五合一とも殘さずやつて了つた、そうしたら病が起つて口が曲つて了つた、御當人も驚だが旦那樣も驚いた、お醫者樣に見て貰らうやら、姑樣が怒るやら、大騷ぎをした、而し五日ばかりたつたら癒つた、けれどもこれは癖ではない。

（四十五）頭を撫る癖

坊さん圓い頭をつるりとやる、若衆旦的の前でエヘーとやる、坊やよい子だら奥さんにこりとやる。

（四十六）獨言を云ふ癖

馬鹿だれ、第一誰れも居ないのに一人で話をするなんざ正氣の沙汰とは思はれない馬鹿々々しいぢやないか、いくら話し立てたつてウンともスンとも返事の仕手があるぢやなし、而し一人でゐて笑はない奴は想像力の乏い人間だと誰かゞ云つた事があるが、して見るとこの僻のあるものは差當り文豪となるべき先天的性質を有してゐるとても云はうか、

（四十七）つんとすます癖

固之れ女の特有癖なりしを、奈何した事か世の開けるにつれて、近來男にも中々この癖あり、恐按んずるに癖は眞似るに始まり惡むに終る、男女を眞似たるものか、又癖は喜ぶに始まる、男女を喜ぶか爲めか、

（四十八）頭をふる癖

さりとは厄介な僻なり、ウンと云へウンと云へ、よしか／＼と母親のきつい御苦勞、この良緣をはずして又とこの樣ながあるものか、尤も年は少し取つて御座る、顏も少々はいもゝありますが、それだつて人間として通用しないと云ふのぢやなし、何に顏や容貌の事を云ふのは若い内の事さ、今に母さんが云つた事が一々成程と思ふやうになります、ね、わかつたれ、はて未だそんなに母さんを弱らせますか……

と云つて僕はこの癖を非難するのではなし、右も左もウンよしウンよしと、頭を縦にふるやうでは世の中は暗黑だ。（完）

血來氏が青年の二大通弊に答ふ

本郷一青年　風光山人

噫吾人青年よ君等は氏か二月一日發行の中央公論に吐露せられたる青年の二大通弊を目にみ耳にして果たして如何の感か是れ有らん吾人實に噴飯に堪へさる也

氏は吾人青年を以て恰も社會を知らさる者の如く愚考する也眞なる哉近眼者流は老朽者に多しとは吾人青年のみならす苟も萬物の靈長たる人間と生れたるからには誰れか此社會を知らすして社會に存在するとを得

へきや氏は社會を知らさる者を頓馬也と云ふ然し實際社會を知らざる者有りとせは其に即ち頗聞ならん然れとも所謂社會なる者は吾人か述ふる迄もなく千差萬状にして一日一意之を知る甚た容易ならさるのみならす甚た隙然たらさるや必せり然るに氏は吾人青年の幾部分か牛肉屋の二階を知る其女中を知るか或は不夜城の光景を熟知し時に藝妓と交る是れ吾人青年の全躰か皆然るかの如くに見做し社會を知らすと云ふか如きは實に事實に疎遠なる看察と云はざる可らす殊に氏は其裡面を知るは是れ眞に其表面を知るの一手段一進路なるとを知られさるか然く皮を剝いて始めて其骨に達す得へきを知られさるか氏の看察こそ實に一二の數字を知らすして其十の數字を知らんとする誤謬の看察と云はさる可らす况や氏の近眼に於てをや

見よ吾人青年よ毎月氏か手に入る憐むへき笑ふへき者にして僅に十人を以て數ふると云ふに在らすや今之を一年に計算すれは僅か百廿人に在らすや百廿人は恐か千人にても苦しからす氏は其千人の外に天下果たして幾千萬人の青年有るかを知られさるか此に至りて氏の近眼も亦甚たしきに驚嘆せさるを得さる也

・然く氏の言の如く吾人青年の中には吾人の住へる下宿屋に精通せさる者又社會主義を知らさる者或は牛肉屋の二階を其女中を不夜城の光景に藝妓を知る者も是れ在らん然れとも其は甚た小部分にして全躰か然るを在らさることを近眼の氏は知らさる也

近くに見られよ吾人を始め天下幾千万の青年皆吾人の將來を自覺し遠大なる高術なる理想を持し汲々たるを知られさるか然るに氏は其小部分を以て全躰を看察せんとする是れ到底近眼の氏には及ふ能はさるのみならす如何に近眼識者と雖も絶對的に爲す能はさる所也

　而して所謂吾人の時代は須らく吾人の解決すへきことにして老朽者近眼者の敢て嘴を容るゝ余地在らさる也然く世の老朽者近眼者は大に覺悟せられよ近き將來に於ける吾人今の青年は是れ正しく國家百年の大計を持し我帝國の完美を盡くし我勢力を世界に發展進涉せしむる者たることを換言すれは吾人青年は飽く迄老朽者近眼者を以て擁護せられ滿足すへき者に在らさる也

　されは吾人は唯此に借問す氏は吾人人類の吾人青年の職分を知られさるか將た又氏は如何なる所以を以て吾人青年か社會を知らさる社會を知るの低度なるヿを說明せらるゝや

　（血來曰、然り、君のいへるやうな人ばかりなりと思惟せば世は太平無事也、而も吾人は一人なりとも君のやうな人あるを喜ぶ而して予は實際近眼也、常に十度の近眼鏡をかけ居るヿを自狀す呵々

編輯談

▲此度から大に文藝ものを加へたのは、多少趣味をして博からしむる覺悟なので、餘程復活したと同時に勇飛したと見られたい

▲否それぱかりでない、他の方面もいよ〳〵力を延ばす積りで居るとは數號前より讀者の已に知れるところであらう

▲次號に名文章論を寄せらるべき快諾が與へられたのは、確定のが土井晩翠氏、藤井健次郎氏、後藤宙外氏、村上專精氏、三上參次氏、志賀重昂氏、それから辻新次氏。登張竹風氏、綱島梁川氏、芳賀矢一氏等であるが此内に一二は漏れるかも知れぬ

▲それから投書家に一言告げて置きたいのは、文章は立派でも論が陳腐だつたり、新らしくても文が駄目であつたり、所謂空論であつたり、又無暗に長篇であつたり、書きツ離して苦心の跡のないのやらで、好意には背くけれども沒にするのが多い、可成精選して投ぜられたい

▲本年の一號は夥しく賣れが早くて、多數の愛讀者に鼻を明かしたので、二號には思ひ切つて印刷部數を一層多くした、處がそれも賣切れて了つてお氣の毒な向が少くなかつた。實に御申譯ない次第である

▲その代り本號は尙一層思ひ切つて部數を增加して、特に二版の直ぐ出來るやうに紙型を其まゝ殘してあるから、御注文にはいくらでも應じ得られやうと思ふ

▲本號に女子大學の事を書いたが、これに就いて所見のある方は遠慮なく投書せられたい、女子大學學生生活的な材料は最も歡迎する、其材料の積堆した頃之を發表することにして隨分趣味のある有益なものがあらうと考へられる

新刊批評

▲名流百家 家庭の模範　中村鈴子著　博文館發行

閨秀の聲高き現今の名夫人に就て其の平常の趣味好尚を尋ね、平易流暢なる談話體を以て記述せるものなり。全篇合せて三十家、之を權門の部、名士の部、軍人の部、實業家の部の四部に分てり、其談は宗教、文藝の高尚なるより家事經濟の瑣細なるに至るまで殆んど洩らす所なく、興味深くして且つ實益多き書なり、今の女學生などが之を讀みて裨益する所少からざるべし。（定價三十八錢）

▲對譯 英米名家詩抄第二集　文學士若月保治編　内外出版協會發行

本集にはメレデスの「三人の歌女」を初め二十篇の英詩を收め、且つ譯文及び註解等を附し初學者の參考となる所多し。フートンの「小川の逸」殊に詩趣豐かに、ブライアント、ウオルヅヲスの作又吟ずべし。濫りに泰西大詩人の名を語りて而かも作物の一篇をも知らざる者未だ少からざる今日、かゝる眞面目なる書の出づるは喜ぶべし。（定價二十五錢）

▲明治史第二篇 財政史　博文館發行

太陽の臨時增刊なり。第一篇序說、第二篇明治初年より第一議會に至るの財政、第三編第一議會より日清戰時に至るの財政、第四篇日清戰時の財政、第五篇日露戰時の財政、第六篇貨幣制度の改革を說き明治の財政を記すること頗ろ詳かなり。附錄明治三十七年史は少しく疎雜なるの譏を免れざるべしと雖も事最近の事にかゝるを以て多少の趣味なしとせず、兎に角博文館ならでは出來ぬ便利なる書にして、明治の財政を知らんとするものは此書を措いて他に其術なかるべきなり。（定價三十錢）

▲世界お伽噺第六十七編 うかれ笛　岩谷小波編　博文館發行

アイルランドの話なり。先きのうかれ胡弓に對してかく名をつけたるなり。又川上、貞奴等のお伽芝居となつて演ぜらるゝことあらんか。

▲職分論（下）　若月保治譯　内外出版協會

上中の篇とも既に吾人之を批評したり、今更再び云々するの要なしとて單に紹介にのみ止め置くべし、菊版にて活版鮮明、（定價三十錢）

▲繪はがき倶樂部　大阪文德堂發行

中には稍々まづきものなきにあらねど、一體に美しく意匠も凝らされたり、印刷も大阪のものとしては上出來なり、只餘りに新機軸を出さんとして多少嫌味あるは惜むべし、吾人は全堂發行のスカシはがきこそ見たしと思へり

▲天鼓 第一號　文藝社發行

久しく鳴かず蜚ばざりし田岡嶺雲氏主筆となつて發行せる文藝雜誌なり。卷頭揭ぐる所の霹靂鞭は殆んど嶺雲氏の筆と覺しく、放犢牛の如く一世を風靡するの勢なしと雖も又多少注目すべき價値なしとせず。只動もすれば文藝を見るに頑固なる漢學者流に傾く所あるは惜むべし。宮崎來城が紅葉の文を非難し、德川氏の文學を說くに全く俗文學の方面を看過せるが如き最も頑迷度し難きを見る。近松に現はれたる心中は別に奇拔なる節もなけれど霹靂鞭にあらはれたる嶺雲と此篇にあらはれたる嶺雲との相矛盾せるが如き所一寸面白し、兎に角青年文士の人氣を得て實行よからんこと疑なき雜誌なり（定價十五錢）

人

投稿規定

▲二十四字詰にて句讀を切り楷書にて認むること

▲締切は毎月十八日最終便まで

▲投稿者諸君は住所本名を記入ありたきこと

中央公論定價表

		郵税共
一冊	金拾貳錢	金拾參錢
六冊	金六拾五錢	金七拾壹錢
十二冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓卅貳錢

中央公論廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金貳拾錢
四分の一頁	一回	金貳圓五拾錢
半頁	一回	金四圓
一頁	一回	金八圓
表紙の二三四一頁	一回	金拾五圓

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を拂渡局所を**東京駒込**局と指定せられたし弊社印鑑は駒込支局へ差出有之候に付決して途中にて盜取せらるゝ憂なし

一郵劵代用の場合は必す壹割增のこと

一誌代、廣告料とも總て前金にあらされは御需めに應せす

一前金切の節は帶封に朱書いたすべくに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし

一雜誌の發送を以て領收の證といたすべくに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

一御拂込み金額の端金の場合には左表に準し御勘定可致に付御注意相成たし

一金七拾壹錢以下　一部金拾參錢の割

一金壹圓參拾貳錢以下　一部金拾貳錢の割

都下大賣捌所

神田表神保町	東京堂
神田裏神保町	上田屋
京橋銀座四	東海堂
本郷四丁目	文明堂

明治三十八年二月廿八日印刷
明治三十八年三月一日發行

發行兼編輯人　武田鼐松
印刷人　清水金右衞門

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九）反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

●日露戰爭活動寫眞新フイルム

●遼陽總攻擊ノ實况及衞生隊ノ負傷兵收容●我艦隊ヨリ旅順口ニ於ケル敵艦隊砲擊ノ實况●旅順口ニ於ケル敵兵大砲ノ陸揚ケヲナシ之ニ依テ我兵ト砲戰中戰死スル實况●南山附近ニ於ケル我兵野營準備ノ實况●遼陽總攻擊後我兵休養及點呼檢閱ノ實况●南山ニ於ケル我騎兵トコサック兵ノ衝突●大石橋附近ノ激戰●九連城ノ大激戰●我騎兵及步兵カ新橋并ニ品川停車塲出發ノ實況●其他戰爭ニ關スル寫眞十數葉○寫眞ノ長サ五十尺ヨリ五百尺迄各種

○弊店技師藤原幸三郎氏ヲ第○軍從軍寫眞班トシテ戰地ニ派遣シ活動寫眞及幻燈用ノ原版ヲ撮影セリ

●活動寫眞器械

一大形金八拾圓ヨリ二百五十圓迄○輕便活動寫眞瓦斯器械共一揃六拾五圓○
一舶來器械二百圓以上○フイルム一尺四十錢以上

●幻燈器械

○アセチリン瓦斯幻燈二白熾直徑二丈寫四拾貳圓○同一丈五尺寫卅七圓○同一丈一尺寫廿圓●改良石油五本燈一丈五尺寫廿七圓○同二段形卅圓○同一丈三尺寫廿五圓○同一丈寫廿圓○同七尺寫拾圓○同五尺寫五圓

幻燈映畫

●日露戰爭實况幻燈映畫第一回（十二枚一組金貳圓四拾錢）同第貳回（十五枚大形金三圓）同第三回（廿枚四圓）同第四回（廿枚四圓）同第五回（廿枚一組沙河大會戰ヨリ旅順口背面攻擊マデ）●露國ノ軍事（五十枚）十二枚ニ付貳圓四拾錢●露國ノ滿洲經營（五十枚）十二枚ニ付貳圓四拾錢●日本ノ軍艦（五十枚）十二枚ニ付貳圓四拾錢●日本軍艦ノ大砲及艦內（四十五枚）十二枚ニ付貳圓八拾錢●日本ノ將校（二百餘枚）十二枚ニ付貳圓四拾錢●日露戰爭ノ狂畫（二十四枚）十二枚ニ付貳圓拾四錢

●定價表ハ御報次第進呈ス

東京新橋南金六町
電話特新橋三七八
吉澤商店幻燈部

中央公論

No. 192

前號概目

▲注意　但し右は賣切れに付注文に應ぜず

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可（定價一部十二錢）
明治三十八年三月一日發行（毎月一回）
發行所　東京本郷區西片町十番地　電話下谷九一一九番　反省社